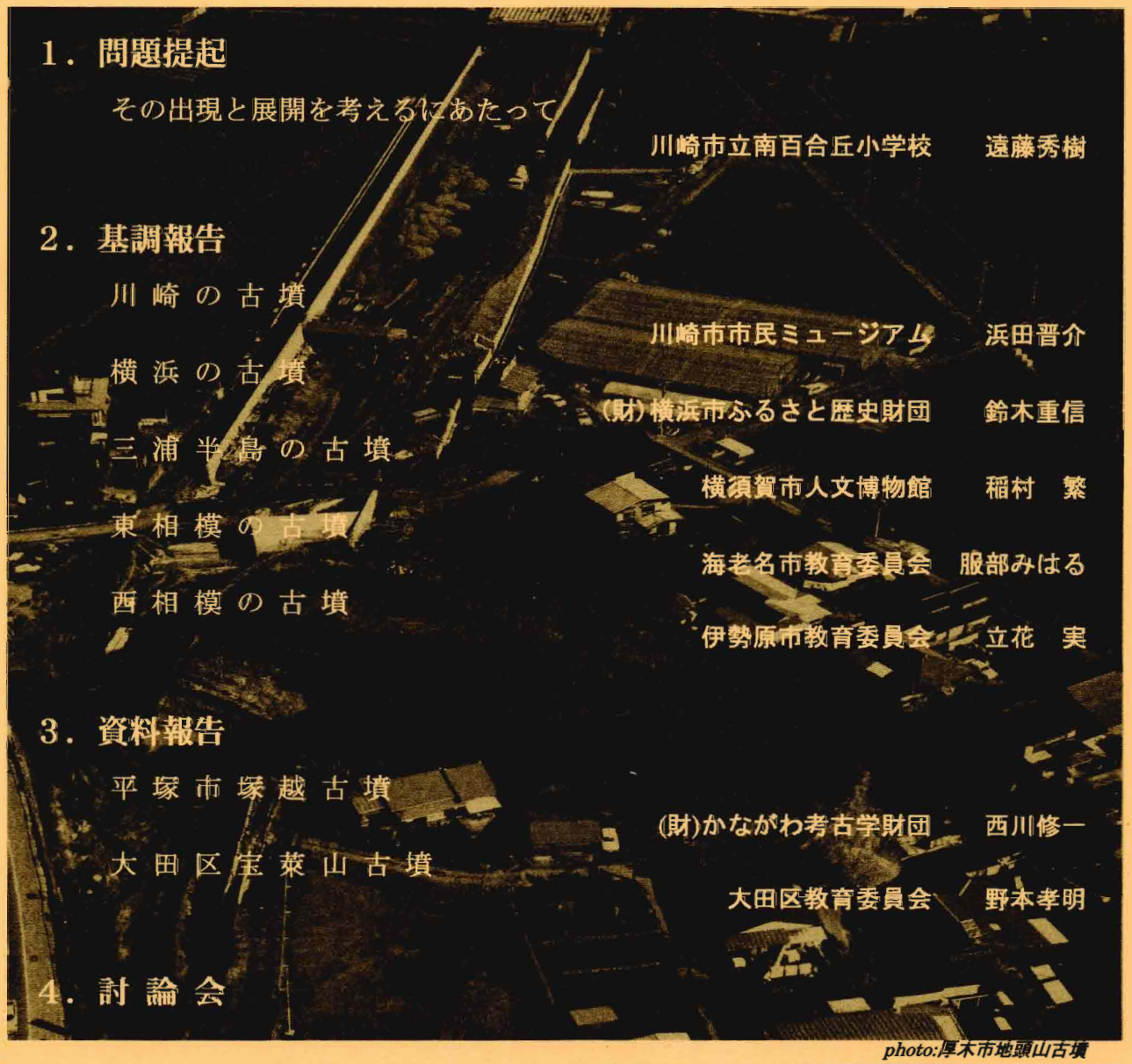
考古学入門講座

神奈川の古墳

―その出現と展開―



1．問題提起

その出現と展開を考えるにあたって　川崎市立南百合丘小学校　遠藤秀樹

2．基調報告

川崎の古墳　川崎市市民ミュージアム　浜田晋介

横浜の古墳　(財)横浜市ふるさと歴史財団　鈴木重信

三浦半島の古墳　横須賀市人文博物館　稲村　繁

東相模の古墳　海老名市教育委員会　服部みはる

西相模の古墳　伊勢原市教育委員会　立花　実

3．資料報告

平塚市塚越古墳　(財)かながわ考古学財団　西川修一

大田区宝萊山古墳　大田区教育委員会　野本孝明

4．討論会

photo:厚木市地頭山古墳

1998. 2. 22

神奈川県考古学会

日　程

開場　９：１５

開会　９：３０

１．問題提起

９：４０～１０：１０	その出現と展開を考えるにあたって	遠藤秀樹

２．基調報告

１０：１０～１０：３５	川崎の古墳	浜田晋介
１０：３５～１１：００	横浜の古墳	鈴木重信
１１：００～１１：１０	**休憩**	
１１：１０～１１：３５	三浦半島の古墳	稲村　繁
１１：３５～１２：００	東相模の古墳	服部みはる
１２：００～１３：００	**昼食**	
１３：００～１３：２５	西相模の古墳	立花　実

３．資料報告

１３：２５～１３：５０	平塚市塚越古墳	西川修一
１３：５０～１４：１５	大田区宝萊山古墳	野本孝明
１４：１５～１４：３０	**休憩**	

４．討論会

１４：３０～１５：３０	討論１
１５：３０～１５：４０	**休憩**
１５：４０～１６：４０	討論２・質疑・まとめ

閉会　１６：４０

その出現と展開を考えるにあたって

遠　藤　秀　樹

はじめに

近年、奈良県東南部の大和古墳群で日本最古の箸墓古墳に先行すると考えられる「古墳」の存在が報告され、大きな波紋を呼んでいます。

全国的にみても、巨大な墳丘をもつ古墳に先行する「墳丘墓」の存在が明らかになってきています。

神奈川でも同様に点的にですが、前方後方型周溝墓や円型周溝墓が発掘されています。それらを含めて神奈川での古墳出現までの過程を明らかにすることと、出現期古墳がどのように展開していくかを明らかにすることにより、空白の時代と言われている３・４世紀,加えて５世紀の日本の、東国の,歴史の一端に触れてみることが、本日のテーマです。

１．古墳とは

古墳とは,弥生時代までの共同墓地から独立した,ある特定個人の墳丘墓です。古墳作りが盛んであった３世紀末から７世紀初頭までを一般に古墳時代と呼んでいますが，その300年の間に古墳はさまざまに変化します。そこでふつう前期(３世紀末～５世紀)・後期(６世紀～７世紀初頭)の２つに区分して考えます。本日話題にするのは,前期の古墳です。

前期の古墳は,周囲の平野をみおろすことができる小高い丘の上や台地の端につくられました。その多くは前方後円墳(台形と円形を組み合わせたような形),前方後方墳(台形方形を組み合わせたような形)という独特のかたちをもち，墳丘の表面には葺石が敷き詰められ,埴輪がめぐらされています。内部には,竪穴式石室や粘土槨をつくり，遺体や副葬品を納めた木棺を置きました。副葬品は,銅鏡や玉類,宝器,鉄製の武器(剣・刀)や農工具などがあります。初期大和政権の首長(大王)のものと推定される古墳は,奈良盆地の東南部,大和古墳群にあり，長さ200㍍以上です。

２．時代背景

古墳の作られた時代の前から,中国の歴史書をみながら時代背景にせまってみたいと思います。

日本(倭)が歴史上に登場するのは，紀元前１，２世紀のことを伝える『漢書地理志』で，倭人の社会は100余国に分かれ，定期的に漢の楽浪郡に使いを送っていたようです。

57年には『後漢書東夷伝』に,後漢の光武帝から,倭の奴国王が印綬をうけた記事があります。

107年には,「倭の国王師升等,生口１６０人を献じ,請見を願う」と『後漢書東夷伝』が記しています。これは，倭の国王とありますが，奴国の名はありません。これは奴国を省いたのではなく，別の国を指しているのです。つまり，奴国ではない国が後漢にでむいています。やはり，いくつかの国々が大陸と関係を持とうとしていることがうかがわれます。それによって,国間の関係がうまく保てなくなり「倭国大乱」と呼ばれる内乱が始まるのです。

「桓・霊の間,倭国大いに乱れ，更々相攻伐して歴年主なし」すなわち，174～188年の桓帝と霊帝の時代,倭国には大乱があったことを意味します。そして，倭はしだいに統合され，30ばかりになっ

たと記録されています。「・・・旧百余国。漢の時朝見する者あり，今使訳通ずる所三十国」(『魏志倭人伝』)

さらにこの三十の国々を治める国があらわれました。それが,卑弥呼の国「邪馬台国」です。

「倭国乱れ,相攻伐すること歴年,乃ち共に一女子を立てて王となす。名づけて卑弥呼という」

その卑弥呼は,239(景初３)年,大夫の難升米らを魏に送り,銅鏡100枚などを賜ります。

すなわち，魏とは友好関係が結ばれます。

247年に邪馬台国の卑弥呼は狗奴国と戦いを始めます。しかし卑弥呼は,戦争の最中に死んでしまいます。『魏志倭人伝』には,戦争の結末については書いていませんが，「卑弥呼死するを以って大いに塚を作る。径百余歩,徇葬する者奴婢百余人。とあります。この記事が問題で，卑弥呼の墓はどこにあるか,古墳なのか。また，前段の邪馬台国の位置とからんで決着をみないところです。邪馬台国は,その後,男王を立てるがまとまらず，壱与が即位して266年に晋に使いを送ります。

高句麗広開土王碑文には,391年に大和政権が,朝鮮半島に進出し，そこを拠点として高句麗と戦ったことが記されています。

421年には倭王讃が，宋へ朝貢して以来,珍・済・興・武(倭の五王)が歴史に登場します。

391年の高句麗広開土王碑文までの１２５年間は，中国の史料に倭人および倭国は姿をあらわしません。

「記録なきところ墳墓これを語る」といいますが,まさに古墳をもとに当時の日本を考えるしかありません。

３．古墳の被葬者

古墳にはいくつかの埋葬施設があるのが普通です。それらの古墳の被葬者の歯を調べたところによると複数で古墳に葬られている男女は,ふつう夫婦だと考えられますが,それは６世紀半ば以降で,意外なことに兄妹(姉弟)の関係ないし男性とその子が父系の血縁によって合葬されているのです。このことは，女王卑弥呼と男弟王との関係につながりそうです。

倭の五王は,宋に朝貢し，権力を誇示したことはわかりますが,過去にいわれたように大阪府のあの大前方後円墳が「仁徳陵」・「応仁陵」などとするのは不確かです。墓誌でも発見されれば別ですが,全くわからないといってよいでしょう。ですので,被葬者像を推測するのが,精いっぱいでしょう。大山古墳(伝仁徳天皇陵)の年代も「記紀」では,天皇が亡くなるのが５世紀初頭ですが，古墳の年代は５世紀中ごろと半世紀の食い違いあります。

４．ものさし

このようにみると、発掘調査どころか、立ち入りが制限されている「陵墓」とその他の古墳とを同じ土俵で比べるには、出土土器が比較の対称となります。また、全国的なものさしで墓の新古を検討する場合には大切な指標となります。ただ、その場合は、在地の土器と搬入(模倣)土器との共伴関係が大切です。今日は、1993年に日本考古学協会の新潟大会で行われたシンポジウムの土器編年と『前方後円墳集成』編年を用いて、墳墓の時期を考えてみたいと思います。

おわりに

何をもって古墳とするかと考えた場合、研究者によってその規定はさまざまです。

その代表的なものに、前方後円墳が古墳時代を特徴づける指標だと考え、古墳時代を前方後円墳の時代と定義するものです。その場合、前方後円墳成立以前に墳丘墓の段階を設定し、墳丘墓の要素が飛躍したのが古墳であるとするものです。具体的には,前方後円墳の特徴として,

（１）鏡の多量副葬志向

（２）長大な割竹形木棺

（３）墳丘の前方後円形という定型化とその巨大性

を挙げました。

さらに,

（４）古墳を三段に築造する原理

（５）埋葬遺体を北枕にする考え

が付け足されます。

もうひとつの考えは、初期前方後円墳の実態があいまいであることを指摘し、前方後円墳と「前方後円型墳丘墓」の区別は不可能であり、古墳時代はさらにさかのぼるとする考えです。

ここで、奈良盆地東南部の大和古墳群をみててみましょう。宮内庁が1968年に墳丘上で採集した特殊器台形埴輪や壺形埴輪の編年を根拠とする箸墓古墳が最古の古墳だといわれてきました。しかし、同様の埴輪がみつかっている古墳はいくつかあり、その中でも最も箸墓古墳が古いとする根拠は薄いものでした。ところが、1994年から95年にかけて、箸墓古墳の北側にある大池の護岸工事の際確認された周溝の底などから布留０式と名づけられている土器が出土したことから、その仮説は立証されました。よって、箸墓古墳が定型化された最古の古墳ということです。

一方、奈良県桜井市教委や奈良県立橿原考古研究所は、纒向石塚(93m)やホケノ山古墳(80m)から新しい事実を発見しました。それによると、ホケノ山古墳の周溝から、布留０式土器が出土したことです。つまり、ホケノ山古墳が完成した後、周溝に投棄された土器が、箸墓古墳の築造時に使用、廃棄された土器と同じものであることがわかりました。石塚は第８次の調査で、墳丘から纒向１式土器が出土し、さらに築造時期がさらにさかのぼることがわかりました。

前者の考え方によると、箸墓古墳以前のホケノ山からが古墳で石塚が前方後円型墳丘墓ということになります。(しかし、この考えは最近訂正されており、箸墓古墳以前に地域性を打ち破る動き,つまり要素の飛躍が始まっている。そうした過渡期を経て箸墓が出現するとみる。)

後者の考えに拠ると、「前方後円型墳丘墓」には新しい言葉ができ、「纒向型前方後円墳」であり、畿内第Ⅵ様式期に大和政権の胎動をみるということになります。最近では、前方後円型墳丘墓も多く発見されており、さらに円丘墓の突出部がバチ型前方部への接近が確認されています。

さて，神奈川県ではどのような様相で古墳が出現し、展開されるでしょう。本日はこれから発表される方々によって明らかにされることでしょう。

引用・参考文献

甘粕　　健　１９９４『東日本の古墳の出現』
石野　博信　１９９５「前期古墳の新事実」季刊『考古学』５２号
近藤　義郎　１９８３『前方後円墳の時代』

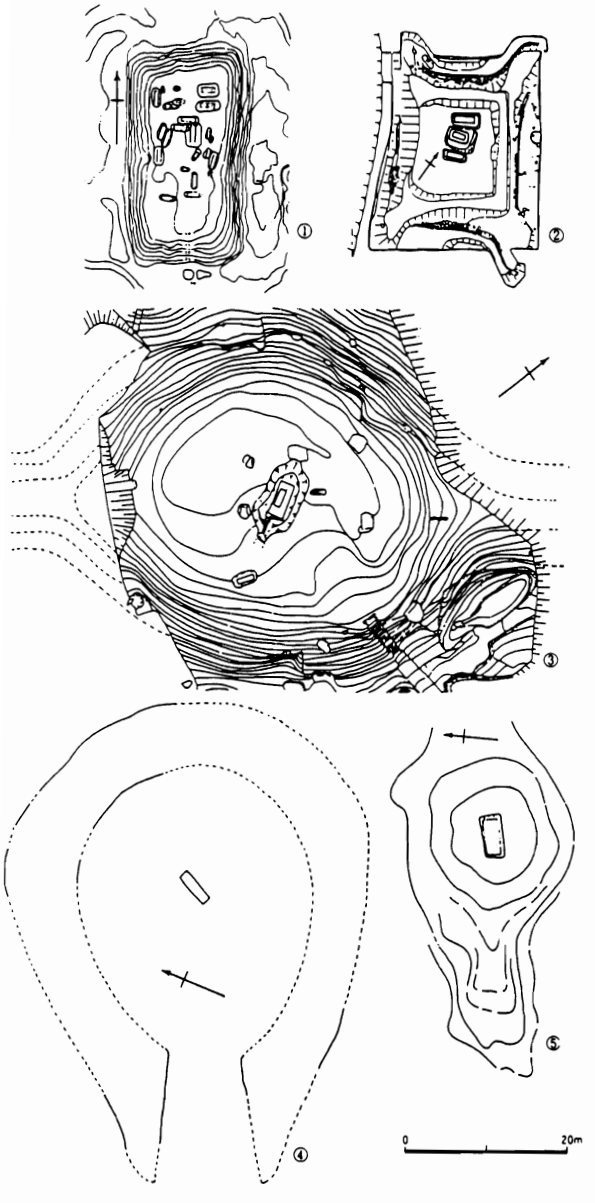
近藤　義郎　１９９１『前方後円墳集成』
久保　哲三　１９８６『日本国誕生への道』
田中　良行　１９９５『古墳時代親族構造の研究』
都出比呂志　１９８９「前方後円墳の誕生」『古代を考える　古墳』
寺沢　　薫　１９８６『矢部遺跡』
寺沢　　薫　１９８８「纒向型前方後円墳の築造」『考古学と技術』
原　秀三郎　１９８４「日本列島の未開と文明」講座『日本歴史』１原始・古代１

第１表　　年表

世紀	西暦年	できごと
1	５７	倭国王の遣使奉献に対し金印紫綬。「後漢書」
2	１０７	倭面土国王師升らは安帝に生口１６０人を献じる。「後漢書」
	１７４ １８８	桓・霊の間、倭国大いに乱れ、更々相攻伐し、歴年王無し。「後漢書」
3	２３９	卑弥呼、魏に朝貢。「魏志」
	２４７	狗奴国との交戦　「魏志」
	２４８	卑弥呼死。男王立つが、まとまらず、１３才の壱与王となり治まる。「魏志」
	２６６	壱与？晋に貢献。「晋書」武帝紀
4	３９１	倭、海を渡りて百残□□□羅を破り、以って臣民と為す。(好太王碑文)
5	４１３	倭、貢物を献じる。「晋書」
	４２１	倭王讃、宋に朝貢。「宋書」

第２表　　各地の土器編年と前方後円墳編年の併行関係

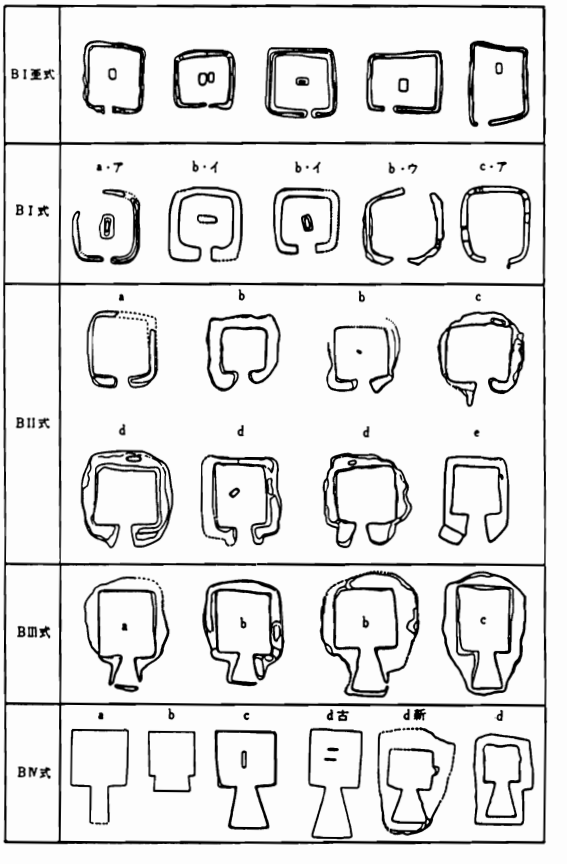
新潟ｼﾝﾎﾟ	西川（相模）	『前方後円墳集成』編年	赤塚（東海）	寺沢（大和）	実年代
1	I	纒向石塚		畿内第Ⅵ様式	１９０年
2			廻間 I	庄内	
3					
4	II				２５０年
5			廻間 II		
6		ホケノ山		布留0	
7	III	1期　箸墓		布留1	３００年
8		2期　円筒埴輪 I 式	廻間 III		
9		3期　円筒埴輪 II 式		布留2	
10		4期	松河戸	布留3	
		5期　円筒埴輪 III 式			
		6期　円筒埴輪 IV 式			
		7期			
		8期　円筒埴輪 V 式　埼玉稲荷山			４７１年
		9期			
		10期			



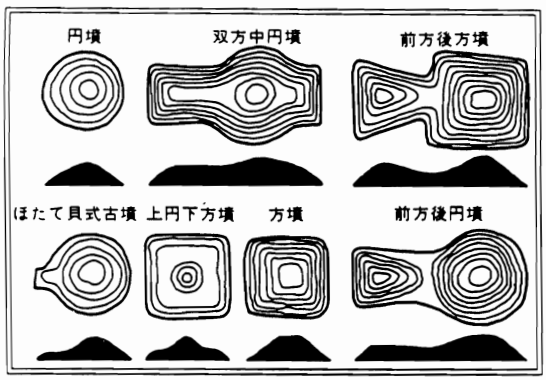
弥生時代の墳丘墓

①大阪府加美遺跡	1世紀
②島根県仲寺仙寺山１２号墓	2世紀
③岡山県盾築墓	2世紀
④千葉県神門４号墓	3世紀中葉
⑤岡山県宮山墓	3世紀後葉

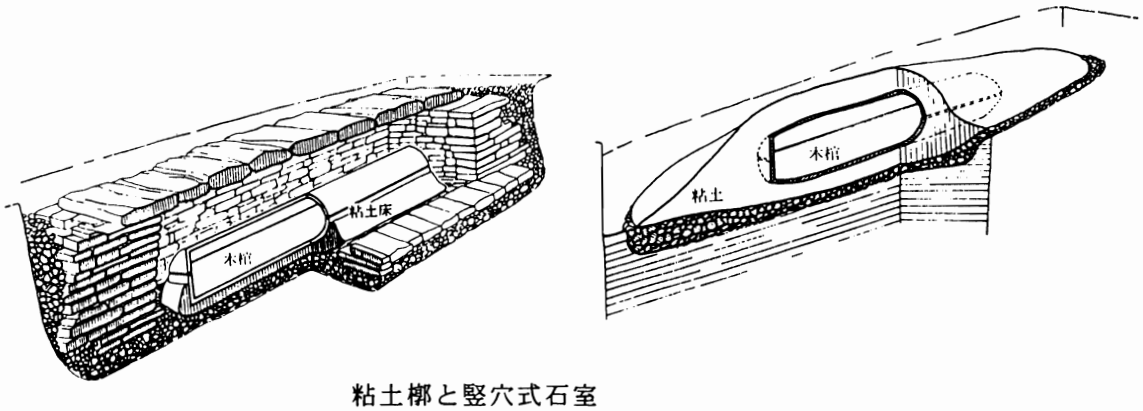
都出比呂志　１９８９　「古墳の誕生と終焉」
『古代史復元』６より



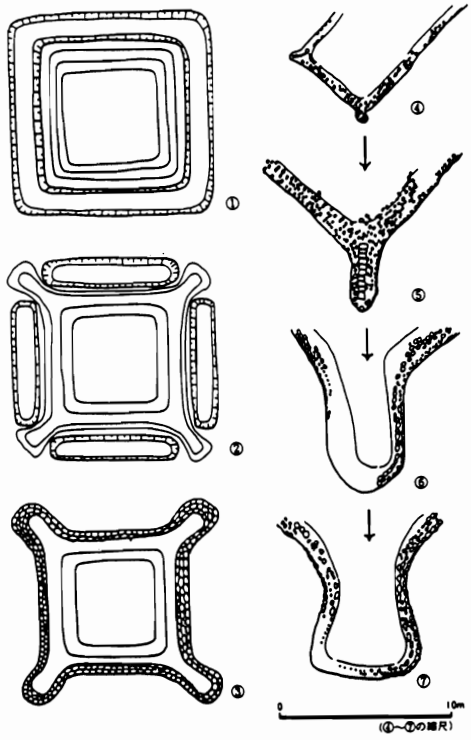
特定通路の出現から前方部へ
田中新史１９８６「東国の古墳出現期とその前後」
『東アジアの古代文化』４６号より



いろいろなかたちの古墳
久保哲三　１９８６『日本国誕生への道』より



粘土槨と竪穴式石室
大塚初重・小林三郎１９８２『古墳辞典』より



弥生時代墳丘墓張り出し部の変遷

方形低墳丘墓（方形周溝墓）の四隅の陸橋が張り出しに変化したものと考えられる。（①～③）。張り出し部は短小のものから徐々に幅と長さを増し、バチ形に広がる変遷を示す。

④広島県宗佑池墓　1世紀
⑤鳥取県阿弥大寺墓　2世紀
⑥島根県仲仙寺山12号墓　2世紀
⑦島根県宮山４号墓　2世紀

都出比呂志　1989　「古墳の誕生と終焉」『古代史復元』６より

川 崎 の 古 墳

浜 田 晋 介

1．前方後円墳出現以前

川崎市域では弥生時代中期に方形周溝墓が現れ、以後古墳時代前期まで存続します。このなかで、弥生時代末期から古墳時代前期にかけてのものは、新作小高台遺跡、伊屋之免遺跡、緑ケ丘霊園遺跡第２地点などから確認されていますが、方形周溝墓の平面形態が円形や前方後方形に変化した例や玉・剣・鏡といった副葬品は発見されていません。したがって、川崎市域で方形周溝墓の伝統を打ち破る動きは、現在のところはっきりしていません。

2．前方後円墳の出現

現在、最も古いと考えられる前方後円墳は、川崎市幸区の白山古墳と横浜市港北区の観音松古墳の二つです。両者は鶴見川の支流・矢上川を挟んで対峙しており(第１図)、その距離は約 500m です。この白山古墳や観音松古墳が築かれた地域は、古墳が密集することで知られており、総称して「日吉・加瀬古墳群」と呼んでいます。白山古墳は全長 87mで、前方部から粘土槨が１つ、後円部から粘土槨２つ・木炭槨１つが発見され、とくに、最初に埋葬施設となった木炭槨からは鉄製農工具や鉄製武器とともに、小型の内行花文鏡と京都府椿井大塚山古墳出土と同型鏡の三角縁神獣鏡が出土しました(第２図)。また観音松古墳は発掘調査の記録が、公表されておりません。したがって詳細はわかりませんが、70～90mの前方後円墳で、後円部に２つの粘土槨があり、そこから銅製・鉄製武器、碧玉製品とともに大型の内行花文鏡が発見されたと言われています。

白山古墳、観音松古墳とも関東地域では大型の前方後円墳であること。木炭槨・粘土槨という竪穴系の細長い埋葬施設であること。そして大型の鏡が副葬されています。このような条件を満たす古墳は、一般に畿内型前方後円墳と呼ばれ、出現期の前方後円墳の典型とされます。とともに両古墳が、畿内地方の古墳造りのルールに則って築かれたことをも意味しています。ではどちらが先に造られたのでしょうか。これを決定するには出土した土器が両者の古墳とも公表されておりませんので、他の要素からそれを推測しなければなりません。しかし他の出土品では土器ほど違いが現れないためか、過去の研究では白山古墳を古いとする説と、観音松古墳を古いとする説の両方が存在しています。そこで出土品以外、ここでは埋葬施設に注目して、その新旧を考えてみましょう。

その判断材料となるのは、白山古墳の後円部の埋葬施設です。後円部には中央に木炭槨、その両脇に粘土槨があります。そしてその断面の状態を見ると両側の粘土槨が、表面に近い部分にあって木炭槨の上方に一部はりだしているのがわかります(第２図下)。このことは、木炭槨があとから造られた埋葬施設ではないことを物語っています。もしこの位置にあとから木炭槨を作ろうとしたら、当然粘土槨の一部が壊されているはずです。それがありません。ここから白山古墳では、粘土槨に先行して木炭槨が造られたことが判明します。一般に東国において前期古墳の埋葬施設は、圧倒的に粘土槨が多く採用されます。しかし、この粘土槨が普及以前に、木炭槨などの粘土槨以外の埋葬施設が存在したことが、最近の出土土器の検討から判明しつつあり、白山古墳の例もこれと合致します。これらの

ことから、粘土槨に先行した木炭槨が存在していると推測し、木炭槨のある白山古墳が古く、粘土槨だけの観音松古墳の方が新しいと考えられます。

その編年的位置づけは次のように推測しておきます。白山古墳と観音松古墳で採用された埋葬施設の粘土槨は、石組の埋葬施設(竪穴式石室)を簡略化した結果、畿内で誕生したものです。両古墳が畿内の古墳造りのルールに則っている以上、畿内地方で粘土槨が登場しなければ、白山古墳・観音松古墳の粘土槨は造りえないことになります。これを前提にして、畿内地方の粘土槨の出現時期を見てみると、「前方後円墳集成編年」の3期にあたります。そして、木炭槨が粘土槨に先行するので、白山古墳を2期に位置づけたいのですが、通常、小型倣製鏡は2期には副葬されないため、白山古墳の木炭槨を3期の前半、白山古墳・観音松古墳の粘土槨を3期の後半～4期の前半に位置づけておきます。

3．小規模円墳の出現

日吉・加瀬古墳群で前方後円墳が造営される一方、この地域とは一線を画するように、平瀬川流域でも古墳が築かれるようになります。その最も古いものが川崎市高津区伊屋之免古墳です。この古墳は久地・下作延古墳群にある、径 17mほどの小さな円墳です(第2図右上)。埋葬施設は2つの粘土槨に類似したものがありましたが、副葬品は少量の鉄製武器と玉類と土器だけでした。築造された時期は出土した土器の様相から4期です。古墳の形や規模、そして副葬品を白山古墳と比べれば、両古墳に隔絶したものがあることがわかるでしょう。しかし、畿内型前方後円墳ではない、いわば在地の古墳とでも言うべき前期の古墳が、畿内型前期古墳の存在する地域とは、異なって築造された意味は大きいといえます。古墳が築かれた地域が、その古墳に眠る豪族の支配地域であったという前提のもとで考えれば、伊屋之免古墳の築造に際して、日吉・加瀬地域を支配していた豪族がどのように関わったのか、あるいは関わらなかったのか、など他にもいくつかの問題点が提起され、単純に白山古墳や観音松古墳だけでは、川崎の古墳の出現を理解することはできません。実際久地・下作延古墳群では出土した土器から、5期の築造だと類推される川崎市高津区津田山2号墳が存在し(第3図上)、伊屋之免古墳の豪族の系譜は引き継がれます。このことは久地・下作延地域の豪族が、それほど脆弱な勢力ではなかったことの証と言えましょう。

4．古墳の展開

日吉・加瀬古墳群において白山古墳から始まり、観音松古墳と引き継がれた豪族の墓は、現在判明しているものでは、川崎市幸区加瀬台4号墳(了源寺古墳；4期)・・横浜市港北区矢上古墳(5期)・・川崎市幸区加瀬台8号墳(6期)と引き継がれていきます。

加瀬台4号墳は明治 43 年に偶然の機会から遺物が発見されたものです。現在残っている出土品は鏡と鉄斧だけです。埴輪や土器も出土したと言われていますが、現品は不明です。矢上古墳は昭和 11 年に発掘調査され、鏡や玉類、鉄剣などが出土しています(第3図上左)。加瀬台8号墳は平成3～6年にかけて発掘調査を行いました。その結果、この古墳が方墳であることが判明し、その時期は出土した土器から5世紀後半であることが確認されました(第3図下左)。

一方久地・下作延古墳群では、伊屋之免古墳・・津田山2号墳に続く6期の古墳の姿は、現在行方不明ですが、7期になると日吉・加瀬地域と久地・下作延地域の中間に位置する、梶ケ谷古墳群中の

川崎市高津区西福寺古墳が、築造されるようになり、以後日吉・加瀬古墳群と久地・下作延地域は格差が解消し、どちらかといえば後者の地域が数・質とも豊富になる傾向がみられます。西福寺古墳は埋葬施設が未調査ですが、埴輪が樹立する古墳です(第３図下右)。この円筒埴輪を参考にすれば、７期(５世紀後半頃)に造られたことが判明し、川崎市域では、最も古い埴輪となります。この埴輪を製作した窯跡が川崎市宮前区白井坂窯跡で、現在のところ神奈川県内で唯一の埴輪窯となっています。そしてこの後は、川崎地域でも埴輪が古墳に樹立されるようになりますが、その多くは久地・下作延古墳群中や隣接した古墳群に採用されるようになります。

また、消滅ししまったため、はっきりしたことは分かりせんが、日吉・加瀬古墳群では浅間塚古墳、久地・下作延古墳群周辺では二子塚古墳という、小型の前方後円墳が８期以降に築かれました。

５．勢力範囲

横穴式石室導入以前の古墳について、その代表的なものを駆け足でみてきましたが、それぞれの古墳に眠る豪族が、どの程度の地域を支配下に置いていたか、自然地形、古墳の分布状態、その他の考古学的な成果などを考慮して、大胆に推測しておきましょう。

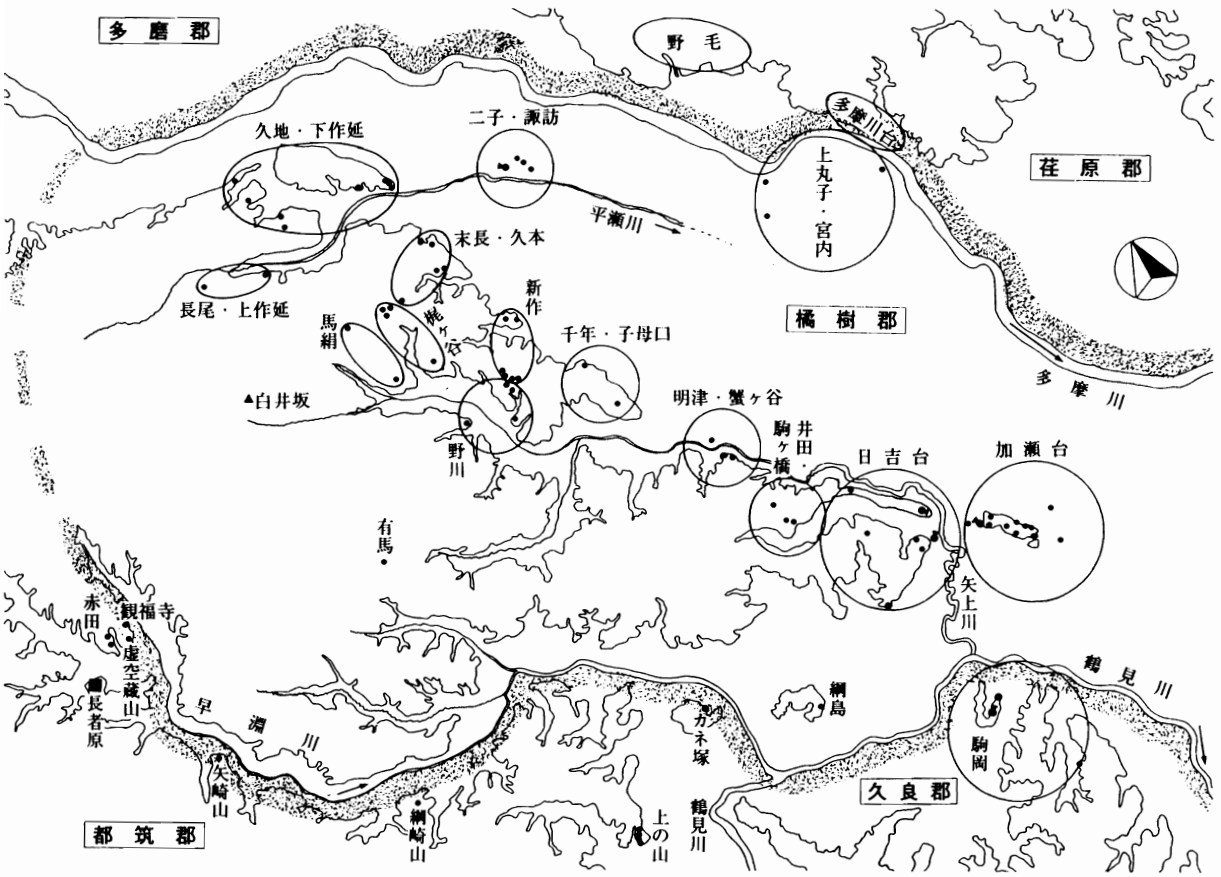
まず東の境界は東京湾です。北の境界は多摩川が設定できます。これらは主に自然地形による推測ですが、多摩川以北には、蓬莱山古墳、亀甲山古墳の初期前方後円墳が存在していることからも、ここが一つの境界になると思います。南は鶴見川本流がやはり自然地形から考えられます。さらに西は早淵川沿いの上流から、平安時代の都筑郡家の推定地である長者原遺跡を通り、古墳の分布が空白となる川崎市多摩区登戸を結んだラインが想定できます(第１図上)。この勢力範囲が後の橘樹(たちばな)郡へと繋がっていくのだろう、と考えています。

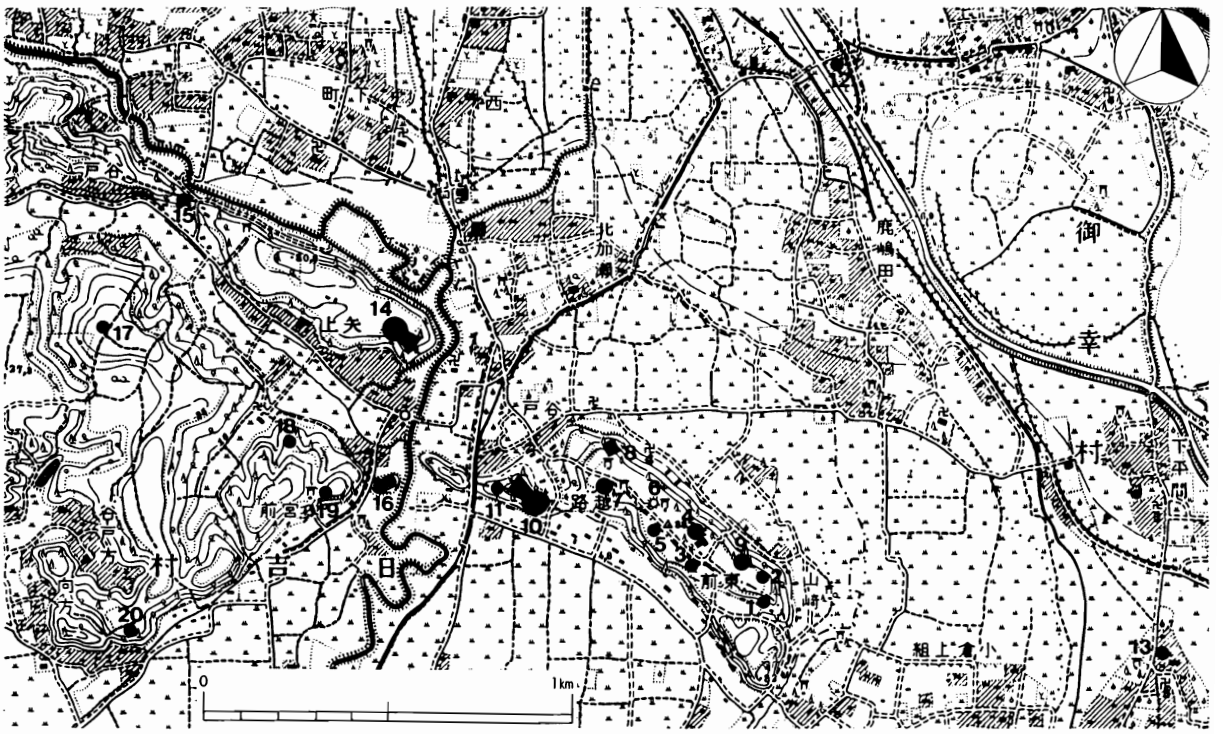
ま と め

古代橘樹郡、現在の川崎市南西部と横浜市北部の一部を舞台に、最初に古墳を築いたのは、日吉・加瀬古墳群中の白山古墳で、畿内型前方後円墳であることからや京都府椿井大塚山古墳と同型鏡の三角縁神獣鏡を出土したことに現れているように、畿内地域との結びつきが大変強い古墳と考えられます。それまでの墓制である方形周溝墓からは、予想できないほど規模的にも、質的にも突如とした飛躍があった、という印象を受けさせます。その後日吉・加瀬古墳群とは違った地域である久地・下作延古墳群からも、畿内地域との結びつきが希薄な、いわば在地の豪族も台頭し始めます。その勢力は古墳の形や大きさ、副葬品の質や量からみて、日吉・加瀬古墳群が優勢であったことは間違いありません。しかし５世紀後半を境にして次第に両地域のバランスは崩れ、次第に久地・下作延古墳群の地域が優勢に展開していくようになります。

参考文献

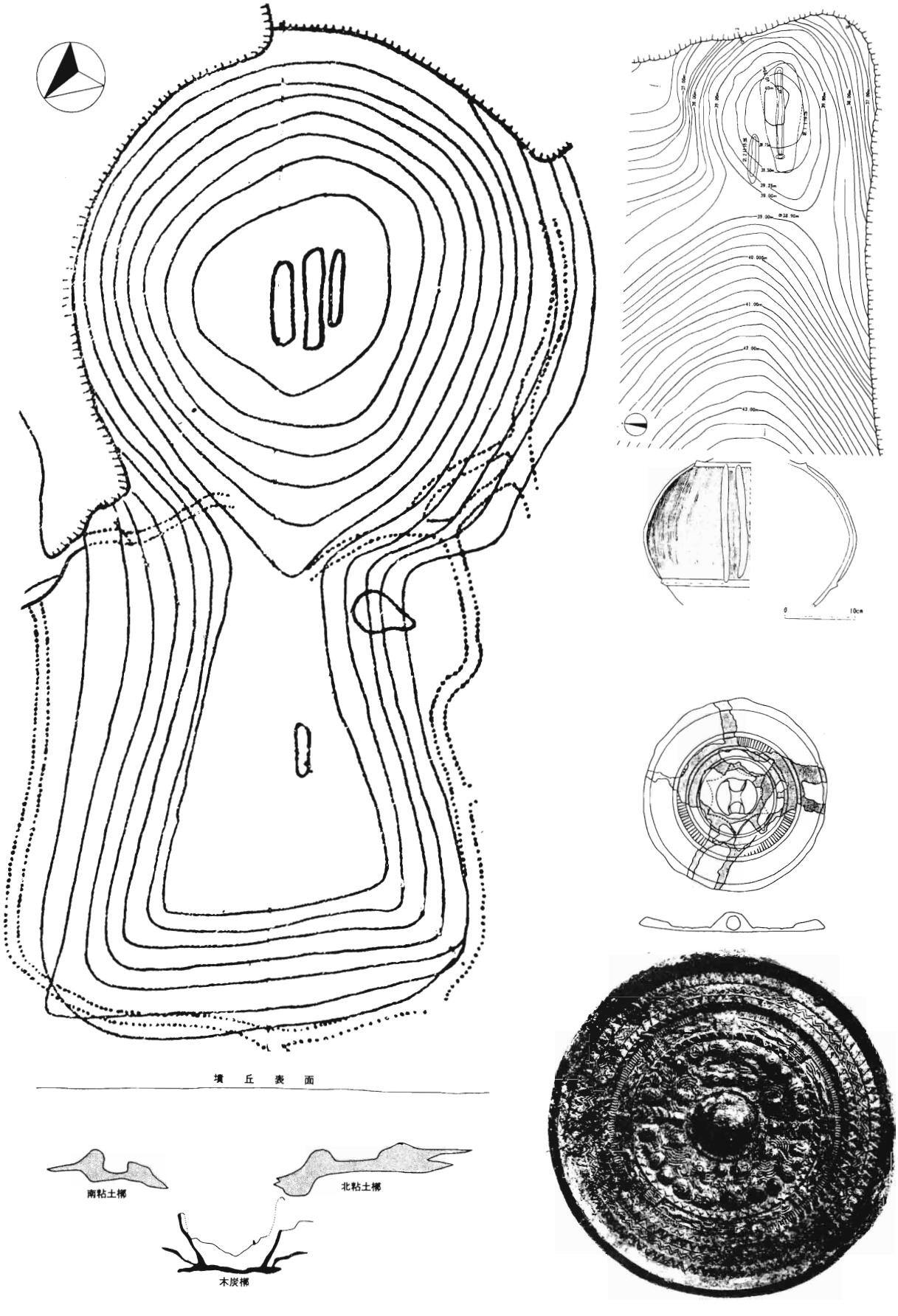
伊東秀吉 1965 「川崎市津田山古墳」『川崎市文化財調査集録』１ 川崎市教育委員会
伊東秀吉・持田春吉・村田文夫 1987 『川崎市高津区久地伊屋之免遺跡』高津図書館友の会
柴田常惠・森貞成 1953 『日吉加瀬古墳』三田史学会
柴田常惠・保坂三郎 1943 『日吉矢上古墳』三田史学会
竹石健二 1984 「西福寺古墳発掘調査」『県史跡西福寺古墳－保存整備報告書－』川崎市教育委員会
浜田晋介 1996 「古代橘樹郡の古墳の基礎的研究」『加瀬台古墳群の研究』川崎市市民ミュージアム



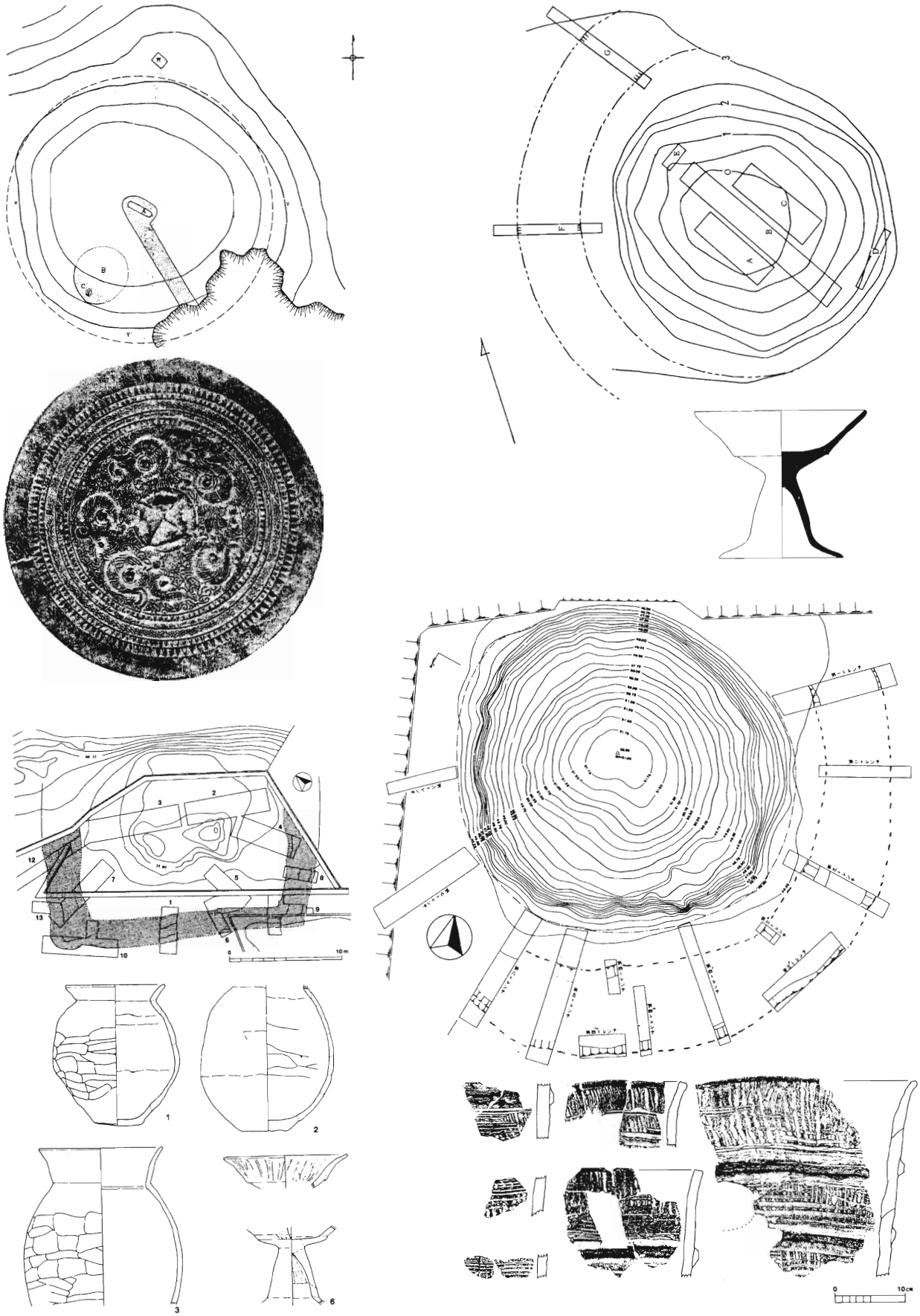


1.加瀬台1号墳、 2.加瀬台2号墳、 3.加瀬台3号墳、 4.加瀬台4号墳（了源寺古墳）、5.加瀬台5号墳、 6.加瀬台6号墳【経塚】
7.加瀬台7号墳、 8.加瀬台8号墳、 9.加瀬台9号墳、10.白山古墳、11.第六天古墳、 12.銚子塚古墳、 13.塚越古墳
14.観音松古墳、 15.矢上古墳、 16.浅間塚古墳（墳形・向きは推定）、17.日吉台1号墳、18.日吉台2号墳
19.日吉台3号墳、20.日吉台4号墳

第１図　古代橘樹郡の範囲と古墳群(上)、日吉・加瀬古墳群



第２図　白山古墳(左上)と伊屋之免古墳(右上)



第３図　矢上古墳(左上),津田山２号墳(右上),加瀬台８号墳(左下),西福寺古墳(右下)

横浜の古墳

鈴木重信

1．地域のあらましと古墳の分布(第1図)

横浜市域の地形は、台地と丘陵と低地からなり、東側は東京湾に面しています。台地と丘陵は、ほぼ磯子、都筑区佐江戸町、川崎市溝の口を結んだラインの東側が「下末吉台地」、西側が「多摩丘陵」と呼ばれます。さらにこの西側には「相模野台地」が広がります。河川は、中小12水系58河川ありますが、全体的に河川延長が短く、流域面積が小さいのが特徴といえます。

古墳は、水系ごとにあるまとまりをもって分布しています。横浜では、鶴見川流域の分布密度が高い傾向を窺うことができます。境川流域では古墳分布が非常に希薄で、現状では内容の判明しているものがありません。古代律令制下においては、武蔵国と相模国にまたがっています。

2．定型的古墳出現以前の様相(第2図)

この時期の墳墓は、弥生時代以来の方形周溝墓と考えられます。東耕地1号や稲ヶ原A地点1号例は、一辺の溝中央が途切れてブリッジ状をなしています。市道高速2号線 No.6の例は溝が全周するタイプで、墓地としては前代から継続しており、計7基が調査されています。稲ヶ原A地点では単独で存在し、東耕地遺跡では2基が連接しています。同時代のムラの一画に営まれる点、前代よりもさらに限定された造営となっている点などは共通しています。また、高坏や器台などの供献形態の土器群に東海のものが多くみられます。副葬品は、これまでのところ検出事例がありません。

3．各地域における古墳の出現(第3・4図)

鶴見川流域では、下流地域に日吉観音松古墳(前方後円墳)、中・上流地域では稲荷前6(前方後円墳)・16号墳(前方後方墳)、虚空蔵山古墳(円墳)などが知られています。大岡川流域では殿ヶ谷1号墳(前方後円墳)、柏尾川流域では上流部に東野台2号墳(前方後方墳)が築造されます。

出現期の古墳が立地する同一丘陵上にはその多くが弥生時代後期の集落址が発見されます。東野台古墳群では眼下の低地部に、弥生時代後期～古墳時代前期の集落址が存在します。さらに、虚空蔵山遺跡や東野台古墳群では古墳に先行する可能性が高い方形周溝墓や方墳(3号墳)が認められます。これらの状況は、地域集団再編の動きと地域首長の卓越化の過程を物語ると考えられます。

4．古墳の展開と変質(第5図)

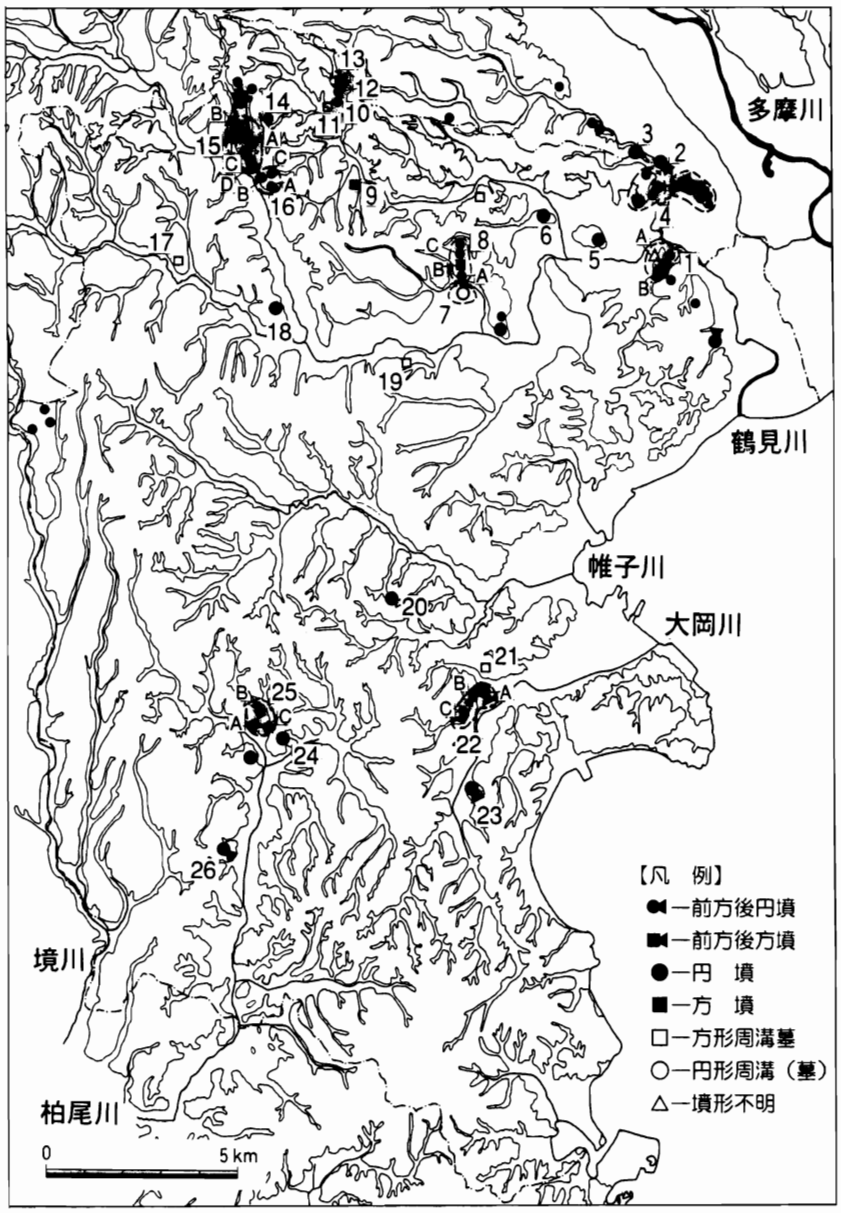
初期の首長墓とみられる古墳は、どの古墳群においても2～3代でその造営が跡絶えます。稲荷前古墳群では5世紀前半代の築造になる1号墳(前方後円墳)を最後に衰退に向かい、中頃には下流約1.5km に朝光寺原古墳群(円墳)の造営が開始されます。日吉付近でも日吉矢上古墳(円墳)に前後する頃には鶴見川対岸の山野古墳(詳細不明)やカネ塚古墳(円墳)など、以前認められなかった地域に古墳作りが開始されます。上の山古墳群や折本西原遺跡の円形周溝群などもこの例です。朝光寺原古墳群のように、副葬品に鉄製の甲冑や馬具などが加わります。前方後円(方)墳の中絶と古墳の小規模化、

拡散現象は、地域集団再編の第二波を予感させるものといえます。集落でも竪穴住居にカマドが敷設され、祭器に須恵器が用いられるなど、その様相を大きく変化させていきます。

参考文献

甘粕　健　1958「第三章　古墳時代」『横浜市史』第１巻　横浜市
甘粕　健・春日真実編　1994『東日本の古墳の出現』山川出版社
近藤義郎編　1994『前方後円墳集成―関東東北編―』山川出版社
横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団編　1986『古代のよこはま』横浜市教育委員会
横浜市埋蔵文化財調査委員会

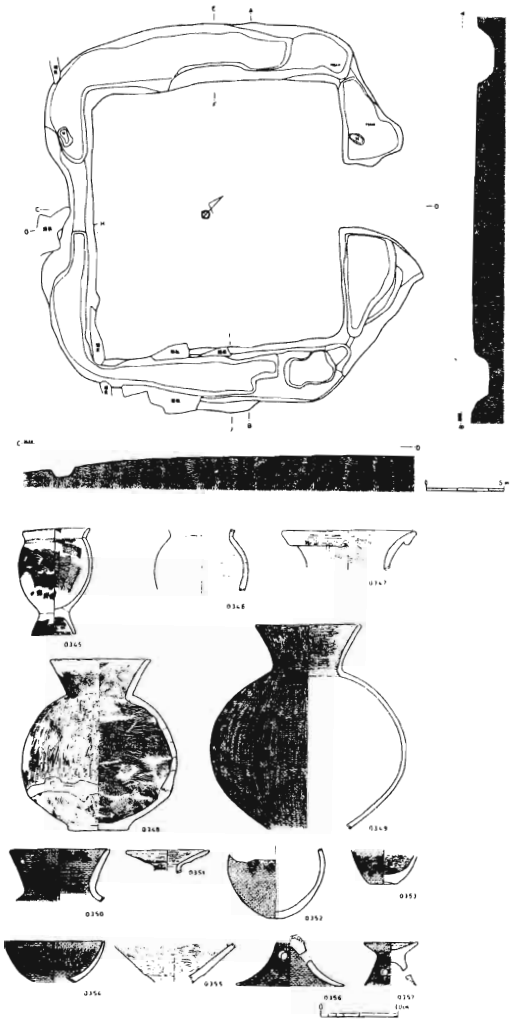
挿図は、第１図を除いて各報告書等によりますが、その出典は紙幅の関係で割愛しました。



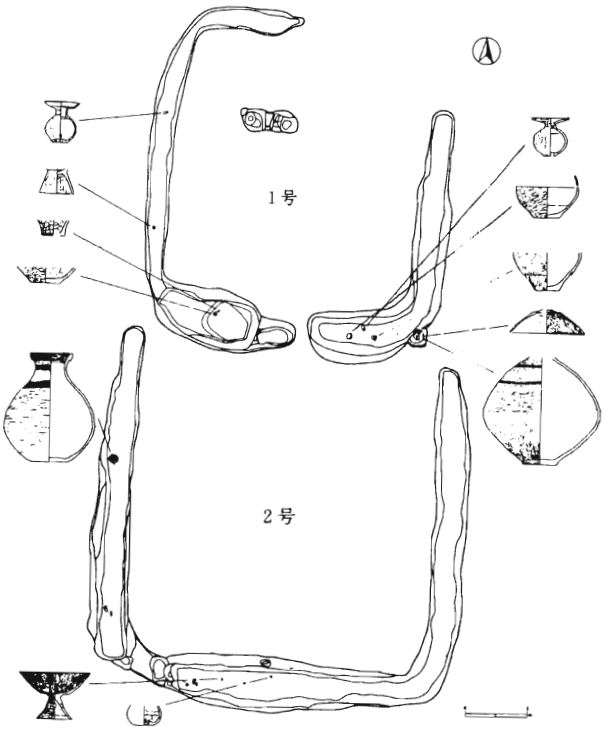
第１図　横浜市域の前半期古墳等分布図

横浜市域の主要前半期古墳等一覧

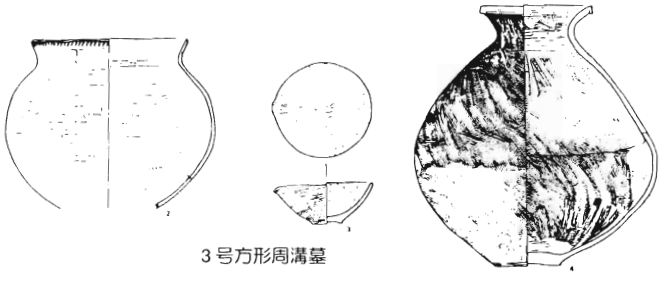
No.	名　　称	墳　形	規模（m）
1 A	山野古墳	不明	
2	観音松古墳	前方後円	約90
3	日吉矢上古墳	円	24以上
4	日吉台３号墳	円	18.8～15.4
5	綱島古墳	円？	20ないし30
6	カネ塚古墳	円	34
7	折本西原円形周溝群		
8	上の山古墳群		周溝外縁―
A	２号墳	円	19.5
B	３号墳	方	9.5
C	４号墳	円	13.5
9	矢崎山古墳	方	20
10	虚空蔵山古墳	円	35
11	同　上 １号方形周溝墓	長方形	15×17
12	観福寺裏古墳	円	約20
13	観福寺北関耕地古墳群		周溝内縁―
A	１号墳	方	13.2×12.2
B	２号墳	方	12.5
C	３号墳	方	13＋
D	５号墳	方	12.6×11.6
14	赤田４号墳	円	25
15	稲荷前古墳群		
A	１号墳	前方後円	46
B	６号墳	前方後円	32
C	16号墳	前方後方	38
D	17号墳	方	
16	朝光寺原古墳群	円	37
A	１号墳	円	約20
B	２号墳	円	約20
C	３号墳		
17	稲ヶ原A地点 １号方形周溝墓	方	周溝外縁― 24×16
18	山ノ下古墳	円	約20
19	東耕地遺跡 １号方形周溝墓 ２号方形周溝墓	方 方	周溝外縁― 11×10 一辺約12
20	地神塚古墳 （仏向町古墳）	円	23
21	市道高速２号線No.６遺跡方形周溝墓群	３号 ５号	周溝外縁― 14.5×14 一辺約20
22	殿ヶ谷古墳群		
A	１号墳	前方後円	約42
B	２号墳	前方後円	31
C	３号墳	前方後円	31
23	大塚古墳	前方後円	不　明
24	長蔵寺裏古墳	円	周溝外縁― 22×21
25	東野台古墳群		
A	１号墳	方	13.5×11
B	２号墳	前方後方	54
C	３号墳	方?	約11
26	富塚古墳	前方後円	推定35



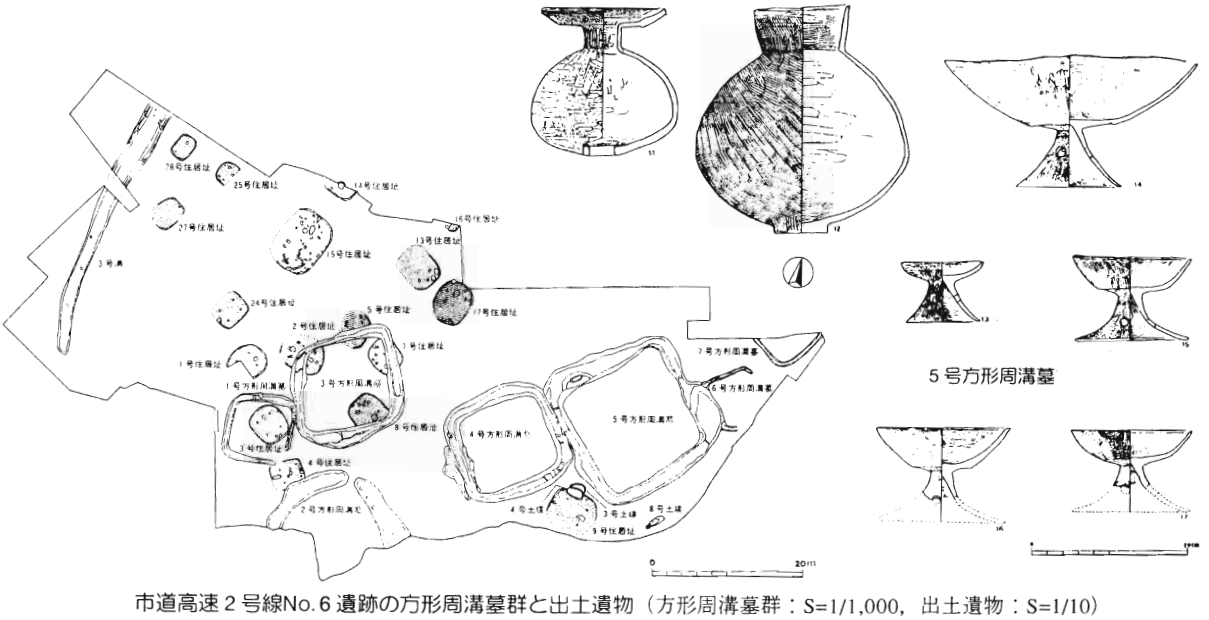
稲ケ原A地点遺跡１号方形周溝墓と出土遺物
（方形周溝墓：S=1/500，出土遺物：S=1/10）



東耕地遺跡１・２号方形周溝墓（S=1/500）と出土遺物



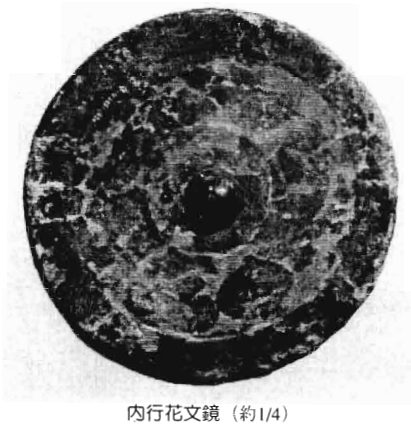
３号方形周溝墓



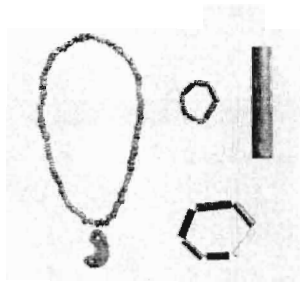
５号方形周溝墓

市道高速２号線No.６遺跡の方形周溝墓群と出土遺物（方形周溝墓群：S=1/1,000，出土遺物：S=1/10）

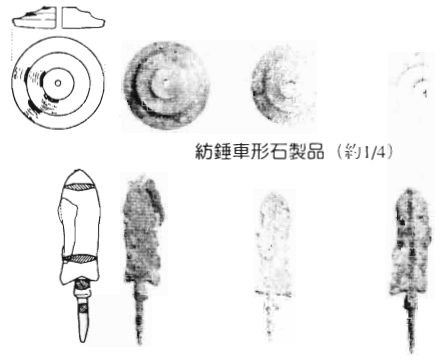
第２図　定型的古墳出現以前の墓



内行花文鏡（約1/4）



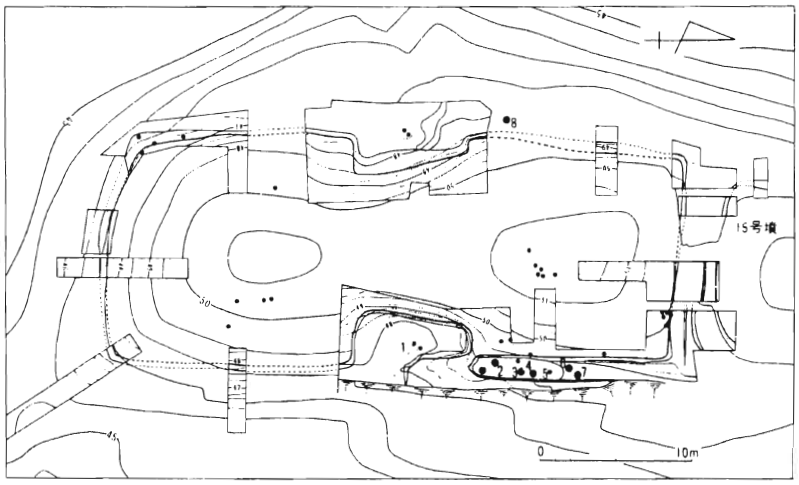
玉　類（約1/4）

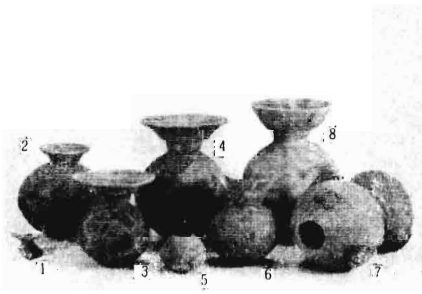


紡錘車形石製品（約1/4）

銅　鏃（約1/4）

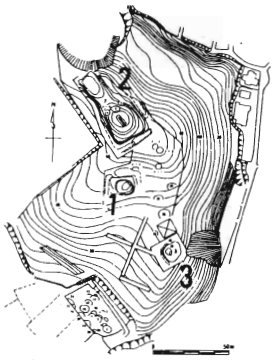
日吉観音松古墳の副葬品



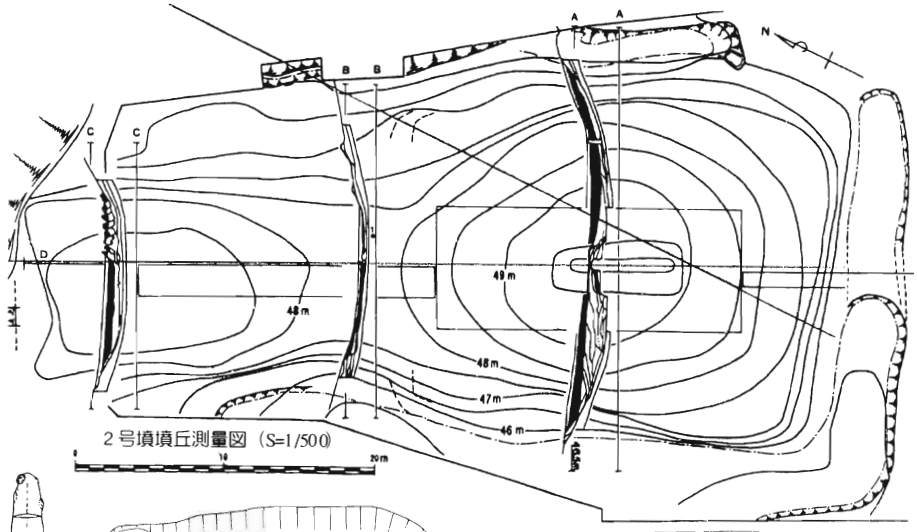


墳丘測量図（出土土器の No は土器 No に一致）●一土器出土地点

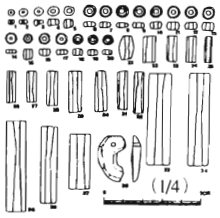
稲荷前16号墳墳丘測量図（S=1/500）と外表出土の土器群



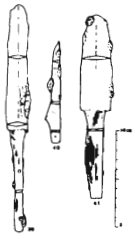
古墳群全体図（S=1/5,000）



2号墳墳丘測量図（S=1/500）



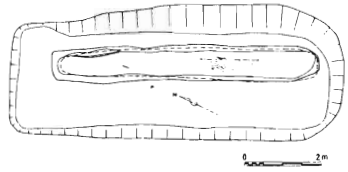
（1/4）



（1/8）

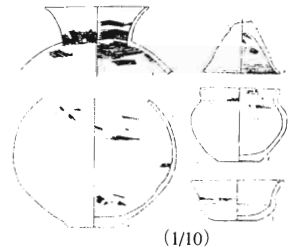
（1/10）

2号墳出土遺物



2号墳主体部平面図（S=1/200）

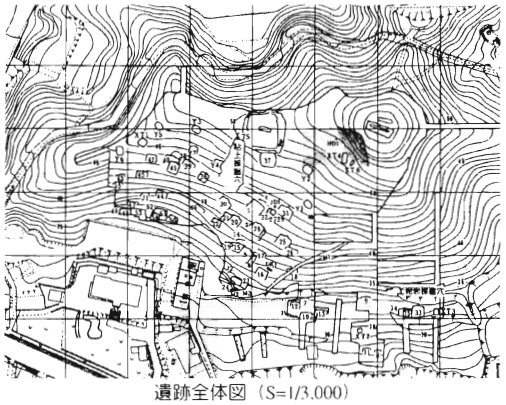
（1/8）



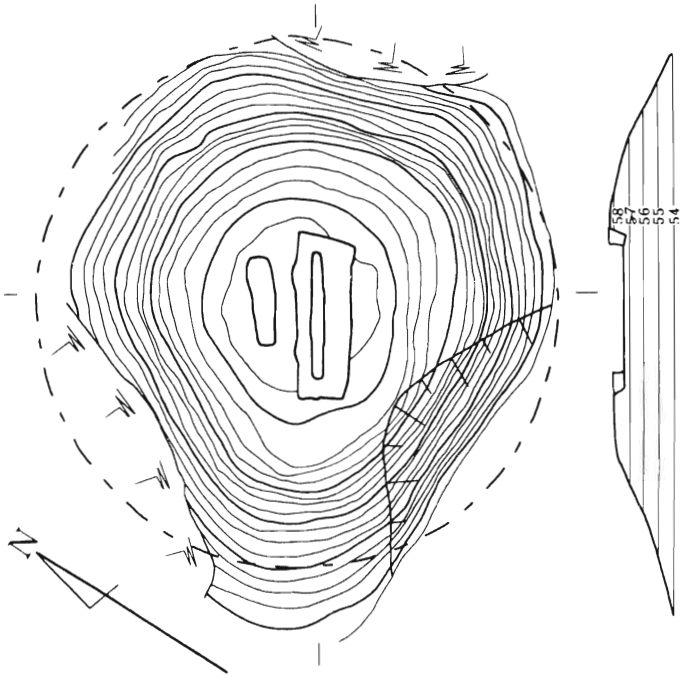
（1/10）

東野台2号墳と1号墳出土の遺物

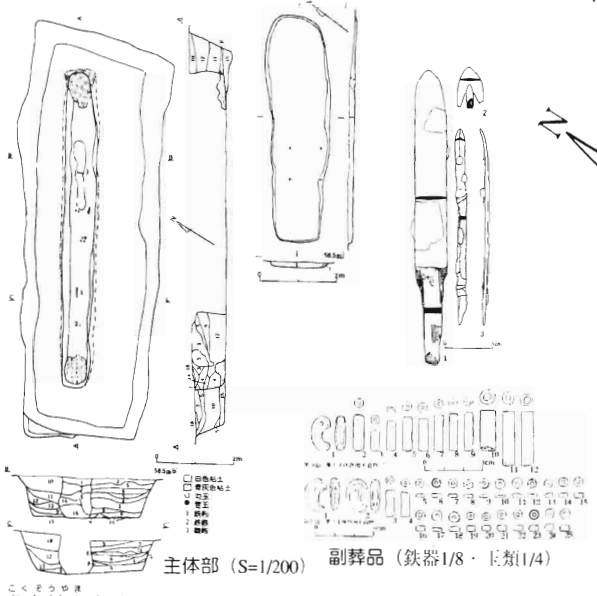
第3図　前期古墳と出土遺物(1)



遺跡全体図（S=1/3,000）

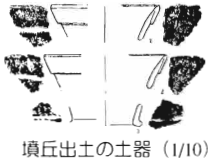


墳丘測量図（S=1/500）

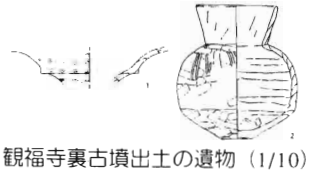


主体部（S=1/200）　副葬品（鉄器1/8・玉類1/4）

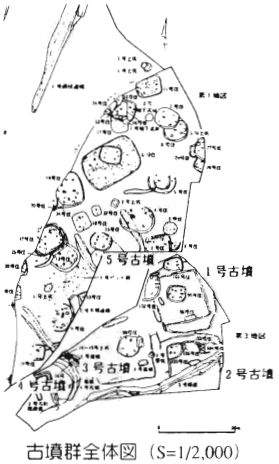
虚空蔵山古墳と出土遺物



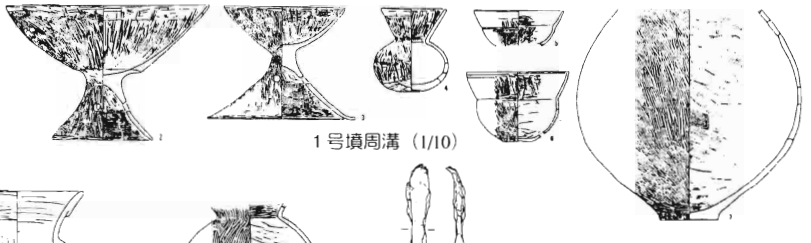
墳丘出土の土器（1/10）



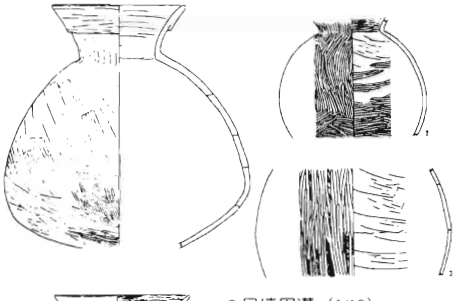
観福寺裏古墳出土の遺物（1/10）



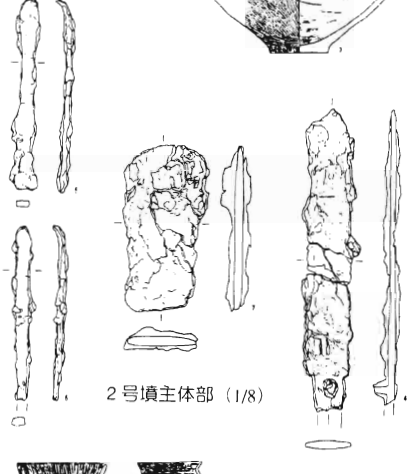
古墳群全体図（S=1/2,000）



1号墳周溝（1/10）

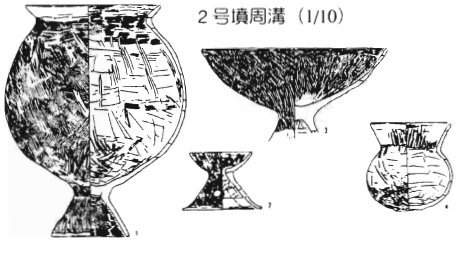


2号墳周溝（1/10）



2号墳主体部（1/8）

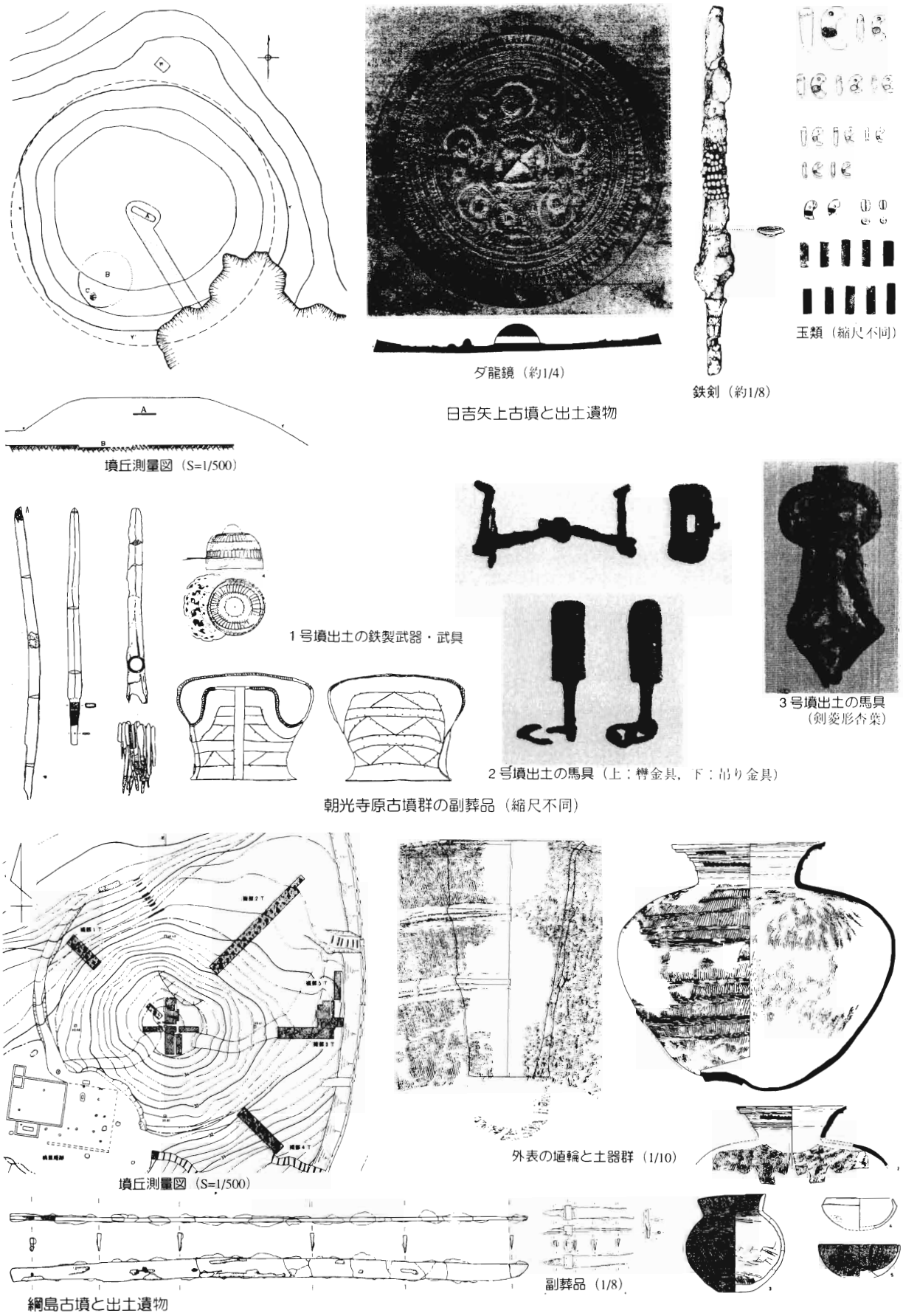
3号墳周溝（1/10）



周溝（1/10）

観福寺北関耕地古墳群と出土遺物

第４図　前期古墳と出土遺物(２)



第５図　中期古墳と出土遺物

三浦半島の古墳

稲村　繁

1．古墳の分布

三浦半島には100ヶ所を越える横穴墓群がありますが、これに対し古墳の築造数はきわめて少なかったと考えられます。その上低砂地に形成された古墳群などは中世を中心にそのほとんどが削平されてしまったことから、内容の不明な古墳や古墳そのものが消滅してしまった例が多くあります。

鎌倉市域を含めた三浦半島内では現在までのところ約30基の古墳が確認されています。この他古墳の可能性があるものや、出土遺物などの記録だけが残っており古墳本体はすでに消滅してしまったものなどを加えると、三浦半島では50～60基の古墳が存在していたものと考えられます。半島という地理的条件や地形的制約などから、当時の海岸線近くに古墳が築造されている例が多く、そのなかでも水際に近い砂地にも古墳群がみられるのが三浦半島の古墳の特徴のひとつです。

その分布状況を北からみてゆきますと、まず鎌倉市内では滑川北岸の砂丘上に和田塚古墳・采女塚古墳などの向原古墳群があります。逗子市内では現在までのところ古墳は確認されておりません。また、葉山町内では御用邸内の一色古墳のみが確認されているだけです。横須賀市内では平作川下流域の古久里浜湾周辺に多くの古墳が集中しており、三浦半島内では最大かつ唯一の首長墓系列が追える地域です。この地域には三浦半島最大の前方後円墳である池田町大塚第1号墳を中心とする大塚古墳群や、河口付近の砂丘上には八幡神社古墳群・蓼原古墳、東京湾に突出する尾根上にはこんぴら山古墳などがあります。その他の地域の古墳はいずれも単独で築造されており、東京湾の入り口となる金田湾を望む尾根上に立地する長沢1号墳や、相模湾側で唯一の前方後円墳となる長井経塚古墳などがあります。三浦市内では横須賀市長沢1号墳とおなじ金田湾を望む台地上に古墳が多くみられ、蛭田古墳を中心とした六万本古墳群や、三浦市内唯一の前方後円墳を含む雨崎古墳群があります。また、相模湾側には光照寺裏古墳群、三浦半島南端には向ヶ崎古墳などがあり、三浦市内の古墳はいずれも台地上や尾根上に立地しています。

2．古墳(高塚墳)出現以前の墓

では、これらの古墳が出現する以前の三浦半島における墓はどのようなものであったかというと、弥生時代終末期から古墳出現直前までの墓にはさまざまな種類がみられます。代表的なものとしては逗子市池子遺跡群№1－Ａ地点・横須賀市久里浜八幡神社遺跡群八幡神社前地点・同市神明町神明谷戸遺跡・同市池田町三足谷遺跡・三浦市南下浦町松輪大畑遺跡などから検出されている方形周溝墓があります。また、池子遺跡群№1－Ａ地点・神明谷戸遺跡の方形周溝墓の周溝内からは壺棺墓が検出されています。この壺棺墓はいずれも方形周溝墓の周溝が埋まりきらないうちにつくられていることから、方形周溝墓とさほど時間差がないものと考えられます。これに関しては松輪大畑遺跡でも周溝内から壺がまとまって出土しており、壺棺墓の可能性も考えられます。これらの方形周溝墓や壺棺墓は弥生時代後期にもみられることから、三浦半島では古墳時代に入っても弥生時代の墓制がしばらくのあいだは続いていたものと考えられます。そのほか弥生時代にはみられなかった新しいかたちの墓

として横須賀市長井台地遺跡群佃嵐地点から自然石を組み合わせた箱式石棺墓、三浦市南下浦町雨崎洞穴遺跡からは舟形木棺墓と舟形配石墓、同町間口東洞穴遺跡からは直葬墓が検出されています。

これら古墳出現以前の墓を出土遺物などから築造時期の古い順に整理すると、弥生時代末期～古墳時代初頭となる池子遺跡群№1－A地点の方形周溝墓と壺棺墓・三足谷遺跡の方形周溝墓が最古で、次に松輪大畑遺跡の方形周溝墓、そして神明谷戸遺跡の方形周溝墓と壺棺墓が続き、5世紀初頭～前葉頃に久里浜八幡神社遺跡群八幡神社前地点で最後の方形周溝墓がつくられるようです。これに対し、箱式石棺墓や洞穴内での直葬墓・舟形木棺墓・舟形配石墓など古墳時代に入ってあらたに出現してくる墓はいずれも4世紀末葉～5世紀前葉頃につくられており、方形周溝墓や壺棺墓の終末期頃につくられるようになってきます。このなかで注目されるのが洞穴内埋葬である雨崎洞穴遺跡の舟形木棺墓です。墳丘はもたないものの、棺を舟形木棺とし、副葬品に多量の滑石製玉類をもつのは4世紀末葉～5世紀前葉頃にみられる古墳の一般的な内容と共通しています。このような埋葬形態は千葉県館山市大寺山洞穴第1号洞からも検出されており、また同じ三浦半島内でも横須賀市鴨居鳥ヶ崎洞穴からも滑石製の玉類が出土していることから、海蝕洞穴をもつ半島に特徴的な古墳出現直前の埋葬と考えられます。なお、墳丘をもたない点で洞穴内埋葬と共通する長井台地遺跡群佃嵐地点から検出された箱式石棺墓については、周辺に類例がないことから遠方から伝播してきたものと思われますが、その系譜は不明です。

3．最古の古墳

このように、弥生時代後期からの伝統的墓制を継承した後、埋葬施設や副葬品は古墳と共通した内容をもちながら墳丘をもたない墓がつくられる時期を経て、三浦半島ではようやく古墳が出現してきます。現在までのところ出土遺物などから最古と考えられているのが横須賀市長沢1号墳です。金田湾を望む尾根先端の自然地形を利用して築造された円墳のため楕円形を呈しています。三浦半島内で唯一葺石を伴う古墳で、副葬品などの様相から5世紀中葉でもやや新しい時期の築造と考えられています。これに対し、さらにさかのぼる可能性が指摘されている古墳もあります。径 12.6mほどの円墳ではないかと考えられている横須賀市八幡神社古墳群第3号墳がそれで、周溝内からは5世紀初頭～前葉頃の土師器片が出土しています。墳丘はすでに削平されていることから埋葬施設や副葬品については不明です。また、出土状態をみるかぎり土師器片が古墳に伴うかどうかは断定できません。そのため、現在までのところ確認できる最古の古墳は長沢1号墳ということになります。続く時期の古墳は三浦市南下浦町蛭田古墳で、墳形規模ともに不明ですが、ＴＫ216～ＯＮ46 型式並行期の須恵器甕を出土していることから5世紀後葉～末葉の築造と考えられています。これらの古墳はいずれも金田湾を望む尾根上または台地上に立地していることから、三浦半島においては金田湾沿岸で最初に古墳が出現した可能性が高いといえます。ところで、古墳出現直前の墓と考えられる雨崎洞穴遺跡の舟形木棺墓は5世紀初頭～前葉に位置づけられるのに対し、最古の古墳である長沢1号墳は5世紀中葉でもやや新しい時期と考えられることから、この間を埋める墓あるいは古墳の存在も想定されます。その可能性のある古墳としては、雨崎洞穴遺跡の直上の細尾根に築造されている全長約 30mを測る前方後円墳の雨崎1号墳や蛭田古墳の南方に位置する金田古墳・唐池古墳などがあげられますが、いずれも未調査であることから、これらの古墳が5世紀前半代にまでさかのぼるかどうかは不明です。

4．古墳の展開

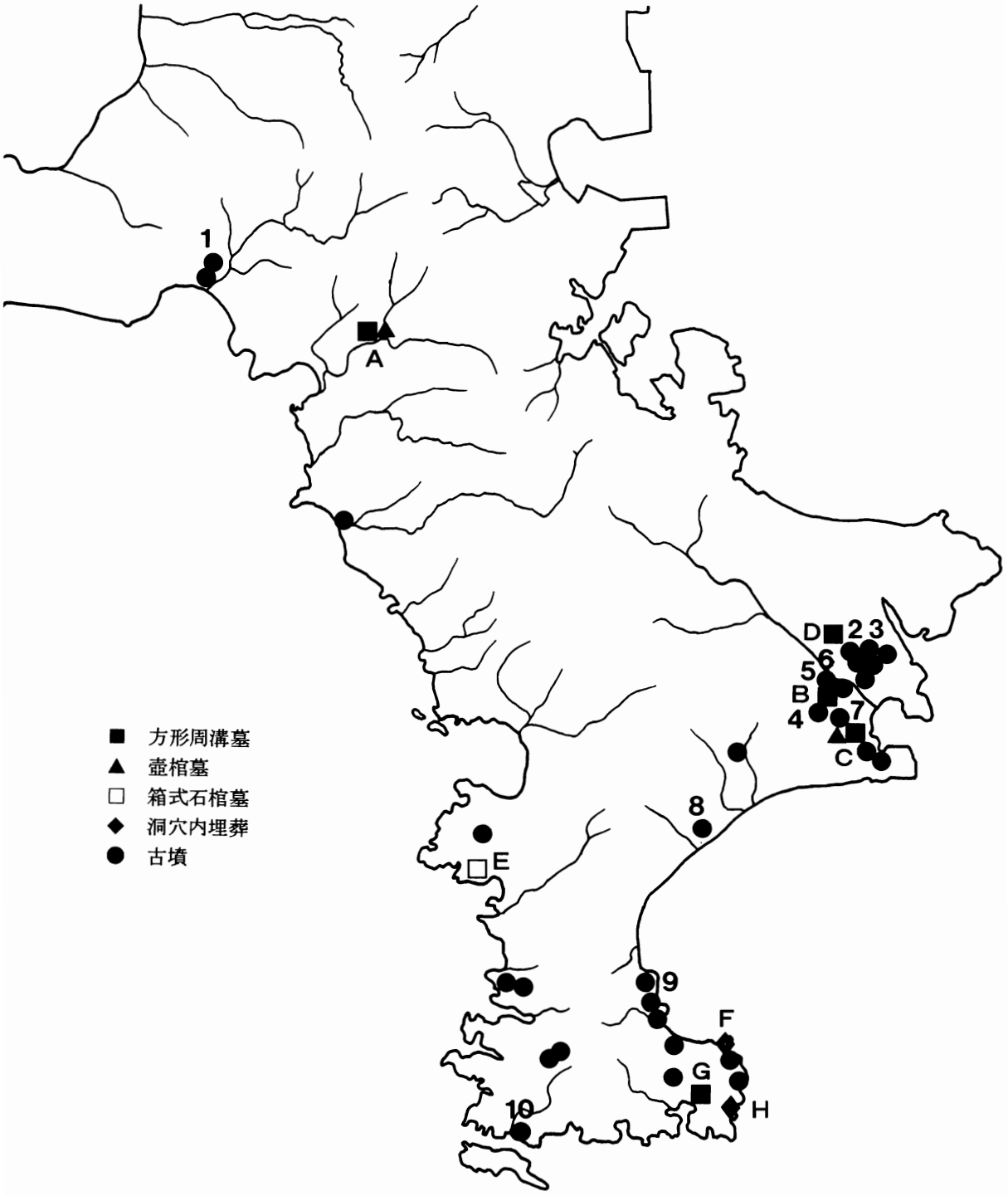
金田湾沿岸に古墳が出現すると、その後間もなく三浦半島最大の河川である平作川下流に位置する古久里浜湾の砂丘上にも古墳が築造されるようになります。この地域で最古となるのは墳形・規模・内容いずれも不明ですが、周溝出土の土師器から5世紀末葉頃の築造と考えられる横須賀市八幡神社遺跡群久里浜中学校地点ＳＤ01(八幡神社古墳群第2号墳)です。これ以降6世紀後葉頃までこの砂丘上には連綿と古墳が築造されており、三浦半島中部における首長墓群を形成していたものと考えられます。このなかには、三浦半島における最古の埴輪の一群と考えられる埼玉系埴輪を樹立した6世紀前葉頃の八幡神社古墳群第4号墳や、6世紀中葉頃の群馬系の埴輪を樹立した三浦半島最古の帆立貝形前方後円墳の蓼原古墳などが含まれています。この他、横須賀市内では砂丘上の吾妻崎遺跡などからも6世紀後葉～末葉頃の群馬系の埴輪が出土しています。

他の地域をみますと、鎌倉市内でも6世紀代には横須賀市の古久里浜湾同様砂丘上に向原古墳群が形成されます。そのなかでも、采女塚古墳からは八幡神社古墳群第4号墳同様6世紀前葉頃の埼玉系の埴輪が出土していることから、向原古墳群は6世紀代に入って間もなく築造が開始されたことがわかります。

一方、三浦市内には大規模な砂丘地帯がないこともあり、6世紀代になっても古墳は高台に造られ続けます。そのなかで、城ヶ島の対岸となる三浦半島先端の台地上に6世紀前葉～中葉頃の埼玉系埴輪を樹立した向ヶ崎古墳が築造されます。

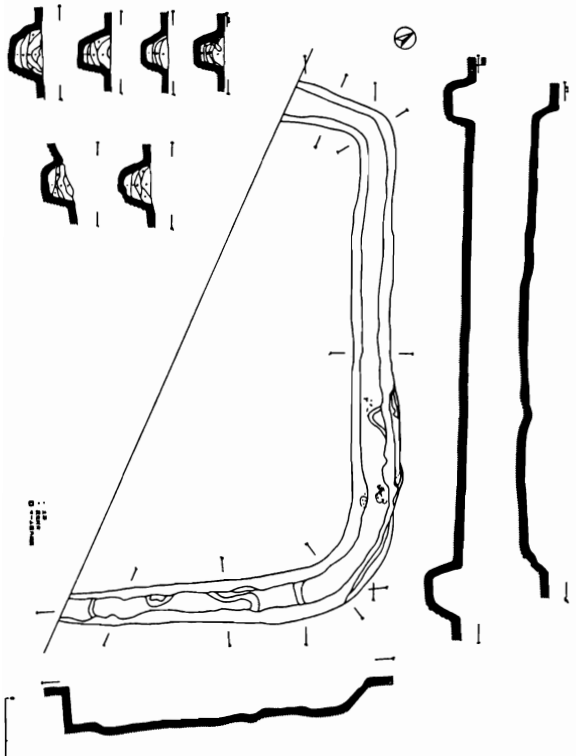
このように三浦半島の埴輪をみると、伝播初期の6世紀前葉頃には埼玉系のみがみられるのに対し、6世紀中葉以降になると群馬系へと変化しているようです。これは、三浦半島の首長が6世紀中葉頃を境に群馬との交流を密にしていったことを示しているのかもしれません。

6世紀後葉頃になると、古久里浜湾では首長墓が砂丘地帯から平作川対岸の丘陵となる大塚台に移動し、大塚古墳群を形成します。最初に造られるのは第4号墳で、前代の蓼原古墳以来の帆立貝形前方後円墳です。次に造られるのが三浦半島最大の前方後円墳となる第1号墳で、この時期にようやく三浦半島でも前方後円墳が出現してくるようです。この他三浦半島では大塚第2号墳・こんぴら山古墳・長井経塚古墳・雨崎1号墳などが前方後円墳として確認されていますが、正確な時期はいずれも不明です。もしこれらの前方後円墳が大塚古墳群第1号墳とほぼ同時期につくられたとすると、三浦半島では6世紀後葉頃に半島中部東京湾岸・半島南部東京湾岸・相模湾岸の三地域に前方後円墳が出現したことになります。そして、前方後円墳の基数からみて半島中部東京湾岸の古久里浜湾がその中心になっていたと考えられます。また、大塚第1・第4号墳はいずれも埋葬施設が木棺直葬ですが、三浦半島では東京湾岸の古墳に横穴式石室は確認されておらず、古墳の終焉まで竪穴系の埋葬施設であった可能性が高いと考えられます。これに対し6世紀末葉以降と思われますが、相模湾岸の古墳では葉山町一色古墳や三浦市光照寺裏古墳群などに横穴式石室がみられます。このことから、同じ三浦半島にあって東西の古墳では系譜が異なっていた可能性があります。あるいは、大塚古墳群のような首長墓は竪穴系で、相模湾岸の小古墳群にのみ横穴式石室が導入されたのかも知れません。

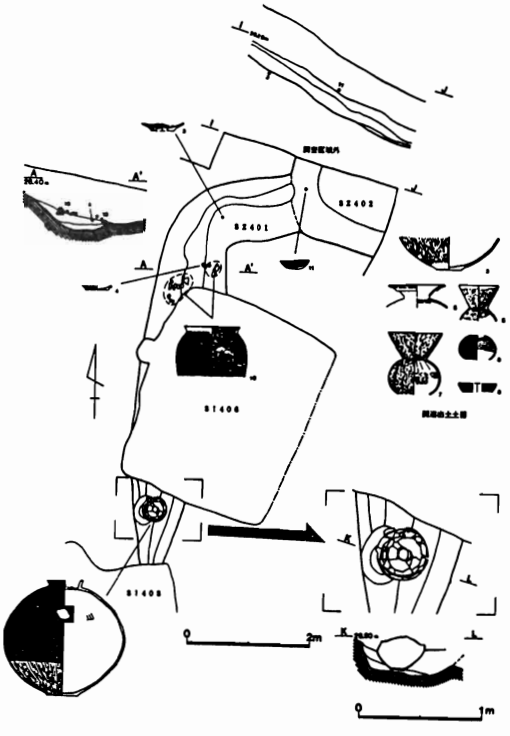


第１図　三浦半島における古墳時代の墓分布図

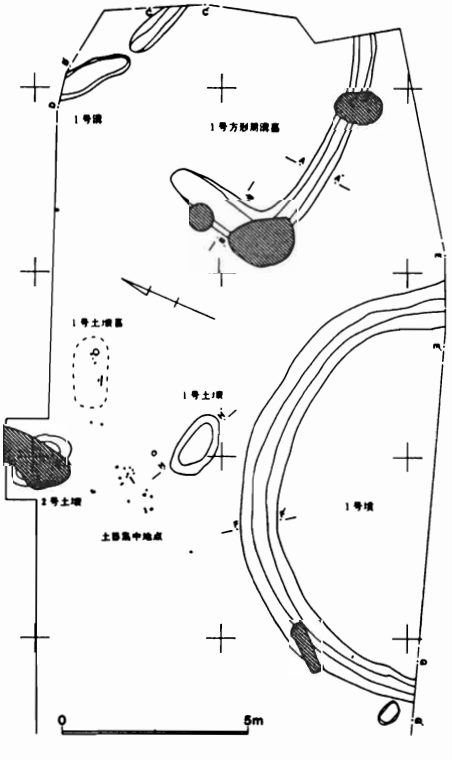
Ａ 池子遺跡群No.1-A地点　Ｂ 八幡神社遺跡群八幡神社前地点　Ｃ 神明谷戸遺跡
Ｄ 三足谷遺跡　Ｅ 長井台地遺跡群佃嵐地点　Ｆ 雨崎洞穴遺跡　Ｇ 松輪大畑遺跡
Ｈ 間口東洞穴遺跡　１ 采女塚古墳　２ 大塚第１号墳　３ 大塚第４号墳
４ 八幡神社第２号墳　５ 八幡神社第３号墳　６ 八幡神社第４号墳　７ 蓼原古墳
８ 長沢１号墳　９ 蛭田古墳　10 向ヶ崎古墳



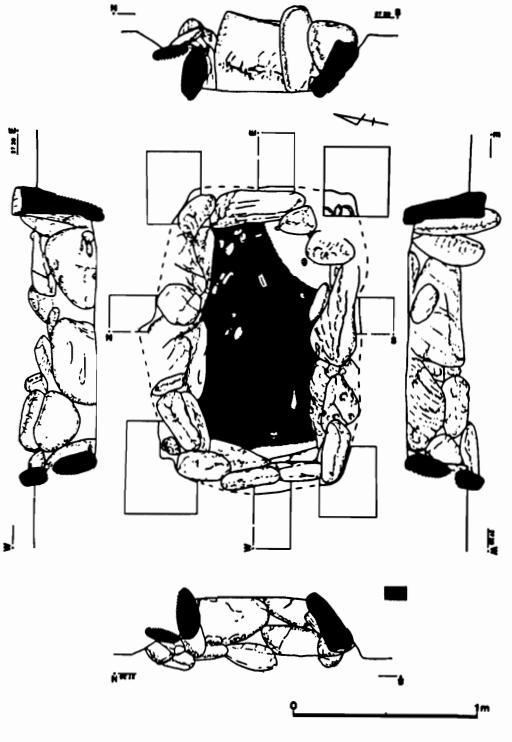
松輪大畑遺跡方形周溝墓



神明谷戸遺跡ＳＺ401方形周溝墓

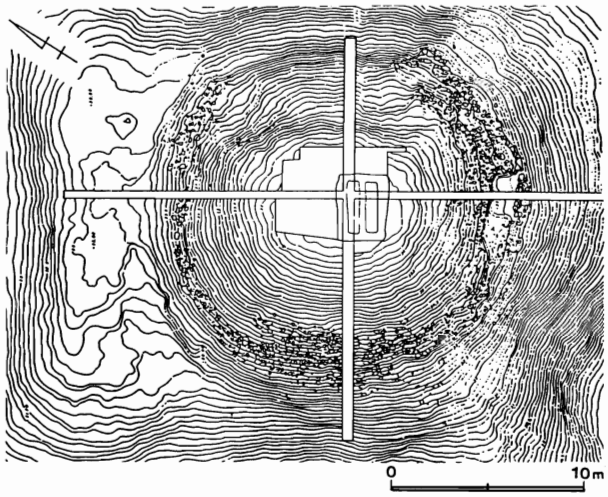


八幡神社遺跡群八幡神社前地点方形周溝墓

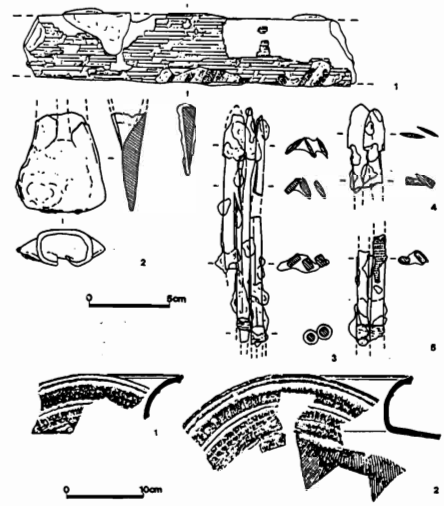


長井台地遺跡群佃嵐地点箱式石棺墓

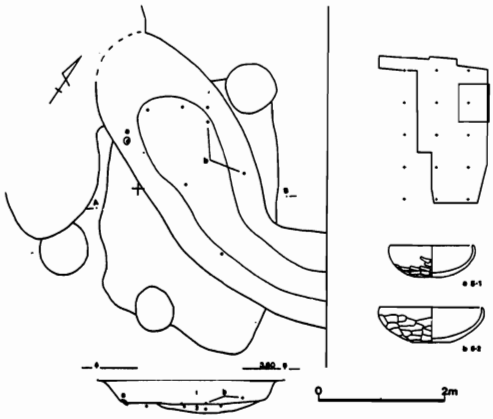
第２図　三浦半島における古墳出現以前の墓（報告書より転載）



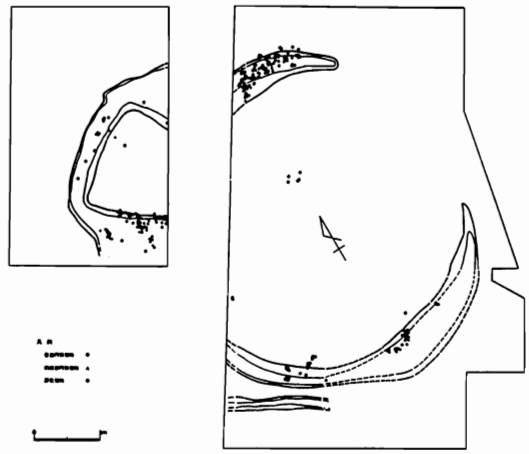
長沢１号墳



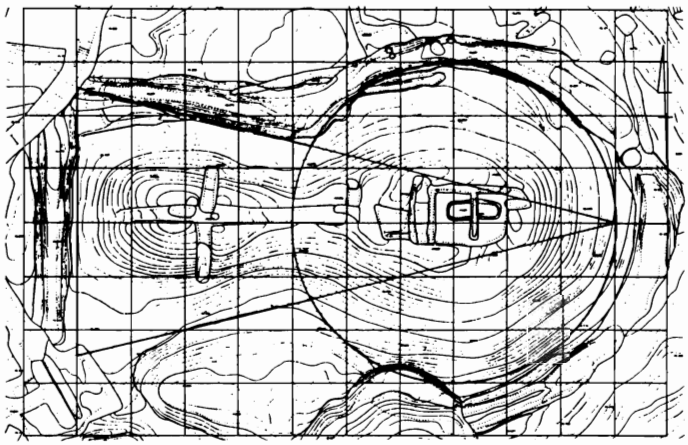
蛭田古墳出土遺物



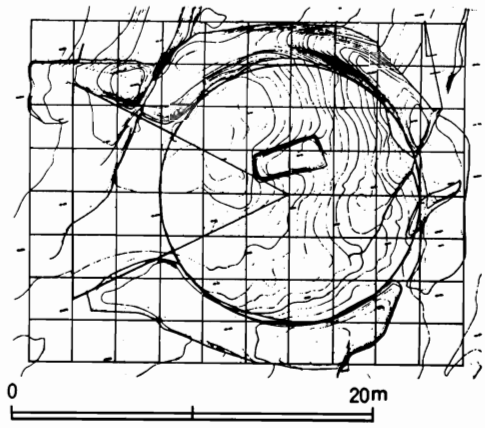
八幡神社第２号墳



蓼原古墳



大塚第１号墳



大塚第４号墳

第３図　三浦半島の古墳(報告書より転載)

東相模の古墳

服部みはる

1.東相模の地形と古墳の分布

東相模における古墳分布は地形と密接な関わりがあります。特に前期から中期の古墳が立地する地形は、周辺各地域との共通事項ですが、河川と沖積低地を臨む丘陵上や台地縁辺にほぼ限定されます。東相模地域の地形を概観すると、相模川は相模地域の中心を相模原市南部から海岸までほぼ北から南へ直線的に流れており、相模川に沿って沖積低地が広がっています。河川沿いの沖積地と海岸沿いの砂丘部分を除けば、大半は相模野台地と呼ばれる台地となっており、相模川中流域河岸には台地上にのるように南北に座間丘陵が発達しています。相模川以外にも引地川、境川、目久尻川、小出川といった中小河川があり、台地を開析し各流域に狭い沖積地を形成しています。相模川沖積地と台地、丘陵の境は崖や急斜面で区切られ、古墳のつくられている丘陵上や台地縁辺部は非常に眺めが良く相模川流域を広範にわたって見渡せます。

東相模地域において現在までに発掘調査等により前期から中期(３世紀後期～5世紀代)と考えられる古墳(群)は、相模川中流域の海老名や寒川の河岸の丘陵、台地上に分布しています。海老名市域最北端の座間丘陵上には秋葉山古墳群があり、前方後円(方)墳、方墳６基が確認されています。同じ座間丘陵上で秋葉山古墳群から約2.5ｋｍ南に前方後円墳の瓢　塚古墳ほか方、円墳約６基からなる上浜田古墳群、そして秋葉山古墳群から約５ｋｍ南の座間丘陵最南端部に２基の古墳が現存する伊勢山古墳群があります。寒川町の大(応)神塚古墳は、目久尻川と小出川に挟まれた台地上にあり、周囲には後期とみられる古墳も数基確認されています。

現在までのところ前期から中期の古墳の分布は相模川中流域に集中しています。現状確認されているもの以外にも既に消滅した古墳や未確認の古墳があると思われることから、相模川中流域以外の相模湾や各河川を臨む台地・微高地上に前～中期の古墳がつくられていた可能性を否定することはできませんが、東相模の前～中期古墳が相模川中流域に集中するという傾向に今後も大きな変化はないでしょう。

2．東相模の前～中期の主要な古墳

（１）秋葉山古墳群(海老名市)　座間丘陵上の尾根筋に沿ってクランク状の配列で６基の古墳が確認されおり、相模川流域で最も前方後円(方)墳が集中してつくられています。これまでに１、３、４、５号墳で部分的な発掘調査が実施され、墳形や周溝などの施設、遺物が少しずつ確認されています。１号墳は前方後円墳であり、発掘調査により前方部の墳丘と周溝のそれぞれ一部が確認されています。２号墳は地形測量から前方後円墳であることが確定していますが、発掘調査は行われていないので詳細は不明です。３号墳は現状は円または方墳状ですが、本来は前方後円墳であったことを窺わせる大

正時代の記録があります。発掘調査では周溝、墳丘の一部が確認され、周溝内から壷が出土、平成９年８月～10月に実施した調査では墳頂部から高坏が出土しています。４号墳は前方後円または前方後方墳とみられ、周溝とみられる遺構から壷が出土、５号墳は方墳で周溝から底部穿孔の坩、器台などが出土しています。６号墳については円墳とみられますが、未調査のため詳細は不明です。このほか４号墳そばの竪穴状遺構からも底部穿孔の壷、小型器台が出土しています。

（２）**上浜田古墳群(海老名市)**　相模川、中津川、小鮎川の三川合流地点のほぼ真東、座間丘陵の尾根上に立地します。現在までのところ６基の古墳が確認されていますが、周辺には未調査のまま消滅した高塚が数基あったようです。発掘調査等により３号墳、５号墳(太鼓塚古墳)、６号墳、７号墳(瓢　塚古墳)については墳形等が明らかになっています。３号墳は円墳ですが墳丘部分は調査時既に削平され周溝のみ確認、５号墳(太鼓塚古墳)も円墳で周溝が確認され、周溝内から高坏、壷が出土しています。６号墳は一部周溝が確認され、周溝内から壷が出土しています。墳形は方墳と推定されています。７号墳(瓢　塚古墳)は上浜田古墳群内で現存する唯一且つ東相模地域で最大規模の前方後円墳です。発掘調査から、後円部が２ないし３段に築造されていたものとみられますが、周溝は発見されていません。墳丘部及び周辺からは朝顔形円筒埴輪、壷形埴輪、形象埴輪とみられる４世紀後半～末にかけての特徴を持つ埴輪片が出土しています。この他、１号墳(馬捨塚古墳)、２号墳(三塚古墳)についてはともに円墳とみられますが未調査のため詳細は不明です。また４号墳については、２号墳と一体で前方後円墳の前方部である可能性も指摘されていましたが、隣接地等の調査で古墳ではない可能性が強まりました。

（３）**伊勢山古墳群(海老名市)**　東名高速道路海老名サービスエリアのから700m程南、座間丘陵の最南端に位置し、発掘調査により崖線に沿い南北に２基の古墳が確認されています。１号墳は円墳とみられますが、周溝のごく一部が確認されているのみで、遺物もほとんど出土していないため詳細は不明です。２号墳は、周溝の約１／３と墳丘の一部が確認されています。周溝は南西側で途切れ、陸橋状になっています。周溝の覆土には、分析の結果から西暦500～750年の間に降下した富士山の噴火によるテフラの一次堆積が認められ、テフラとともに高坏が出土、また墳丘部からは須恵器の甕、坏が出土しています。

（４）**大(応)神塚古墳(寒川町)**　寒川町のほぼ中央、小出川と目久尻川に挟まれた台地の先端部に位置します。周囲には現存はしませんが、古墳時代後期の小規模な古墳５基が確認されています。大(応)神塚古墳の墳形は地形測量から前方後円墳とされていますが、これまでのところ発掘調査による墳形及び周溝の有無の確認は行われていません。しかし明治年間に後円墳頂部の埋葬施設と考えられる部分について発掘調査が行われており、青銅鏡片、直刀片、鉄製品が出土、東相模での前～中期古墳の中で唯一副葬品が判明しています。この時の発掘調査から、大(応)神塚古墳の埋葬施設は木棺を直葬したものか、木棺の周囲あるいは木棺の下に粘土を使用したものだったのではないかと推測されています。

これらの各古墳の築造時期、築造順序を知るにはやはり出土遺物、特に土器が手がかりとなりま

す。しかし調査を行っても現段階では土器の出土がない古墳もあり、また出土している土器も各古墳によって出土状況や器種が異なるなど、共通した事項が少なく相対的な比較は難しい点もあります。土器を主とした出土遺物の年代を各古墳の築造期とすれば、現段階で考えられる各古墳の築造年代は、以下のとおりと考えられます。まず秋葉山古墳群については、３号墳が周溝内から出土した壷により３世紀末から４世紀初頭、４号墳については周溝とみられる遺構出土の壷から４世紀代、５号墳は周溝から出土した壷、小型丸底坩、小型器台から４世紀前～中半に位置付けられます。上浜田古墳群については、太鼓塚古墳(５号墳)が周溝内から出土している高坏、壷から５世紀前～中半、６号墳は周溝内出土の壷から４世紀代、瓢　塚古墳(７号墳)は墳丘上などから出土している埴輪片等により４世紀末～５世紀初頭、伊勢山古墳群２号墳については周溝内、墳丘上出土の高坏及び須恵器坏・甕片により５世紀末～６世紀初頭に位置付けられます。また、大(応)神塚古墳からは土器は出土していませんが、調査の成果から５世紀代とされています。

３．東相模の古墳の特徴

東相模における前～中期の古墳については、立地が相模川中流域の沖積地を臨む丘陵頂部や台地縁辺部に集中し、古墳群が南北に連なっていることが大きな特徴です。これらの古墳群の立地状況は、各古墳の築造順とも関連するように思われます。今回取り上げた各古墳群の造墓活動の変遷は、３世紀末から４世紀半ばまで秋葉山で中心的に古墳がつくられ、４世紀代から５世紀中頃までは上浜田、５世紀末には伊勢山、大(応)神塚も５世紀代に築造…というように、各古墳群で並行して古墳がつくられた時期もあった可能性はありますが、全体的には造墓活動の中心が北から南へと相模川沿いに下っていく傾向が窺えます。

墳形については、前方後円(方)形、方形、円形が認められますが、前方後円(方)墳とともに方墳が先行してつくられた可能性があります。なお、東相模地域では目久尻川流域の本郷遺跡(海老名市)、引地川流域の大庭城址公園遺跡(藤沢市)、境川流域の高倉遺跡(藤沢市)などで弥生時代からの伝統的な墓制である方形周溝墓が古墳時代初頭まで引続きつくられ、一部は古墳築造開始時までおよんだようです。

そして古墳(群)と同時期に営まれた集落に目をむけると、各古墳(群)がつくられている座間丘陵上には古墳築造時期に人々が住んだ痕跡はほとんど見つかっていません。これまでの調査では座間丘陵より一段低い台地上の相模国分寺関連遺跡(海老名市)で３世紀から５世紀の集落跡が認められているほかは、古墳築造開始時から４世紀頃までの集落の多くが、後述のように東相模地域南部に集中しています。(但し５世紀代になると東相模地域における集落は全般的に減少します。)今後これまであまり調査がされてこなかった相模川中流域の自然堤防上や沖積地などでの集落発見の可能性もありますが、いずれにせよ各古墳(群)と集落は異なった分布傾向を示します。

４．東相模の古墳築造の背景

東相模地域における古墳時代前期の集落は、東相模地域の南部、海老名市・綾瀬市・寒川町をまたぐ目尻川の下流域、寒川町・茅ヶ崎市・藤沢市をまたぐ小出川流域、藤沢市西部の引地川流域、藤沢市北部境川流域の台地上の数地域を中心に集中しており、いずれの地域でも弥生時代後期から古墳時代前期(２～４世紀)まで継続する集落跡がまとまって発見されています。これらの集落の周辺には方形周溝墓群は存在しますが、前期古墳は確認されていません。

東相模の古墳築造の基盤となり得る集落は、前述のとおり各古墳(群)に近接した場所にはあまり確認されていないことから、東相模南部地域の集落との関係が注目されます。目久尻川下流域の本郷遺跡では、４世紀頃の玉(石製品)作り工房跡や同時期と考えられる竪穴住居跡から小銅鐸が出土するなど、集落域にも祭祀を取り行う権力者がかかわっていたことを示しています。各古墳から出土している土器については在地色の強いものが認められることから、東相模における古墳の築造は、相模地域に弥生時代後期から続く集落の中で権力者が絞られ、地域を統率する力を持つ者(一族)が現われたことにより開始したものと考えられます。

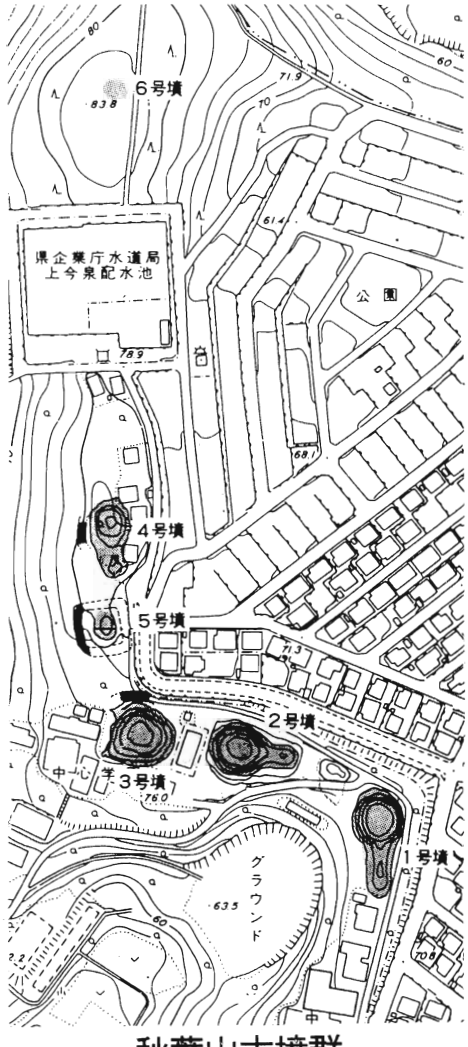
ところで古墳と集落の分布域が異なる要因としては、古墳をつくる際、何らかの強い理由があって集落から離れた場所が選ばれたものと考えられます。古墳築造が開始されるまで、各集落の有力者は集落のそばに造られた方形周溝墓に葬られていました。ところが集落を超えて広範な地域を統率する首長が現れると、それまでの単なる集落内の有力者ではなく、地域の首長であることをアピールするために、支配領域や生産基盤となる土地などを見下ろす、あえて集落から離れた場所を選び古墳(群)をつくったものと思われます。

この他、古墳(群)がつくられた相模川中流域は河川交通、及び陸路の要所であったことも想定されます。交通の要(かなめ)に古墳をつくることが、支配域を主張し、物流、情報伝達を独占的に掌握することへの象徴となったのかもしれません。

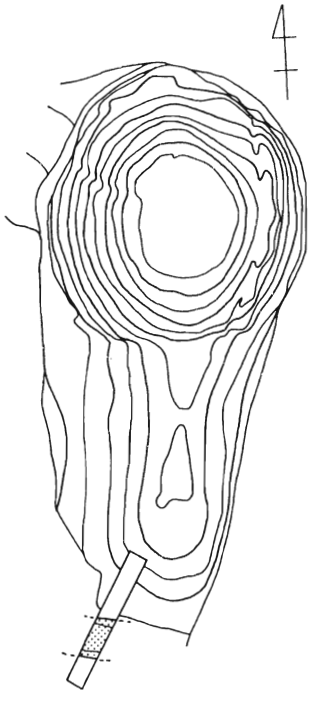
いずれにせよ相模川流域の古墳築造背景については相模川を挟んで東西に分かれるものではなく、首長権の変遷、集落と古墳の関係など両岸一体で捉える必要があるでしょう。

参考文献：

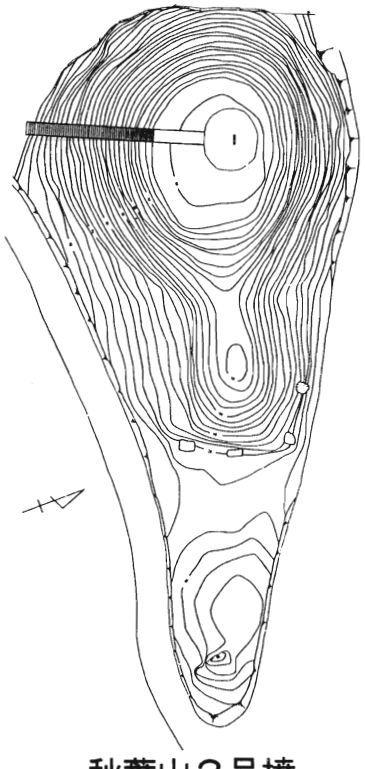
神奈川県教育委員会　１９８２「埋蔵文化財緊急調査概要」『神奈川県埋蔵文化財調査報告２４』
日野一郎・北川吉明　１９９１　『秋葉山古墳群』秋葉山古墳遺跡調査団
服部みはる　１９９４　「伊勢山古墳群・杉久保遺跡の調査」『えびなの歴史』海老名市史研究第６号
海老名市編　１９９５　『中山毎吉－その人と業績』海老名市史叢書Ⅰ
伊東秀吉ほか　１９９５　『海老名本郷』Ⅹ　本郷遺跡調査団
寒川町編　１９９６　『寒川町史』８別編考古
綾瀬市編　１９９６　『綾瀬市史』　９別編考古
押方みはる　１９９７　『瓢　塚古墳―上浜田古墳群第７号墳―発掘調査報告書』海老名市



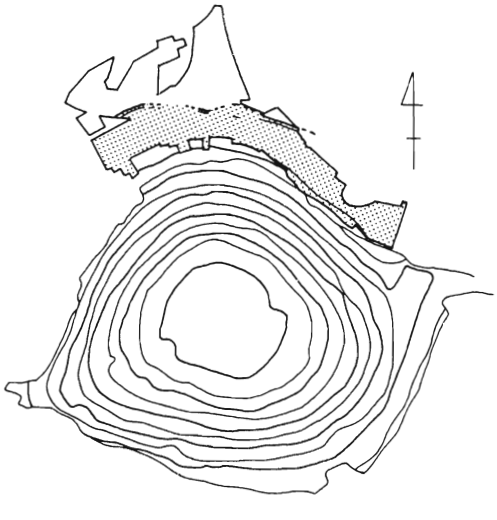
秋葉山古墳群



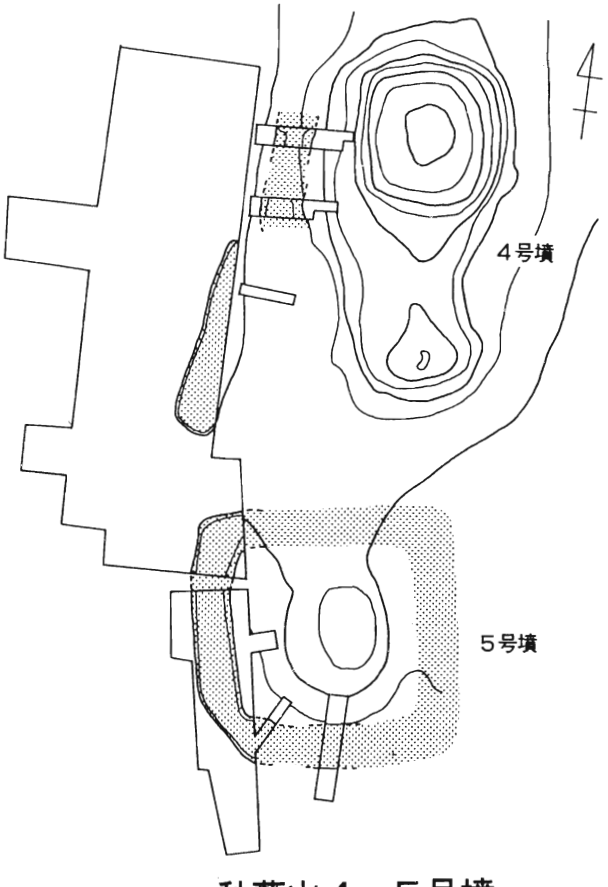
秋葉山１号墳



秋葉山２号墳



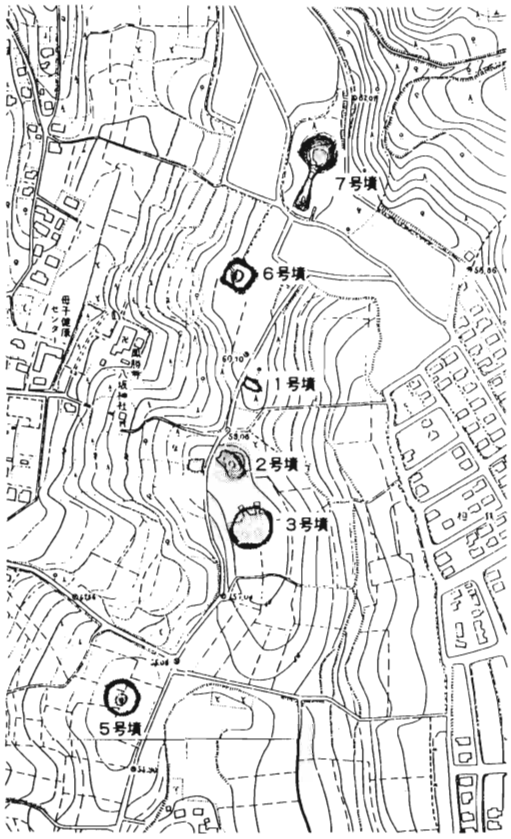
秋葉山３号墳



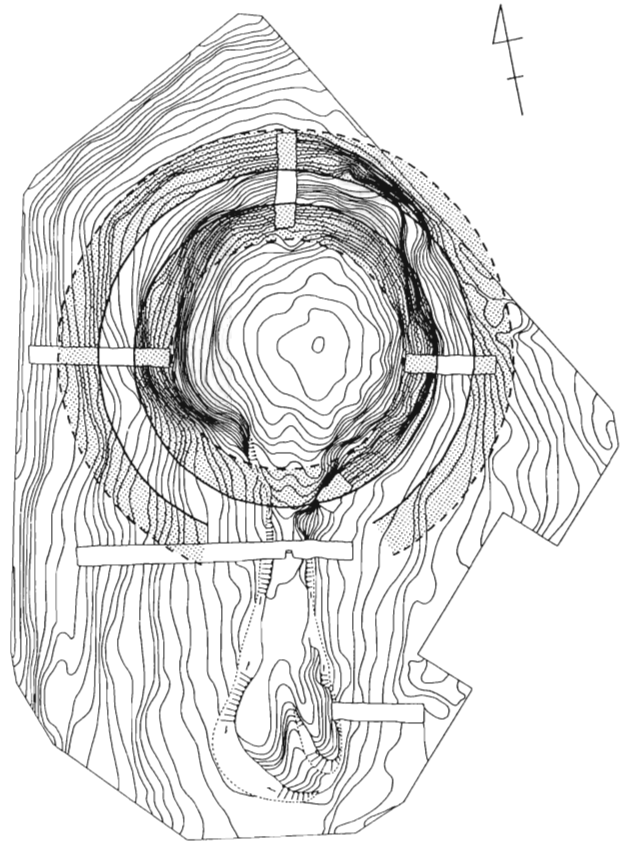
秋葉山４、５号墳

0　20m

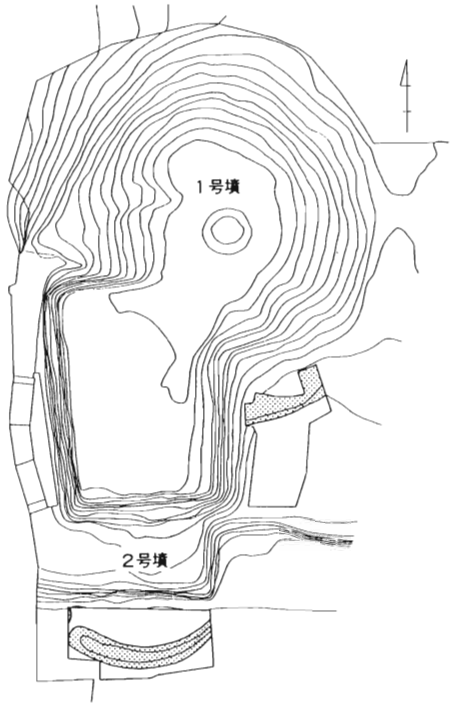
第１図　東相模の古墳１



上浜田古墳群



瓢箪塚古墳（上浜田７号墳）



伊勢山古墳群

大（応）神塚古墳

0　20m

第２図　東相模の古墳２

西相模の古墳

立花　実

はじめに

神奈川県の相模川以西における古墳時代前期の遺跡は、相模川流域右岸、鈴川、金目川流域、大磯丘陵からその南側の海岸砂丘、酒匂川、狩川流域と広範囲に分布し、しかも丘陵上から砂丘上と大きく条件の異なる地域にまたがっています。本来、これほど広く、様々な条件の地域を一括りとして扱うことには問題がありますし、古墳時代にこれらの地域をひとりで支配していた人物がいたとも思えません。しかし前期古墳に限っては、この地域全域を対象としても調査によって全容が明らかになった古墳はほとんどありません。ですからこの地域区分は、取り敢えず、便宜的に、致し方なく(主催者側が)想定した地域と考えてください。また、このような状況ですから、各古墳の諸要素や評価にも不確定な部分が多く、そこから導きだされる議論もそれなりのものにならざるを得ません。しかし、だからといって黙っていると“神奈川には古墳はない”などと揶揄されますし、主催者側からは大胆な意見をとの強い指導を受けているので、将来的には全てが覆されることを期待しつつ、西相模の古墳についての現状把握と独善的な想像力を少々加えたその位置付けを行なってみたいと思います。

1．各古墳の概要

取り上げた古墳は五世紀代までのものです。それぞれの古墳は一覧表にまとめてありますので、ここでは主要な古墳について表に記載できなかったことを中心に説明しておきます。

下依知大久根古墳(第1図上段)は、隣接してやや先行すると思われる方形周溝墓が6基確認されており、それらとの関連が注目されます。高森・塚越遺跡は、独立丘頂上に単独で存在するところに特徴があります。山ノ上2号墳(第1図下段)は、出土遺物から5世紀中頃の方墳と考えられます。隣にあるほぼ同時期の1号墳が円墳であることも興味深い点です。

北金目塚越古墳(第2図中段)は従来前方後円墳と考えられてきましたが、調査の結果前方後方墳の可能性が指摘されています。また、隣接して数基の方墳が見つかっているとも伝えられています。千代仲ノ町遺跡は、溝の一部分の調査ですが、調査者は前方後方型周溝墓を想定しています。3世紀後半に遡るものです。真土大塚山古墳(第3図上段)は、砂丘上(標高8m)に造られているため、発見時より墳丘の残りは良くなく、円墳(径30m)、前方後円墳(全長60m)、前方後方墳(全長43m)の諸説があります。いずれも確証はありませんが、ここでは本村氏の前方後方墳説の想定図(本村 1974)を紹介しておきます。主体部は二つと想定され、三角縁神獣鏡、変形四獣鏡、白銅製の鏃、巴形銅器など貴重な遺物が出土しました。三角縁神獣鏡は京都府の椿井大塚山古墳、岡山県の湯追車塚古墳と同じ鋳型で作られたものです。中央政権と密接なつながりを持っていた人物の存在を裏付ける資料として注目されます。

愛甲大塚古墳(第3図)は、別名、石田車塚古墳とも呼ばれ、円墳と考えられてきましたが、隣接地の調査により前方後円墳であることが判明しました。前方部上にはロームにまで達する平安時代の竪穴住居が造られており、その頃には既に前方部は失われていたようです。また、前方部の先端は中世の造成で削ら

れており、本来はより大きかったことが確実です。現状でも 30mを計り、測量調査による後円部の推定規模が 40m以上(高さ５ｍ)と考えられることから、その全長は最低でも 70m、後円部と前方部のバランス、後円部がより大きい可能性を考慮に入れれば 80～90mという数字も不自然ではありません。地頭山古墳(第２図下段)も全長 72m(後円部径 30m、高さ７ｍ)の前方後円墳です。時期には４世紀、５世紀の二説がありますが、測量調査だけですのでどちらも確証はありません。

御所ヶ谷遺跡ではともに円形基調の周溝墓と御所塚が見つかっています(第４図下段)。これらは一部重複してますが、御所塚が円形周溝墓を意識して造られた形跡が窺えることから、両者に大きな時期差はないと考えられます。円形周溝墓からは三連のＳ字甕、タタキ甕など 100 個体近くの土器が出土しており、時期は４世紀中頃～後半と考えられます。小金塚古墳(第４図上段)では、周溝から朝顔形埴輪と青銅製のリングが出土しています。この埴輪は南関東最古、４世紀末に位置付けられています。吾妻坂古墳は、三つの主体部(割竹形木棺２、土壙１)をもち、そこから銅鏡、鉄剣、鉄鉾、鉄鏃、刀子、玉類、櫛が出土しました。これほどの副葬品はこの地域では他に例を見ません。出土遺物から５世紀前半と考えられます。この他、いずれも測量調査しか行われていませんが、戸室天神山古墳(径 40m弱、高さ５ｍ)、三ノ宮松山古墳(推定径 34m、高さ６ｍ)、久野１号墳(径約 40m、高さ６ｍ)は、高い墳丘をもつ大型円墳です。石室の痕跡はなく５世紀代以前と推定されます。その立地の共通性からは、小金塚古墳と同時期である可能性も否定できません。

２．墳形からみた古墳の特徴

次に、各古墳を推定される墳丘の平面形態により分類し、それぞれの墳形の特徴について整理してみたいと思います。

（Ａ）**方形**　方形の墳墓といえば方形周溝墓が思い浮かびますが、まず古墳時代以前の方形周溝墓の特徴についてまとめてみます。当地域の弥生時代後期の方形周溝墓は、①一辺の長さ 10～20m、②集落のそばに連続して数基から数十基がまとまって造られ、③多くは中央に一つの主体部(土壙)を持つ。しかし、ほとんどの場合墳丘は残っていないため、発見された主体部は数例にすぎない。このことから④墳丘はそれほど高くはなかったと想像される。⑤出土遺物は、ほとんどが溝内から出土する土器だが、ごく稀にガラス玉や腕輪等の装飾品が見つかることもある。⑥その時期は、大型古墳の築造が始まる頃までは継続して造られる、という特徴をもっています。

それに対して西相模の方墳は、方形周溝墓と隣接して造られても明らかにそれと異なる墳丘をもつ(大久根古墳)、集団墓ではなく、丘陵頂上に一基が単独で造られる(高森・塚越遺跡)というように、墳形や規模の面では方形周溝墓の伝統を引き継いでいるものの、それとは一線を画し、そこから一歩抜け出した存在といえそうです。また、山ノ上２号墳のように、円形墳が主流となる５世紀中頃になっても方墳が造られていること、多くの円墳に混じって同じ場所に方墳が作られていることも重要な点です。

（Ｂ）**前方後方形**　この地域の前方後方墳には未だ確実といえるものはありません。数そのものが少ないとも言えますが、それだけでなく、墳丘の規模や立地も原因の一つと考えられます。近県では前方後方墳や前方後方型周溝墓が相次いで発見され、それらの多くは３世紀後半から４世紀代の時間幅に納まっています。当地域では今のところ多くを語ることはできませんが、今後新しく発見される可能性は高いと思

います。そしてそれは、資料の少ないより古い時期の古墳についての新知見をもたらすはずです。

（C）**前方後円形**　従来、円墳と思われていた愛甲大塚古墳が大型の前方後円墳であることが確認されました。が、調査によって裏付けられたのは今のところこの例だけです。愛甲大塚古墳の被葬者は、その規模からみてかなりの権力を手中にしていたと考えられます。幅 10mもの巨大な周溝は、それ以前とは比べられないほどの大土木工事であり、それを可能にするだけの力を必要としたはずです。円墳ではありますが、同規模の周溝は小金塚古墳でも見つかっています。このことは、それらの認められない地頭山古墳、二子塚古墳の評価にも微妙に影響を与えそうです。5世紀、6世紀ともいわれる両古墳ですが、立地はむしろより古い古墳にふさわしく、その位置付けはますます難しくなっています。

（D）**円形**　円形の墳墓はこの地域の弥生時代には見られなかったものです。その点で4世紀中頃に造られた御所ヶ谷遺跡の円形周溝墓、御所塚は貴重な存在です。これにより当地域では、このころまでに首長よりやや低いレベルに円形墳が取り入れられたことになります。その後、4世紀末から5世紀にかけては大型の円墳が出現します。その中には、小金塚古墳や吾妻坂古墳など埴輪や副葬品に中央とのつながりをみることのできる古墳も含まれ、その規模からは前方後円墳には及ばないものの、かなりの力を窺うことができます。また、5世紀中頃からは径 20mクラス、墳丘もほとんど残っていないような小さな円墳が多く見られるようになり、より下位のレベルにまで普及していることがわかります。このように、円墳はそれ自体の中にも歴然とした階層をみることができます。

（E）**共通**　墳形にかかわらず全国的な動向と比較すると、当地域の特徴として、竪穴式石室が採用されないこと、石製の腕輪、馬具、鎧が出土していないこと、南関東最古の埴輪がありながらその後は一切埴輪を用いないこと、が挙げられます。

ま と め

墳形を中心として、西相模の古墳について見てきました。ここで簡単にまとめ、断片的な資料ながら、当時の状況について考えてみたいと思います。①方形周溝墓の系譜を引くと考えられる方墳は、5世紀中頃までは継続する。②円墳は4世紀代に既にみられ、それは弥生時代からの伝統では理解できない。③その後円墳は4世紀末から5世紀にかけて大型化する。それは埴輪や鏡など中央の要素を含んだものである。④前方後円墳は4世紀には大型のものが造られ、その後5世紀、6世紀にどう継続するかは未だ推定の域をでない。⑤前期古墳は沖積低地を臨む台地先端部に位置することが多い、ということがいえます。すると例えば4世紀末には、方墳も、大小の円墳も、前方後円墳も、もしかすると前方後方墳までもが同時に造られていた可能性があり、そして前方後円墳だけでなく大型の円墳にも中央の影響が色濃く見られるということになります。そこには、在来、外来など複数の系列をもち、それらが重層的に絡み合った複雑な情勢が感じられます。とても前方後円墳を頂点とする確立した階層制や、いくつかの前方後円墳群の間を移動する首長権といった絵に描いたような支配体制を当てはめることは難しい気がします。三角縁神獣鏡を持ちながらただ一つ離れて砂丘上に存在する真土大塚山古墳の位置付けひとつをとっても、現時点では何も確かなことはいえません。このように、墳形だけからみても西相模には独自の地域事情をみることができ、その地域事情をより具体的にしていくことが当面の課題だと思います。

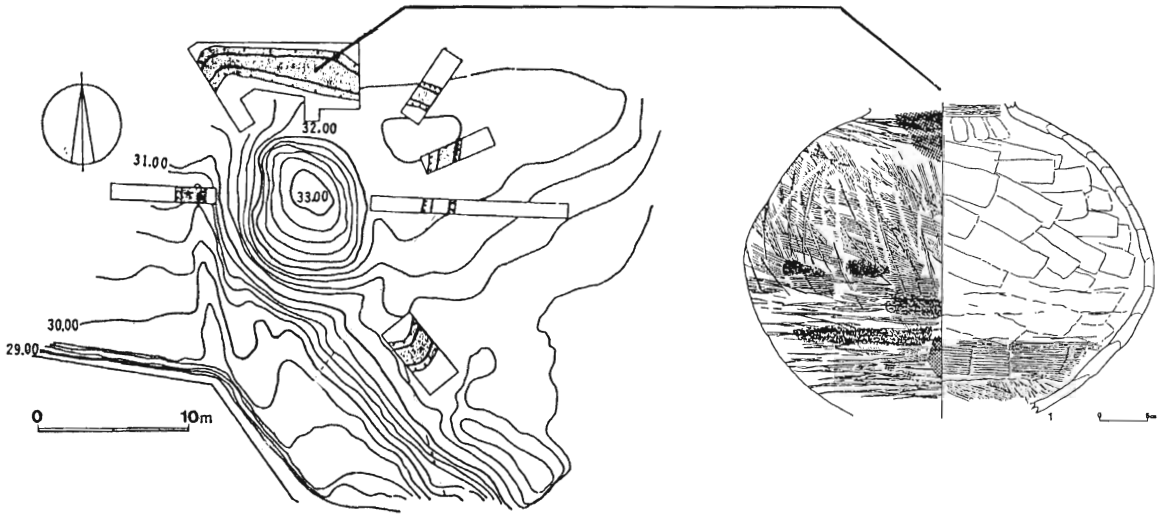
そのために注目したいのが大型古墳の分布です。相模川から金目川水系に至る地域には、それぞれの台

地先端部に古い古墳が築かれています。地頭山古墳、愛甲大塚古墳、小金塚古墳、北金目塚越古墳などです。二子塚古墳も含めていいかも知れません。それらの古墳はいずれも各河川の下流、つまり沖積平野の方向を向いて造られている点で共通の意識をもっていると考えられます。そして、それぞれの河川、台地毎に大型古墳と複数の小古墳を合わせた単位を想定することが可能です。大型の円墳もそれだけがかたまることなく各単位に分散しています。また、円墳の導入時期や方墳の残り方にはその単位独自の個性があるものと考えられます。このあり方は前方後円墳、前方後方墳が連なる相模川東岸の秋葉山古墳群とは明らかに異なります(関根 1992)。ただ秋葉山古墳群と、相模川を挟んだ対岸にある依知古墳群とは互いに視覚できる位置にあり、それなりの関係を想定するべきかも知れません(大塚 1994)。このように相模川西岸域の古墳は、より小さい単位を想定しながら全体をみるべきと考えます。そのためには、より細かなデータの蓄積が必要となることはいうまでもありません。

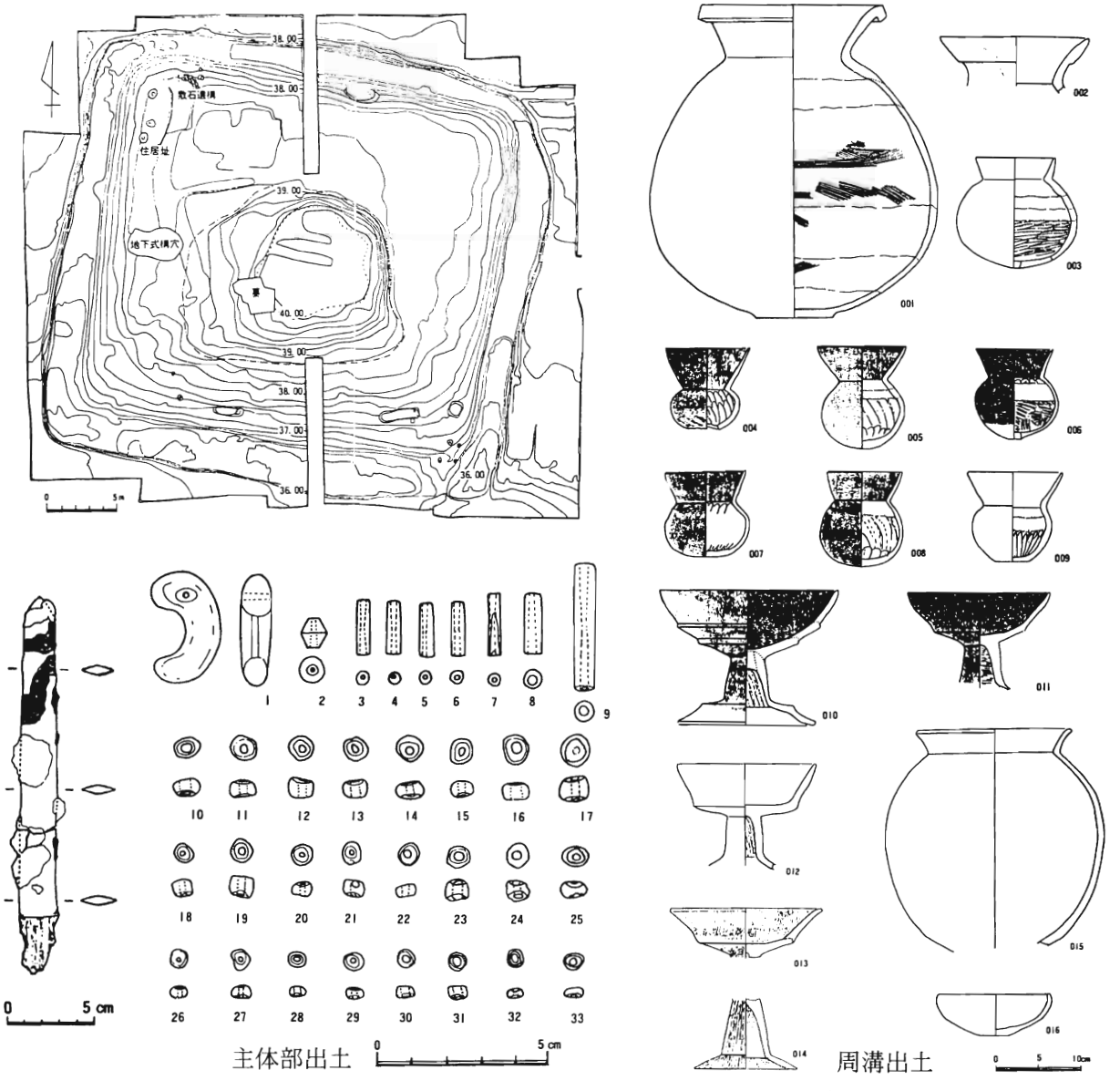
資料が不十分なのをいいことに勝手なことを書きましたが、これらの想定には当然各古墳の墳形と時期を確定する必要があります。その結果如何では全てはただの絵空事となることを十分ご承知置きください。誰もが円墳と信じて疑わなかった愛甲大塚古墳が前方後円墳であると判明した調査の担当者としては、小金塚古墳でさえも前方後円墳ではないかとの疑問を抱かずにはいられません。そういう立場からいえることは、今後誰も知らない古墳が発見されたり、例の無い副葬品が出土することがあっても、ちっとも驚かない覚悟だけはしておいたほうがいい、ということでしょうか。

参考文献

遠藤秀樹　1983　「相模川流域における古墳の展開」『専修史学』15
遠藤秀樹　1995　「神奈川県における古墳時代の開始」『考古論叢神奈河』第4集　神奈川県考古学会
大塚淑夫　1994　「西相模地方の古墳文化　―その1―」『東海大学高中紀要』第30輯　学校法人東海大学
関根孝夫　1992　「総括　西相模の方形周溝墓と前期古墳　―とくに相模川右岸地域を中心として―」『東海大学校地内遺跡調査団報告』3　東海大学校地内遺跡調査団
近野正幸　1993　「高塚古墳研究の現状と課題」『神奈川県の考古学の問題点とその展望』かながわの考古学第3集　神奈川県立埋蔵文化財センター
望月幹夫　1987　「古墳時代における地域社会の一様相」『東京国立博物館紀要』第22号Ⅰ
望月幹夫　1992　「相模の前期古墳」『東海大学校地内遺跡調査団報告』3　東海大学校地内遺跡調査団
本村豪章　1974　「相模・真土大塚山古墳の再検討」『考古学雑誌』60－1
（紙面の都合上、失礼ながらそれぞれの古墳の引用文献については省略させていただきました）

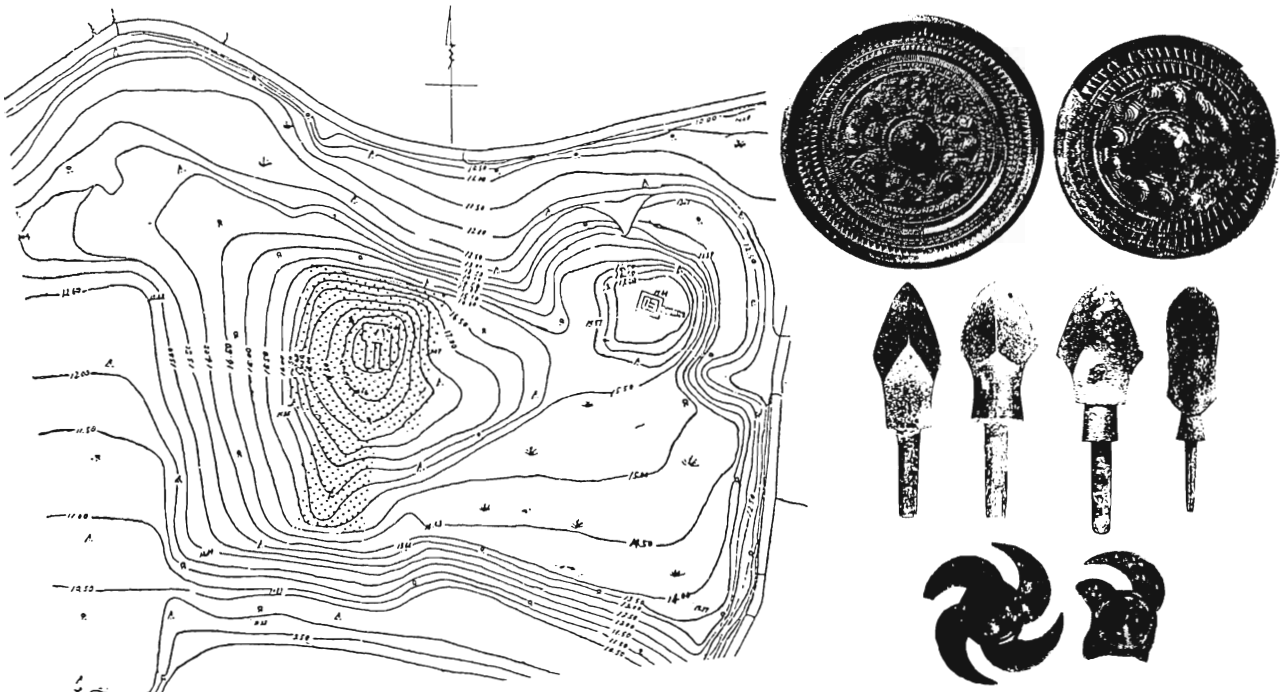


厚木市下依知大久根古墳の平面図（１／500）と出土土器（１／８）

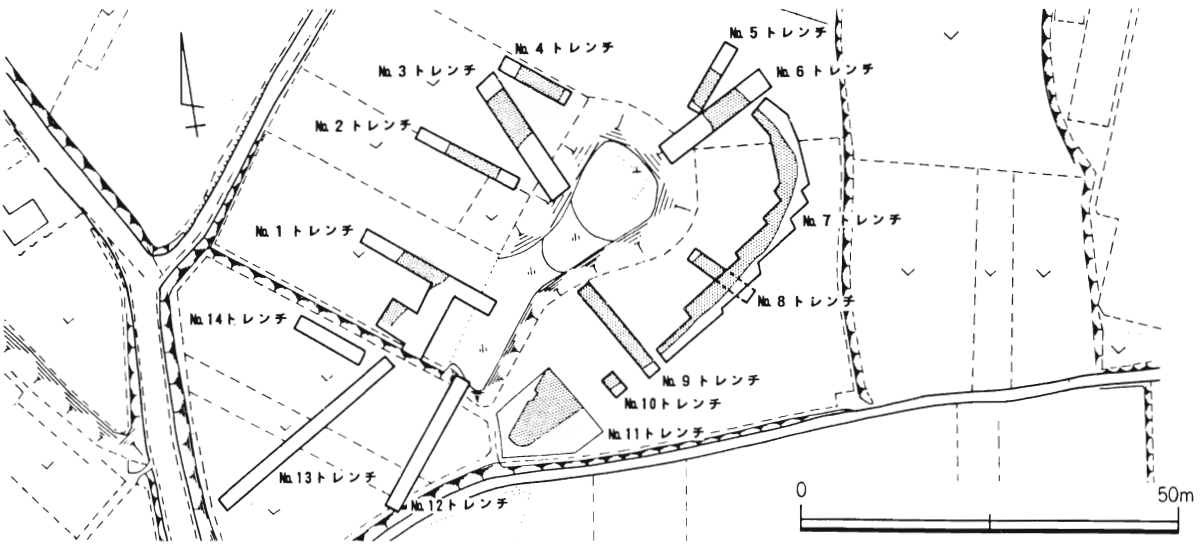


厚木市山ノ上２号墳の平面図（１／500）と出土遺物

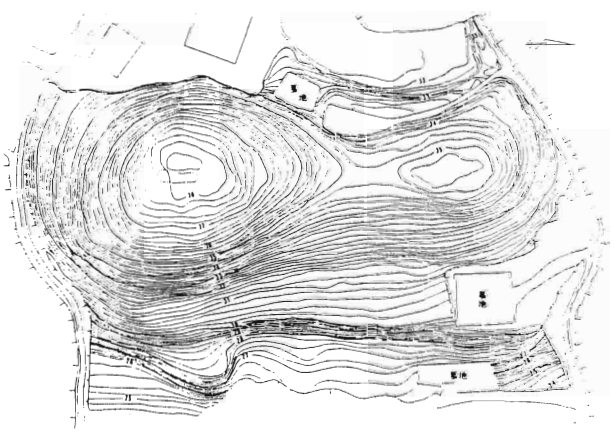
第１図　西相模の方形墳墓



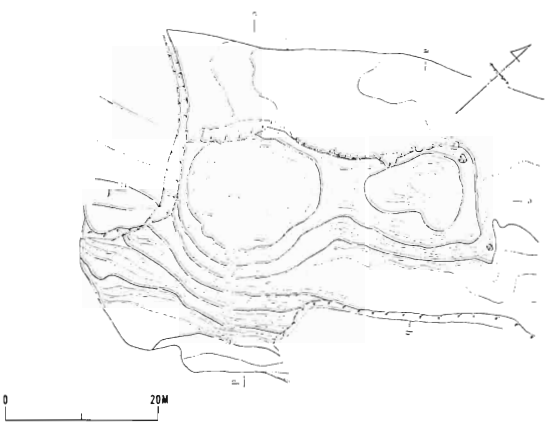
平塚市真土大塚山古墳の復元平面図（本村1974）と主要出土遺物



平塚市北金目塚越古墳の平面図（１／1000）

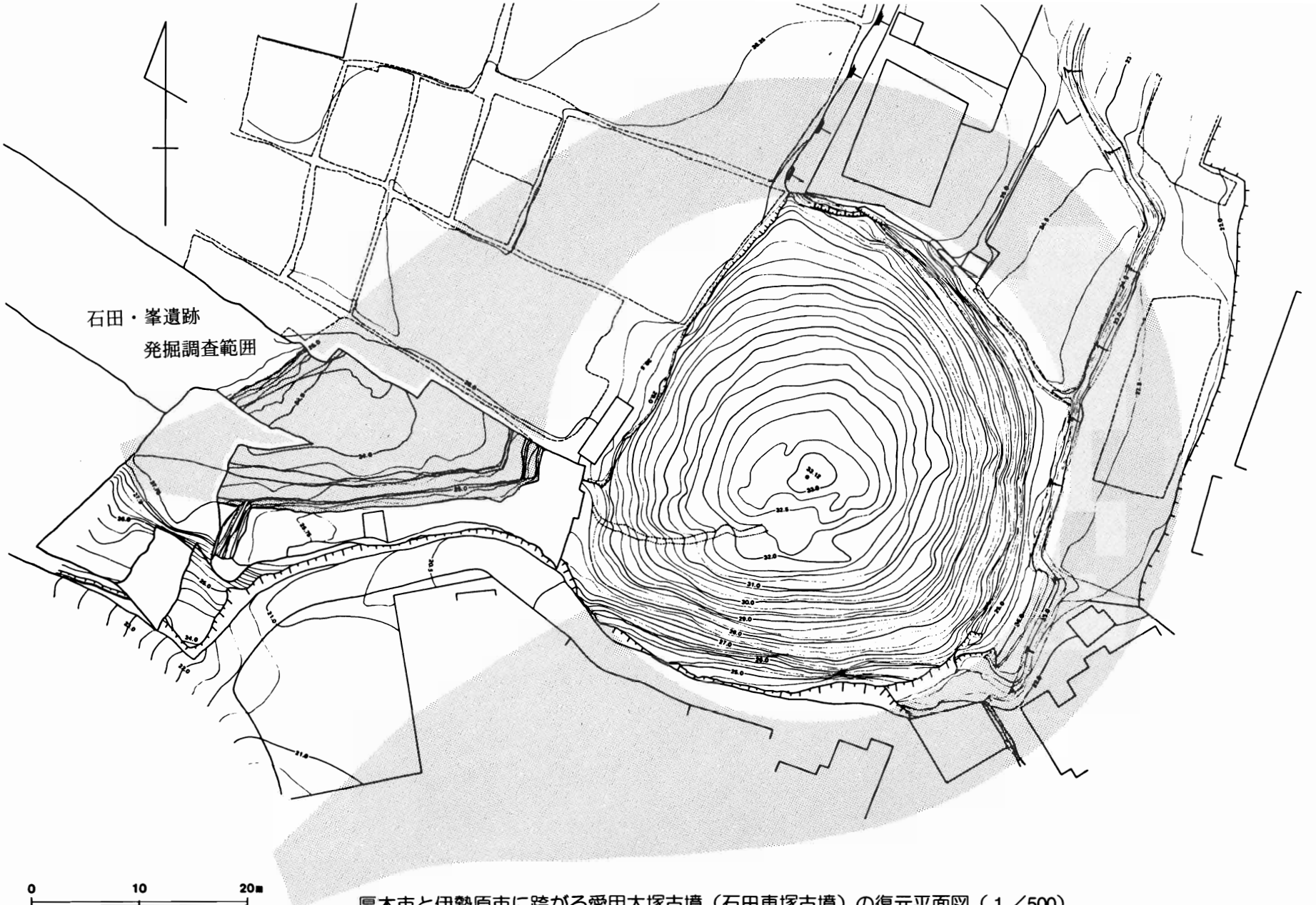


厚木市地頭山古墳の平面図（１／1000）



秦野市二子塚古墳の平面図（１／1000）

第２図　西相模の前方後方形、前方後円形墳墓

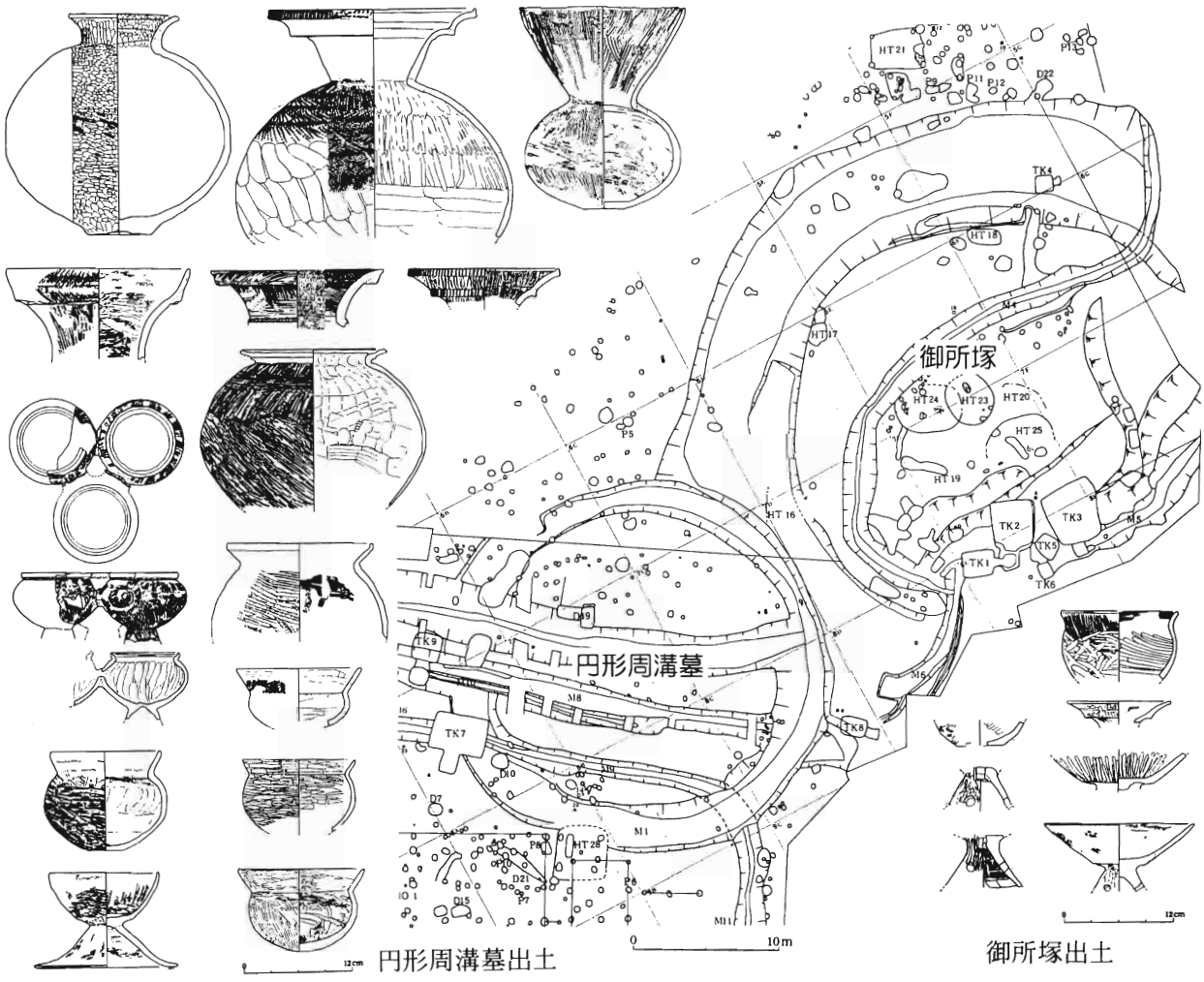


厚木市と伊勢原市に跨がる愛甲大塚古墳（石田車塚古墳）の復元平面図（１／500）

東海大学文学部考古学研究室1989に石田・峯遺跡の調査成果を合成して作製

第３図　西相模の前方後円形墳墓

伊勢原市小金塚古墳の平面図（１／1000）と出土埴輪（１／16）



平塚市御所ケ谷遺跡円形周溝墓・御所塚の平面図（１／500）と出土土器（１／８）

第４図　西相模の円形墳墓

平塚市塚越古墳

西川修一

1．所　在　地　平塚市北金目1613－2外

2．調査年月日　①1959.3.25～4.4(発掘)
②1994.2.22(測量調査)
③1994.12.15～1995.3.6
1996.2.14～2.23(範囲確認)

3．調査組織　①平塚市教育委員会・日野一郎
②東海大学文学部史学科
考古学研究室・近藤英夫 他
③ 神奈川県教育委員会・服部実喜

4．概　　要

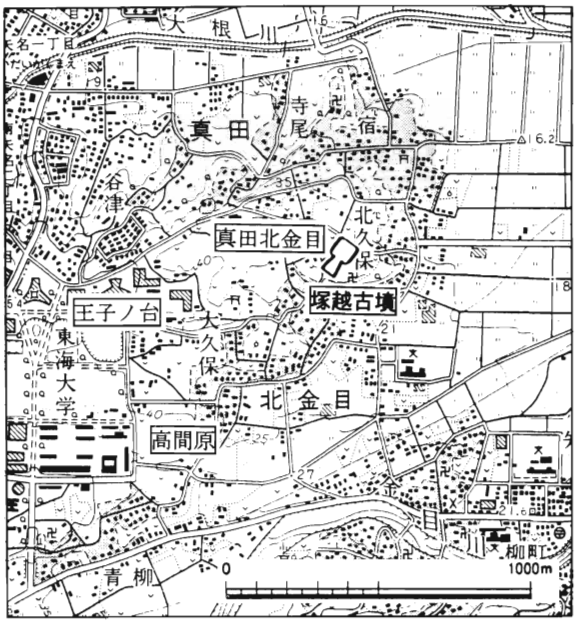
立地　塚越古墳は神奈川県の西部・相模川右岸平野に面する北金目台地の先端部に位置している。北金目台地は丹沢山地から南東方向に続く、標高40m前後の台地で、北側を鈴川支流である大根川の支谷に、南側は金目川本流に画されている(第1図)。

鈴川は渋田川と合流したのち、秦野盆地から流れ出る金目川に合流、河口部では花水川となり、平塚砂丘列の西側をよぎり、相模湾に注ぐ。

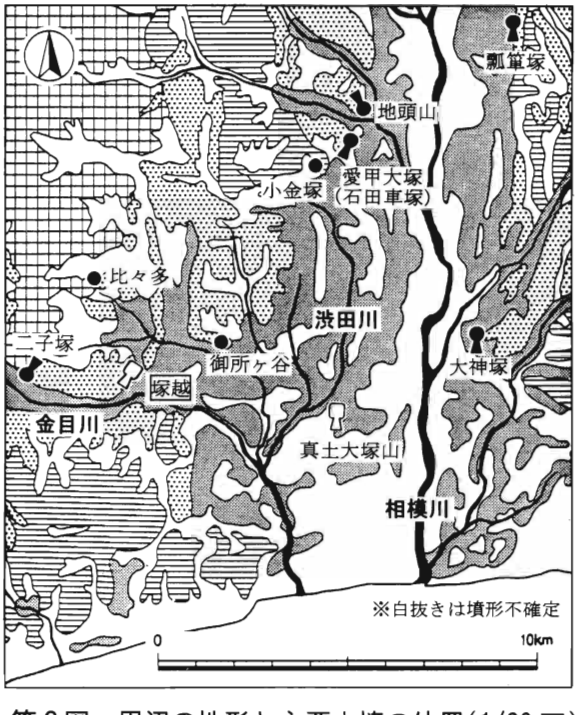
古墳の位置する北金目丘陵先端部は、これら花水川水系の小河川が形成する平塚砂丘列の北方の氾濫原に東面し、眺望の良い地点に該当する。ちなみに花水川河口からの直線距離は、約7kmである(第2図)。

周辺の遺跡　古墳の位置する北金目台地は、当該期の遺跡密集地である。同一台地上には王子ノ台遺跡(西口他1988など)・高間原遺跡(秋田1997)などがある。京都府椿井大塚山古墳等と三角縁神獣鏡(京大同笵鏡No.9・岡村他1989)を共有する平塚市真土大塚山古墳(石野他1936など)は、塚越古墳の東方約5km、平塚砂丘の最北列に位置していた。本墳は調査年次が古く、平面形・規模とも不明瞭であるが、かねてより前方後方形とする考え(本村1974)もあり、後述のように塚越古墳が、前方後方形である可能性が出てきたことを併せ考えると、真土大塚山古墳の検討にも新視点が加えられたこととなる。

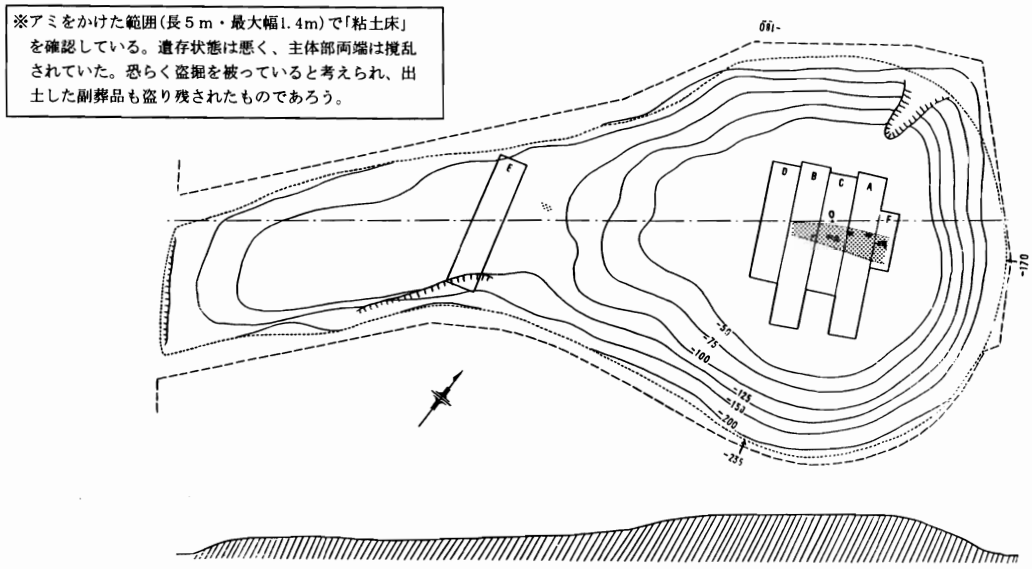
また塚越古墳の南西方向には、前期の可能性も



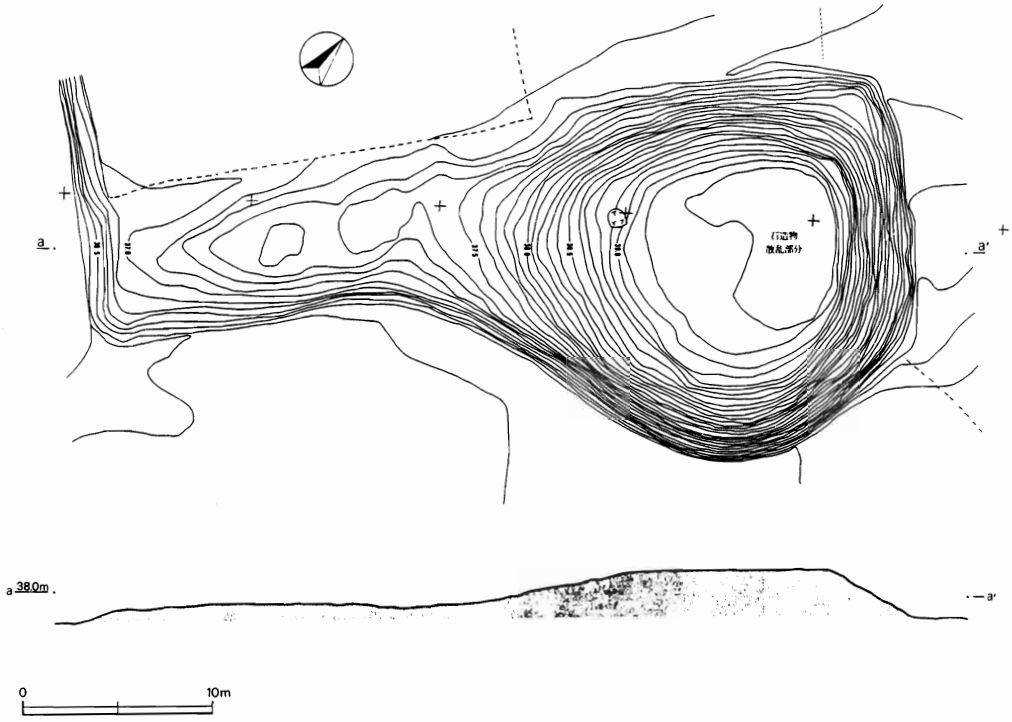
第1図　遺跡の位置(1/2.5万・伊勢原)



第2図　周辺の地形と主要古墳の位置(1/20万)



第3図　1959年調査時の塚越古墳測量図(1/400・日野1960より縮尺など改図転載)

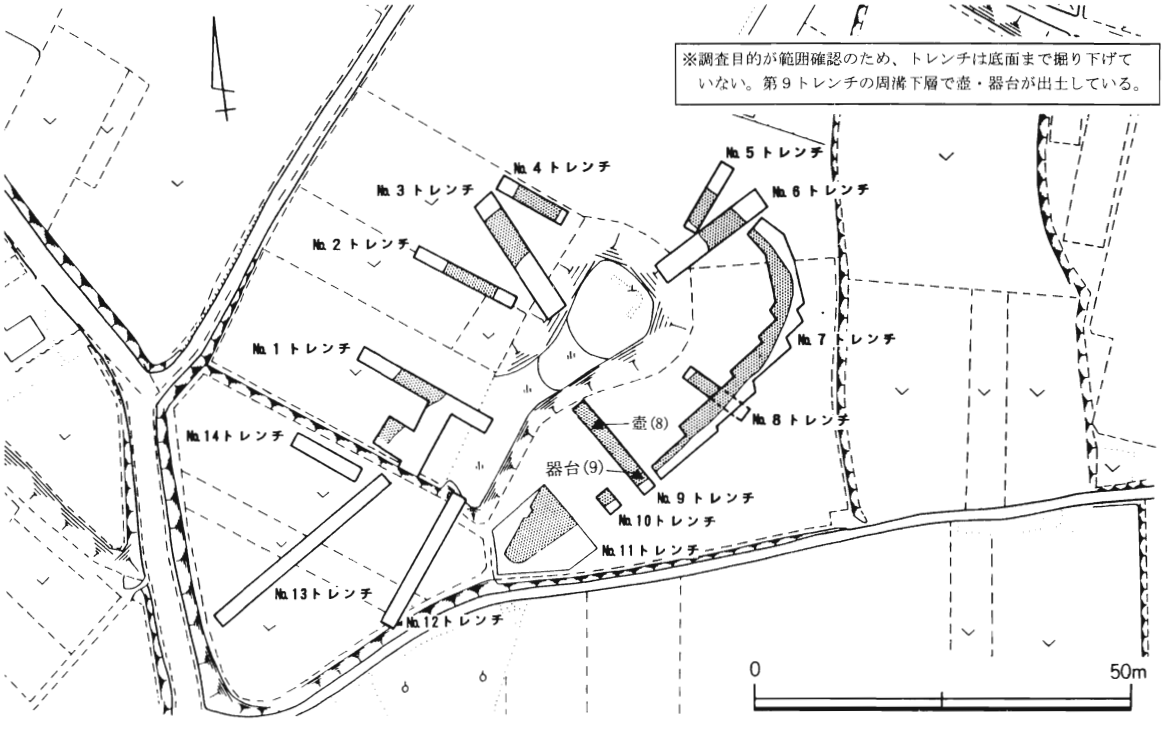


第4図　1994年測量調査時の塚越古墳測量図(1/400・近藤他1995より転載)

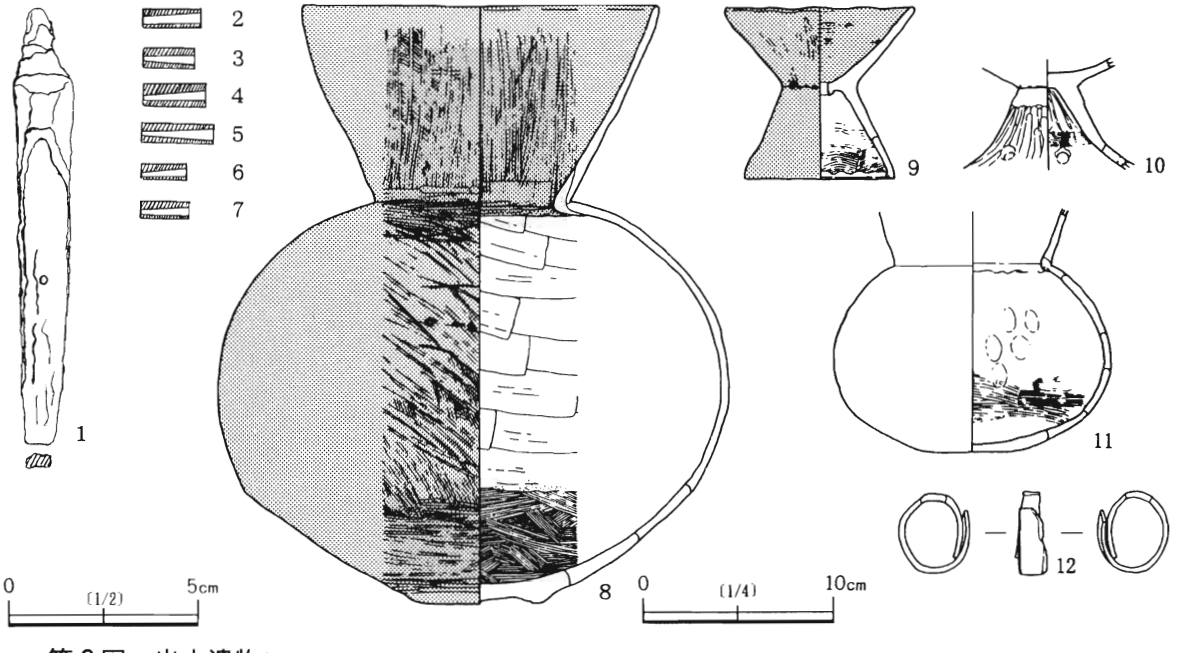
ある北金目神社古墳(方形 30m)が知られている(関根他 1994)。更に周囲は現在、真田・北金目遺跡群が調査進行中であるが、塚越古墳の隣接地で方形基調の墳墓群が複数存在するらしく、塚越古墳はその「群」の一角を成すことが明らかとなってきた。

調査　最初の調査は 1959 年日野一郎らにより実施された。墳頂部とくびれ部で合計6本のトレンチが調査され、測量結果は全長45mの前方後円墳で、後円部で長さ約5m・幅1.4mの「粘土床」に一部「ベンガラの塗布」を確認している(第3図)。遺物は主体部管玉6点と鉄製品1点(ノミ状?)が出土している(第6図1～7)。年代は6世紀代と推定している。

1994 年になり東海大学の考古学実習で再度測量し、より詳細な実測図を提示した(近藤他 1995)。



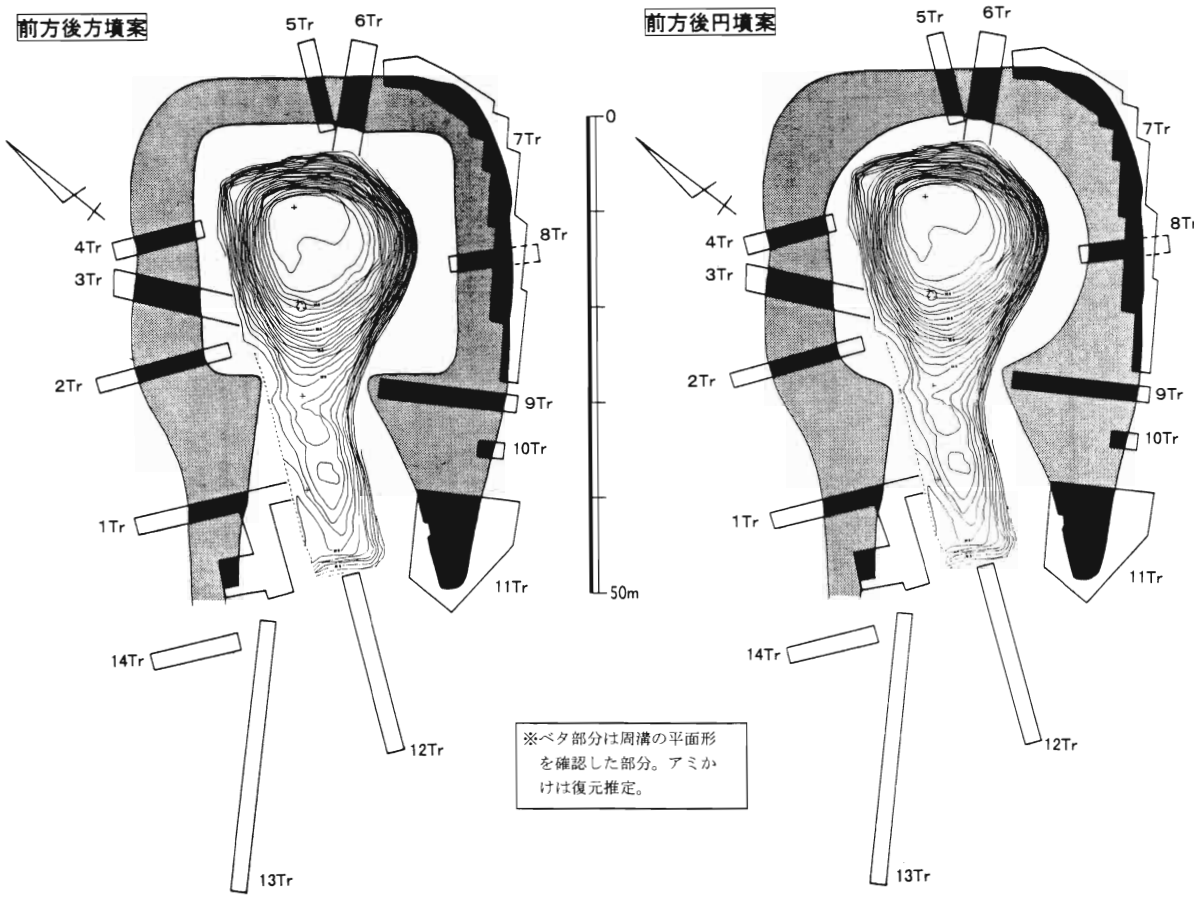
第５図　1994・1996年調査時のトレンチ配置と周溝検出状況(1/1000・服部他1997より転載)



第６図　出土遺物(1～７は日野1960より、８～12は服部他1997より改図転載。1～7&12は縮尺1/2、他は1/4)

また周囲の開発が迫り古墳の範囲を確認するため県教育委員会によるトレンチ調査が同年から２回にわたり、実施された(服部他1997)。

この範囲確認調査では、墳丘の周りに合計14本のトレンチが設定され、特に№.９トレンチでは周溝下層で壺・器台などが出土した(第５図・第６図8･9)。この調査は古墳の外周を確定することを目的として行われたため、設定したトレンチの中には、周溝立ち上がりラインを確認したのみで、それ以下の掘り下げを行っていない個所も多くあり、墳形や



第７図　塚越古墳　墳形復元案(模式図・1/800、服部他 1997 に近藤他 1995 を合成し、筆者作成)

規模などの未だ情報不足の感は否めない。ただし多くの新知見が得られ、以下のようにまとめられる。

①周溝外周の東側コーナーは方形を呈するらしい(第５～７トレンチ)。

②前方部前面に設定した第 12～14 トレンチで、周溝が確認されなかった。ただしこの部分は畑の耕作より、削平されたとするのが妥当と考えられる。結果、周溝幅を含めると全長約 60～70m、墳丘長は約 50mの規模が想定可能である。

③墳形は前方後方形が選択肢に含まれることとなった。第７図は各トレンチの周溝ラインを推定で結んだものであるが、ともに決め手に欠くのが現状である。ただし第２～４トレンチを結ぶラインは方形と復元した方が、自然な感じを与えるものとなり、ここでは「前方後方形案」に「分があり」としておく。

④周溝下層で黒色スコリアが認められ、吉川昌伸の分析により、４世紀代降下の S-24-4 ではないかとされている(西川他 1997：近刊 参照)。

⑤出土土器は供献土器かは不明であるが、築造時期に関係する遺物と思われる。器台(9)が「X形器台」を範型としているとすると、筆者編年観(西川 1993)の相模Ⅲ期後半(６期)、ないしはその直後、ほぼ前期後半に該当すると思われる。 全国古墳編年(和田 1987･広瀬 1991)では、３期～４期前半頃とするのが穏当であろう。

なお塚越古墳は現状保存される事となった。

(本稿の挿図作成には、黄金井真哉氏の助力によるところが大きい。記して感謝する。また参考文献は紙数の関係で省略せざるを得ない。悪しからず。)

大田区宝莱山古墳

野本孝明

1．所在地　大田区田園調布四丁目４番

2．調査年月日　平成７年７月24日～９月30日
平成８年11月15日～12月15日

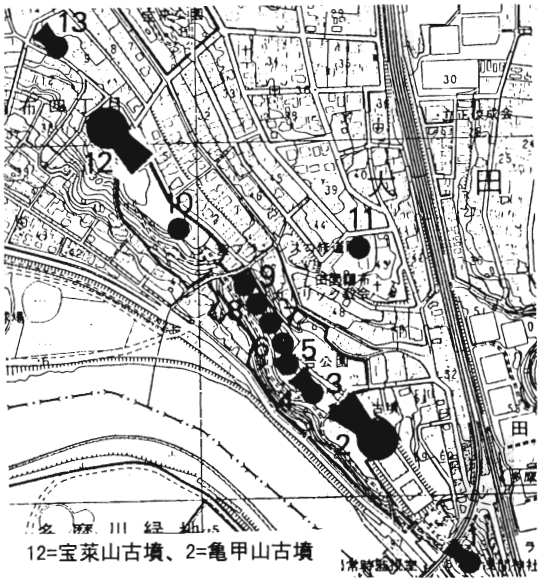
3．調査組織　東京都指定史跡宝莱山古墳調査会
調査団長　亀井明徳(第一次調査)
野本孝明(第二次調査)

4．概　　要　発掘調査は、多摩川台公園拡張部の公園整備に伴う事前の確認調査である。また、この調査は、東京都の指定旧跡に指定されている宝莱山古墳を史跡として保存・活用されることも目的としている(平成8年3月都史跡に変更)。

調査は、古墳の規模と墳形を把握するために、前方部とその周辺および後円部の一部にトレンチを１４カ所設定した。その結果、2､5､7の各Ｔで は、前方部と後円部が接する「くびれ部」が明瞭に確認され、墳端は、地山（黒色土層）の下の関東ローム層を削り出して成形していた。そして、2､5､11､14の各Ｔでは墳端の上に一段のテラスが設けられていた。

今回の調査では、前方部の埋葬施設の存否が、調査目的の一つにあった。この確認調査は、地中レーダーによる方法を採用した。その結果、5.5m×3.3mの埋葬施設が推定され、その掘り方は12m×4.4mで、前方部の埋葬施設としては立派な構造が推定された。

古墳の規模は、各Ｔで確認した墳端と「くびれ部」の形状に基づいた規模は、前方後円墳の築造企画から全長97m、後円部径52m、後円部高11m前方部幅38m、前方部高8mと推定された。墳形は、前方部前端の11、14Ｔの墳端が「八」の字に 広がり、前方部幅が長く、その前端が円弧状と考えられ、前方が「撥状」の形態をとるタイプで、発掘調査前の柄鏡形前方後円墳とは異なる前方部撥状の前方後円墳であることが判明した。古墳の範囲は、前方部の南側の6､12､13Ｔでは墳丘裾から台地際まで張り出す突出部があり、古墳とその下の台地平坦面全体におよぶと推定される。なお、この古墳は、墳端が削り出したままで周溝等は設けられていない。古墳の築造方法は、地山(縄文・弥生時代の包含する黒色土層)を整地した上に墳端とその周辺から削り出した土を盛土として積み上げ、墳丘を築いたと考えられる。この積み上げ方から、前方部3.5m以上、後円部約7m程積み上げ、墳丘の裾は2m程削り出



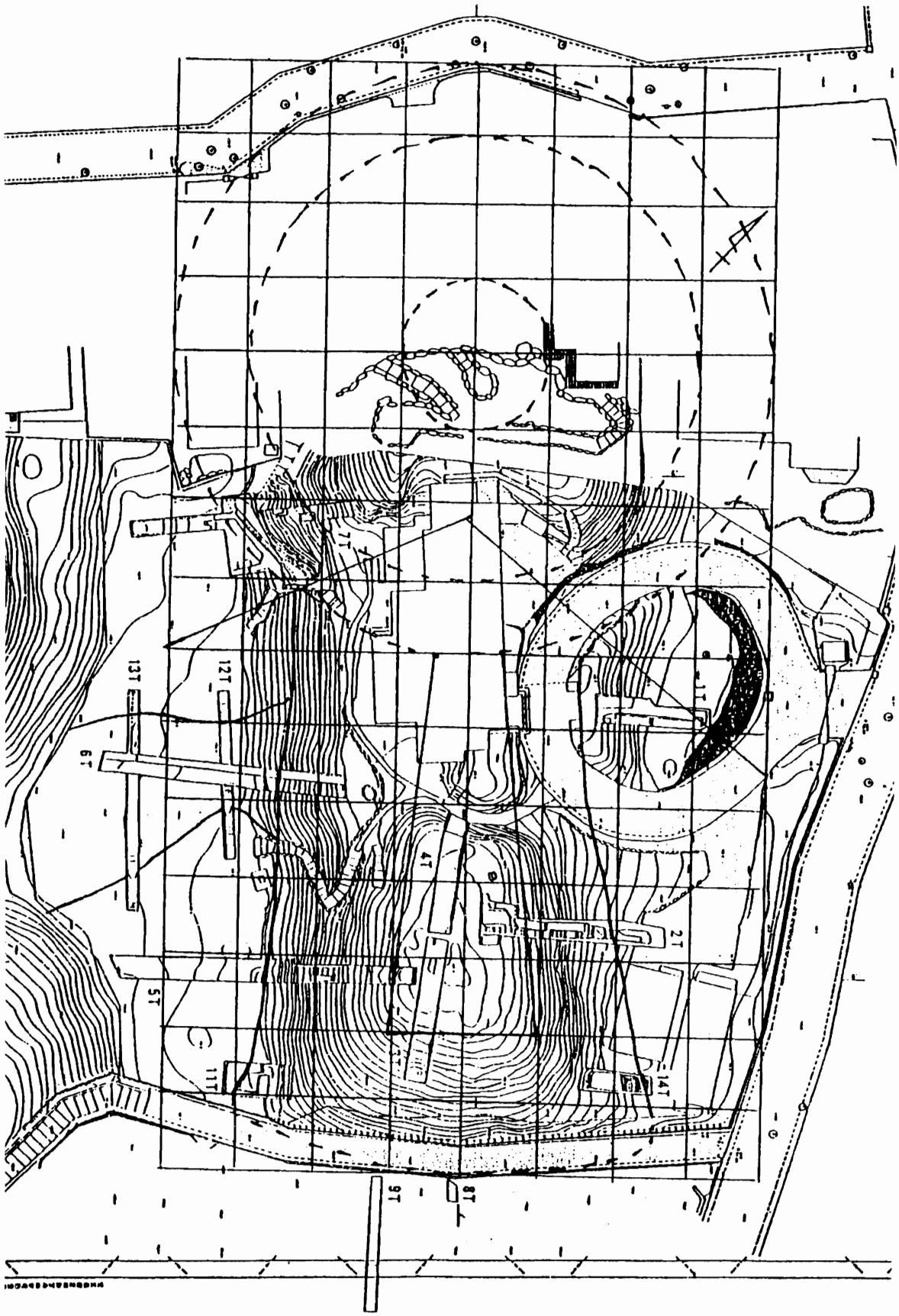
12=宝莱山古墳、2=亀甲山古墳

していたこのことは、墳端下から見上げると、より高く見えるように意図したものと考えられる。古墳の築成は、前方後円墳の築造企画では前方部二段後円部三段の築成と思われる。

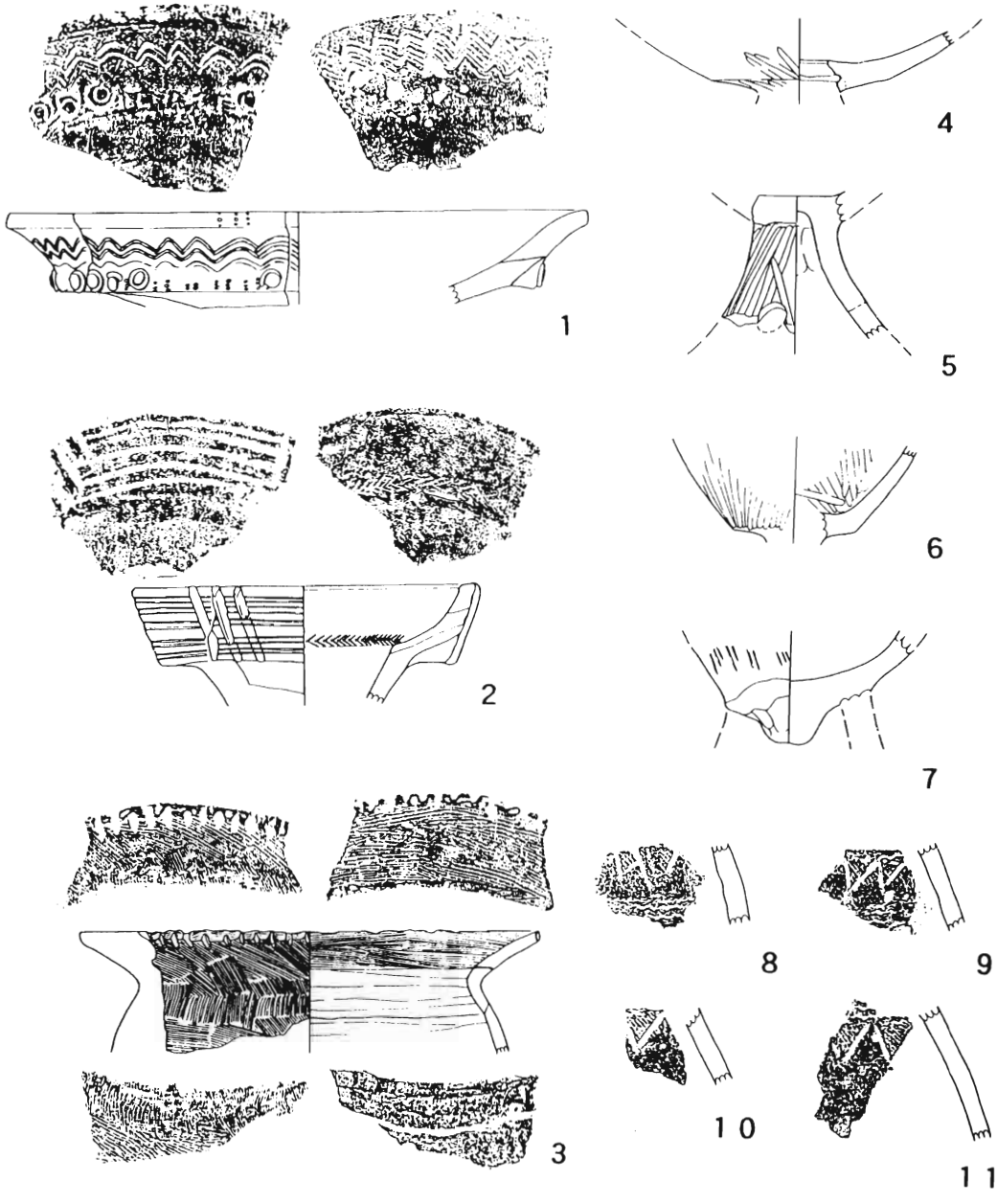
この古墳の8～10Ｔを除く各Ｔから、土器が出土した。７Ｔの「くびれ部」から４世紀前半の土器が多く出土した。この中には、古くは3世紀末の庄内Ⅱ式併行や廻間Ⅱ式併行の壷形土器の口縁部破片がみられる。また、4世紀前半の在地の台付甕形土器の口縁部破片、さらに同時期か若干遡る高杯の脚部破片がみられる。これらの出土品から3世紀末の土器も若干含まれるが、おおよそ4世紀前半代の土器と考えられる。

宝莱山古墳の築造年代は、出土土器のなかで4世紀前半を中心に考え、前方部の墳形が撥状のタイプのため、少なくとも4世紀前半と推定出来る。

今回の調査から、宝莱山古墳は４世紀前半に多摩川流域で最初に築造された前方後円墳と考えられ、多摩川流域の古墳時代の開始の時期について従来の４世紀後半から前半へと開始時期が大幅に遡ることになった。このことは、亀甲山古墳、白山古墳、観音松古墳等の南武蔵の４世紀代の前方後円墳の築造時期について、再検討が必要と思われる。また、前方後円墳の築造企画に基づく宝莱山古墳の復元を行い、先に挙げたいろいろな再検討事項について、畿内、東海地域等に視野を広げて考えることが必要である。



第１図　東京都大田区宝莱山古墳築造企画図・ﾄﾚﾝﾁ配置図(S=1:500)



1・3～5（7トレンチ）　2（5トレンチ）　6・7（12トレンチ）　8～11（14トレンチ）

0　10cm

第２図　東京都大田区宝莱山古墳出土土器実測図・拓影図

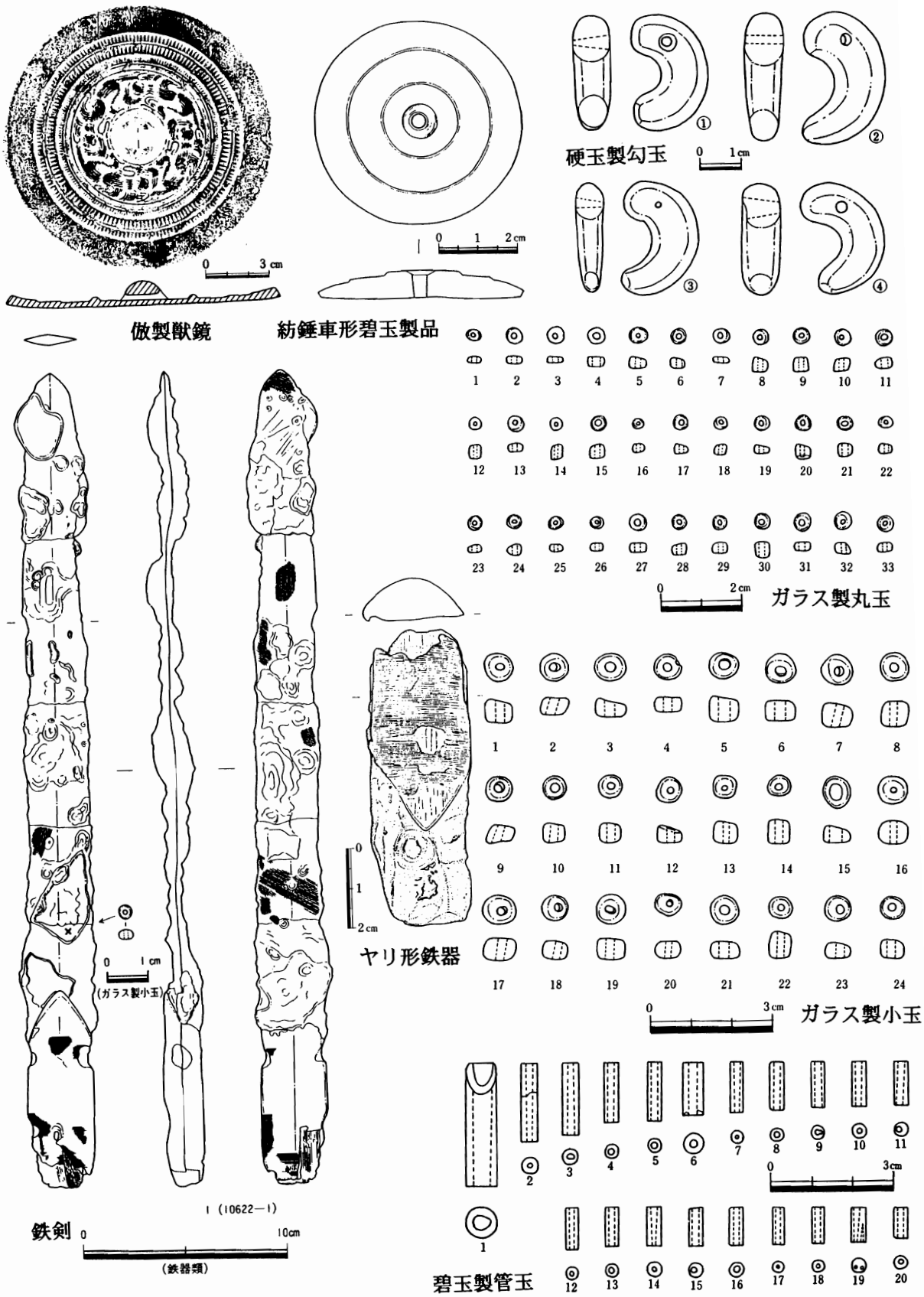
参考文献

細谷公一・三宅俊太郎　１９３５　「田園調布寶莱山古墳」『武蔵野』２２－１　武蔵野会

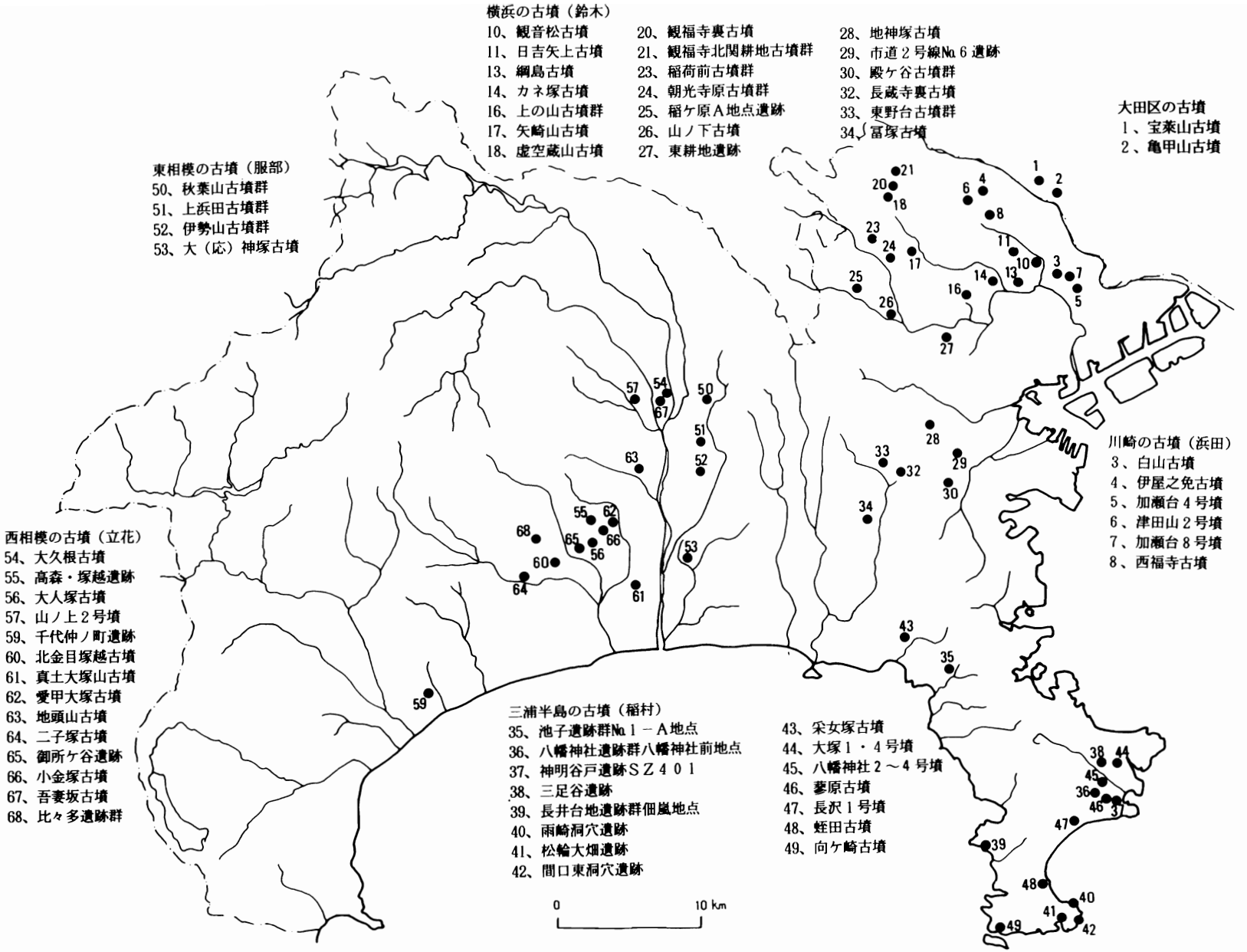
穴沢和光・西岡秀雄　１９８１「田園調布宝莱山古墳の研究」『史誌』１５　大田区史編さん室

野本孝明　１９９６「宝莱山古墳の範囲確認調査出土の土師器について」『東京考古』１４　東京考古談話会

亀井明徳・野本孝明　１９９６「(29)東京都宝莱山古墳の調査」日本考古学協会第62回総会研究発表要旨



第３図　東京都大田区宝莱山古墳出土品(昭和９年出土)


横浜の古墳（鈴木）
10、観音松古墳
11、日吉矢上古墳
13、網島古墳
14、カネ塚古墳
16、上の山古墳群
17、矢崎山古墳
18、虚空蔵山古墳
20、観福寺裏古墳
21、観福寺北関耕地古墳群
23、稲荷前古墳群
24、朝光寺原古墳群
25、稲ケ原Ａ地点遺跡
26、山ノ下古墳
27、東耕地遺跡
28、地神塚古墳
29、市道２号線No.６遺跡
30、殿ケ谷古墳群
32、長蔵寺裏古墳
33、東野台古墳群
34、冨塚古墳
大田区の古墳
１、宝萊山古墳
２、亀甲山古墳
東相模の古墳（服部）
50、秋葉山古墳群
51、上浜田古墳群
52、伊勢山古墳群
53、大（応）神塚古墳
川崎の古墳（浜田）
３、白山古墳
４、伊屋之免古墳
５、加瀬台４号墳
６、津田山２号墳
７、加瀬台８号墳
８、西福寺古墳
西相模の古墳（立花）
54、大久根古墳
55、高森・塚越遺跡
56、大人塚古墳
57、山ノ上２号墳
59、千代仲ノ町遺跡
60、北金目塚越古墳
61、真土大塚山古墳
62、愛甲大塚古墳
63、地頭山古墳
64、二子塚古墳
65、御所ケ谷遺跡
66、小金塚古墳
67、吾妻坂古墳
68、比々多遺跡群
三浦半島の古墳（稲村）
35、池子遺跡群No.１－Ａ地点
36、八幡神社遺跡群八幡神社前地点
37、神明谷戸遺跡ＳＺ４０１
38、三足谷遺跡
39、長井台地遺跡群佃嵐地点
40、雨崎洞穴遺跡
41、松輪大畑遺跡
42、間口東洞穴遺跡
43、采女塚古墳
44、大塚１・４号墳
45、八幡神社２～４号墳
46、蓼原古墳
47、長沢１号墳
48、蛭田古墳
49、向ケ崎古墳
0
10 km

古墳分布図

古墳一覧表

川崎の古墳(浜田)

No.		古墳名	所在地	立地	墳形	規模(m)	主軸	主体部	副葬品	出土遺物
3		白山古墳	幸区	低台地	前方後円	全長87	N-49-E	後円部: 粘土槨2 木炭槨1 前方部: 粘土槨1	鏡・玉類・鉄剣・鉄製農具・鉄鏃等	土師器
4		伊屋之免古墳	高津区	台地	円	径17	N-87-E (主体部)	類粘土槨	鉄鏃・玉類・土師器	
5		加瀬台4号墳	幸区	台地	円?	長径30		石室?	鏡・鉄斧	埴輪?
6		津田山2号墳	高津区	台地	円	径29		木棺直葬	土師器	
7		加瀬台8号墳	幸区	台地	方	一辺24				土師器
8		西福寺古墳	高津区	台地	円	径29				埴輪

横浜の古墳(鈴木)

No.	本文	古墳名	所在地	立地	墳形	規模(m)	主軸	主体部	副葬品	出土遺物
9	1A	山野古墳	鶴見区	丘陵上		不明			玉類	
10	2	観音松古墳	港北区	丘陵上	前方後円	約90		後円部: 粘土槨2 前方部: 粘土槨1	内行花文鏡,銅鏃,鉄刀,鉄斧,玉類,紡錘車形碧玉製品	
11	3	日吉矢上古墳	港北区	丘陵上	円	24以上		粘土床	ダ龍鏡,鉄剣・鉄鏃竪櫛・玉類	埴輪
12	4	日吉台3号墳	港北区	台地上	円	18.85～ 15.4		粘土槨	鉄刀	土器・埴輪
13	5	綱島古墳	港北区	丘陵上	円?	20ないし30		木棺直葬	鉄刀・鉄鏃,刀子	埴輪・土師器・須恵器
14	6	カネ塚古墳	港北区	丘陵上	円	34		木棺直葬?	変形四神鏡,玉類	
15	7	折本西原遺跡 2号円形周溝 3号円形周溝	緑区	丘陵上		外径 22.4×21.6 22.7				土師器・須恵器
16	8A	上の山古墳群 2号墳	緑区	丘陵上	円	外径 19.5				土師器
	8B	3号墳			方	9.5		箱形木棺直葬?	鉄刀・鉄剣	土師器
	8C	4号墳			円	13.5		割竹形木棺	鉄鏃・刀子	土師器・埴輪
17	9	矢崎山古墳	青葉区	丘陵上	方	20		箱形棺状石槨	鉄刀・鉄鏃,銅製耳飾,銅地銀張製品残欠	
18	10	虚空蔵山古墳	青葉区	丘陵上	円	35		粘土槨 木棺直葬	鉄剣・鉄鏃,ヤリガンナ 玉類	土師器
19	11	虚空蔵山1号方形周溝墓	青葉区	丘陵上	長方	15×17		木棺直葬	なし	なし
20	12	観福寺裏古墳	青葉区	丘陵上	円	約20		遺存せず		土師器
21	13A	観福寺北関耕地古墳群 1号墳	青葉区	丘陵上	方	周溝内縁: 13.2×12.2		木棺直葬?	不明鉄製品	土師器
	13B	2号墳			方	12.5		木棺直葬?	鉄剣,鉄斧・ヤリガンナ	土師器
	13C	3号墳			方	13+		木棺直葬		土師器,鉄製鎌
	13D	5号墳			方	12.6×11.6		遺存せず		土師器
22	14	赤田4号墳	青葉区	丘陵上	円	25		木棺直葬	鉄刀・鉄鏃・刀子	なし

23	15A	稲荷前古墳群 1号墳	青葉区	丘陵上	前方後円	46	S-13-E	粘土槨	玉類	なし
	15B	6号墳			前方後円	32	S-33-E	なし	なし	なし
	15C	16号墳			前方後方	38	N-2-E	未調査		土師器
	15D	17号墳			方			未調査		
24	16A	朝光寺原古墳群 1号墳	青葉区	丘陵上	円	37		木棺直葬	三角板鋲留甲冑・鉄剣・鉄刀・鉄鉾・鉄鏃，滑石製玉類	
	16B	2号墳			円	約20		木棺直葬	鉄刀・鉄鏃，馬具（轡）	
	16C	3号墳			円	約20		木棺直葬？	鉄刀・鉄鏃，馬具（剣菱形杏葉など）	
25	17	稲ヶ原A地点遺跡1号方形周溝墓	青葉区	丘陵上	方	溝外縁：24×16	N-48-E	遺存せず		土師器
26	18	山ノ下古墳	緑区	丘陵上	円	約20		遺存せず		土師器・須恵器・小玉・紡錘車・ヤリガンナ
27	19	東耕地遺跡 1号方形周溝墓	緑区	丘陵上		溝外縁：11×10	ほぼ南北	遺存せず		土器
		2号方形周溝墓				一辺約12	ほぼ南北	遺存せず		
28	20	地神塚古墳(仏向町古墳)	保土ヶ谷区	丘陵上	円	23		木棺直葬	鉄鏃・鉄板片，玉類	土師器
29	21	市道高速2号線No.6遺跡方形周溝墓群 3号	南区 保土ヶ谷区	台地上		溝外縁：14.5×14		遺存せず		土器
		5号				一辺約20				
30	22A	殿ヶ谷古墳群 1号墳	南区	丘陵上	前方後円	約42		遺存せず		土師器
	22B	2号墳			前方後円	31	S-13-W	木棺直葬	なし	土師器？
	22C	3号墳			前方後円	31	S-13-W	木棺直葬		土師器・刀子
31	23	大塚古墳	港南区	丘陵上	前方後円			不明	不明	
32	24	長蔵寺裏古墳	戸塚区	丘陵上	円	周溝外縁：22×21		木棺直葬？		土師器・須恵器片
33	25A	東野台古墳群 1号墳	戸塚区	丘陵上	方	13.5×11		木棺直葬？	鉄剣断片	土師器
	25B	2号墳			前方後方	54	N-26-W	割竹形木棺？	鉄剣，刀子，玉類（滑石製含む）	土師器
	25C	3号墳			方？	約11		箱形木棺直葬？	なし	土師器，鉄製鎌
34	26	富塚古墳	戸塚区	丘陵上	前方後円	推定35		不明		

三浦半島の古墳(稲村)

No.	本文	古墳名	所在地	立地	墳形	規模(m)	主軸	主体部	副葬品	出土遺物
35	A	池子遺跡群 No.1-A地点	逗子市	低地	方形周溝墓群					
					壺棺墓			壺棺		
36	B	八幡神社遺跡群八幡神社前地点	横須賀市	砂丘	方形周溝墓	6.5×7.0				土師器
37	C	神明谷戸遺跡 SZ401	横須賀市	テラス	方形周溝墓					土師器
					壺棺墓			壺棺		
38	D	三足谷遺跡	横須賀市	テラス	方形周溝墓群					土師器
39	E	長井台地遺跡群佃嵐地点	横須賀市	台地	箱式石棺墓			箱式石棺		

40	F	雨崎洞穴遺跡	三浦市	尾根	舟形木棺墓			舟形木棺	玉類	
					舟形配石墓			舟形配石	玉類	
41	G	松輪大畑遺跡	三浦市	台地	方形周溝墓群					土師器
42	H	間口東洞穴遺跡	三浦市	尾根	直葬墓			直葬	玉類	土師器
43	1	采女塚古墳	鎌倉市	砂丘						埴輪
44	2	大塚第1号墳	横須賀市	丘陵	前方後円	31.3	N-78-W	木棺直葬	玉類・直刀 刀子・鉄鏃	須恵器
	3	大塚第4号墳	横須賀市	丘陵	前方後円	19.0	N-75-W	木棺直葬	玉類・直刀 刀子・鉄鏃	須恵器
45	4	八幡神社第2号墳	横須賀市	砂丘						土師器
	5	八幡神社第3号墳	横須賀市	砂丘	円？	12.6？				土師器？
	6	八幡神社第4号墳	横須賀市	砂丘						埴輪
46	7	蓼原古墳	横須賀市	砂丘	前方後円	28.0	N-40-W			埴輪
47	8	長沢1号墳	横須賀市	尾根	円	22×20		木棺直葬	玉類・直刀 剣・刀子	玉類・剣・鉾・鉄鏃・刀子・土師器
48	9	蛭田古墳	三浦市	台地				礫槨？	直刀・鉄鏃 鉄斧	須恵器
49	10	向ヶ崎古墳	三浦市	台地						埴輪

東相模の古墳(服部)

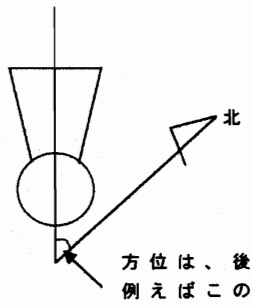
No.		古墳名	所在地	立地	墳形	規模(m)	主軸	主体部	副葬品	出土遺物
50		秋葉山1号墳	海老名市	丘陵	前方後円	主軸58	N-174-W			
		2号墳			前方後円	主軸48	N-108-E			
		3号墳			前方後円？	径45				土師器壺・高坏
		4号墳			前方後方？	主軸41	N-170-W			土師器壺
		5号墳			方	主軸26				土師器壺・高坏・坩
		6号墳			円					
51		上浜田1号墳	海老名市	丘陵	円	径20				
		2号墳			円？	長軸30				
		3号墳			円	径35		遺存せず	なし	なし
		太鼓塚古墳 (上浜田5号墳			円	径35				土師器壺・高坏
		上浜田6号墳			方	長軸30				土師器壺
		瓢箪塚古墳 (上浜田7号墳			前方後円	主軸71以上	N-160-W			埴輪
52		伊勢山1号墳	海老名市	丘陵	円？	径38				
		2号墳			円	径22				土師器高坏，須恵器坏・甕
53		大(応)神塚古墳	寒川町	台地	前方後円	長軸51	N-150-W	木棺？	青銅鏡・直刀 ・鉄製品	

西相模の古墳(立花)

No.		古墳名	所在地	立地	墳形	規模(m)	主軸	主体部	副葬品	出土遺物
54		大久根古墳	厚木市	河岸段丘上	方	18×19				土師器
55		高森・塚越遺跡	伊勢原市	丘陵頂上部	方	16～17		土壙？		土師器
56		大人塚古墳	伊勢原市	台地先端部	方	20位				
57		山ノ上2号墳	厚木市	台地先端部	方	16×13		土壙	鉄剣、勾玉、管玉、水晶玉、ガラス玉	土師器

58		北金目神社古墳	平塚市	台地上	方？	一辺28前後				土師器
59		千代仲ノ町遺跡第Ⅱ地点 SD02	小田原市	台地上	前方後方？					土師器
60		北金目塚越古墳	平塚市	台地先端部	前方後方？	（P３９ 資料報告参照）				
61		真土大塚山古墳	平塚市	砂丘上	前方後方？	43×23	N-170-W	木棺直葬 粘土槨?	銅鏡、直刀、銅鏃、巴形銅器、鉄斧、刀子、やりがんな、勾玉、算盤玉、管玉、ガラス玉	土師器
62		愛甲大塚古墳	厚木市 伊勢原市	台地先端部	前方後円	75×45以上	N-70-W?			土師器
63		地頭山古墳	厚木市	台地先端部	前方後円	72×36	N-5-W			
64		二子塚古墳	秦野市	台地先端部	前方後円	44×26	N-44-E			土師器
65		御所ケ谷遺跡 御所塚	平塚市	台地上	円	径30				土師器
		円形周溝墓			円	径20				土師器
66		小金塚古墳	伊勢原市	台地先端部	円	径48				円筒埴輪 青銅環
67		吾妻坂古墳	厚木市	台地上	円？	推定径55		割竹木棺、土壙	銅鏡、鉄剣、鉄鉾、鉄鏃、櫛、刀子、勾玉、臼玉、管玉、ガラス玉	土師器
68		比々多遺跡群	伊勢原市	丘陵斜面	円				鉄剣、鉄鏃	土師器、須恵器
69		千代南原遺跡 第Ⅵ地点SD02	小田原市	台地上	円	推定径36				土師器
70		八雲１号古墳	平塚市	砂丘上	円	13×11				土師器、須恵器
71		山ノ上１号墳	厚木市	台地先端部	円	推定径35			鉄剣、鉄釧、鉄鏃、刀子、鎌、紡錘車、やりがんな	土師器、須恵器
72		稲荷山第１号墳	厚木市	河岸段丘上	円	推定径27				土師器
73		金田上宿古墳	厚木市	台地上	円	推定径25			鉄剣、刀子、鉄鏃	
74		天神山古墳	厚木市	台地上	円	31×35				
75		松山古墳	伊勢原市	丘陵上	円	推定径34				
76		久野１号墳	小田原市	丘陵先端	円	径40				
77		岡津古久遺跡	厚木市	丘陵頂上部	不明			木棺直葬	銅鏡、鉄剣、鉄鏃、勾玉、臼玉	
78		前川坊山古墳	小田原市	丘陵上	不明				鉄刀、鉄剣、鉄鉾	

＊通し番号１・２は東京都大田区所在の古墳であるため、本表に掲載していません。



方位は、後円（方）部中心から前方部主軸の方向を示します。
例えばこの角度が25度の場合、「N-25-W」と表記されます。

古　墳　編　年　表

新潟 シンポ	西川 (相模)	『前方後円墳集成』	赤塚 (東海)	寺沢 (大和)	野本 多摩川下流域左岸	浜田 川崎市	鈴木 横浜市
1							
2	Ⅰ	纒向石塚					
3			廻間Ⅰ	庄内			
4							
5	Ⅱ		廻間Ⅱ				
6		ホケノ山		布留0			
7		1期 箸墓		布留1			東耕地1・2号方周 市道高速2号NO6. 3・4方周
8		2期	廻間Ⅲ		宝莱山 扇塚		稲ヶ原A1号方
9	Ⅲ	3期		布留2	亀甲山	白山	稲荷前16号 (稲荷前6号) 東野台2号 観音松
10		4期	松河戸	布留3	上野毛稲荷塚 新居里 砧中7号	伊屋之免 加瀬台4号	東野台1号 虚空蔵山　殿ヶ谷1号 関耕地1. 2号
		5期			野毛大塚 砧中4号 天慶塚	津田山2号	観福寺裏 関耕地5号 殿ヶ谷2号 稲荷前1号 駒岡山野 関耕地3号/殿ヶ谷3号 地神塚 カネ塚
		6期			八幡塚	加瀬台8号	日吉矢上 朝光寺原1号／山の上1号
		7期			御岳山	西福寺	朝光寺原2号 綱島／上の山2. 3号 長蔵寺裏
		8期			浅間神社 狐塚 庵谷	久保台	折本西原円形周溝墓群 朝光寺原3号 矢崎山 稲荷前3. 5号
		9期			多摩川台1号	桃ノ園　天神塚	
		10期			観音塚(横穴式石室)		

／（斜線）は、その左右の墳墓の時期がちがうことを示す。
……（破線）はその墳墓の時期が破線の中にあることを示す。

稲村 三浦半島	服部 東相模	立花 西相模
	秋葉山３号 秋葉山４号　秋葉山５号　上浜田５号	
池子遺跡群NO. 1-A地点		千代仲ノ町
三足谷遺跡		
松輪大畑遺跡		高森塚越 金目塚越 愛甲大塚 御所塚円形周溝／真土大塚山
	瓢箪塚（上浜田7）	御所塚 大久根・小金塚
神明谷遺跡・長井台地遺跡群佃嵐地点	太鼓塚（上浜田5号）　大（応）神塚	
八幡神社遺跡群八幡神社前地点 雨崎洞穴遺跡　間口東洞穴遺跡		吾妻坂
八幡神社3号？		山ノ上２号 上坂東１号
長沢1号		上坂東３号
蛭田		
	伊勢山２号	
八幡神社２号		
采女塚　八幡神社４号 向ヶ崎　蓼原		
大塚４号 大塚１号		

用　語　集

遺構編

直葬（じきそう）
棺を直接土中などに埋葬すること。棺を納める室や棺を覆う槨などは伴わない。

粘土槨・木炭槨（ねんどかく・もくたんかく）
遺骸を収めた棺を包み込む施設を槨という。粘土を使ったものを粘土槨、木炭を使ったものを木炭槨という。

方形周溝墓（ほうけいしゅうこうぼ）
弥生時代前期〜古墳時代前期にかけてみられる墓制のひとつ。方形に溝をめぐらし、中央部に埋葬施設をつくる。一辺数mから40m近くのものまであり、盛り土による墳丘の存在が確認されている例も多い。

壺棺（つぼかん）
壺を棺に転用したもの。骨の一部を入れる例が多く、土壙などの墓穴に埋納されている。

箱式石棺（はこしきせきかん）
板状の石をマッチ箱形に組合せた棺。薄く割れる石材や、板状に削った凝灰岩などを使用する。古墳時代のものは木棺を模倣しているため台形を呈する例が多い。

舟形木棺（ふながたもくかん）
木棺の一種で、片方の先端がとがっており舟の舳先(へさき)に似ていることからその名がついた。古墳時代前期に類例が多くみられる。

配石墓（はいせきぼ）
拳大〜人頭大の自然石あるいは割石を楕円形や長方形などに並べ、その内部に棺をともなわず直接遺体を埋葬する墓。

前方後円墳（ぜんぽうこうえんふん）
古墳の形の一種。遺体を埋葬する中心部分が円形を呈し、その前方に長方形あるいは台形を呈する前方部が付設する。

帆立貝形前方後円墳（ほたてがいかたぜんぽうこうえんふん）
前方後円墳の一種。一般的な前方後円墳にくらべ前方部が短い。

横穴式石室（よこあなしきせきしつ）
棺を納める部屋の一種。自然石・割石あるいは切石などを積み上げて部屋を作り、横に出入り口を設ける。５世紀代に出現するが、関東地方では６世紀後半以降に盛行する。これに対し、天井部を出入り口とする竪穴式石室は西日本を中心に古墳時代前期に盛行する。

纒向型前方後円墳（まきむくがたぜんぽうこうえんふん）
前方後円墳の出現をめぐって、纒向石塚をどのように理解するかという論争がある。調査を担当された寺沢薫氏は、これを古墳に含め、「纒向型前方後円墳」という概念を設定した。その定義は、①後円丘に比して、著しく小さく、低平な前方部を持ち、墳丘全長：後円部径：前方部長の比率が正しく３：２：１を原則としていること。②後円丘は正円形のものは少なく、扁玉形、倒卵形、あるいは不整円形を呈すること。③後円丘から前方部までは極めて緩やかスロープを形成して移行するため、平面的には後円部と前方部との間に「連結部」を形成する場合が多いこと。④周溝を有するものは、前方部全面の溝を欠くか、それが極めて狭小であること。

纒向石塚（まきむくいしづか）
奈良県桜井市太田にある全長93㍍、後円部径約62㍍、前方部長約30㍍の纒向型前方後円墳。後円部は扁平形で、周溝は、前方部前端部で狭まる。埴輪・特殊器台等は見られないが、周溝より弧紋円板と鶏形木製品が出土している。葺石はある。埋葬施設、副葬品とも未調査のため不明である。

ホケノ山（ほけのやま）
奈良県桜井市箸中にある全長約90㍍、後円部径60㍍、前方部長30㍍　の纒向型前方後円墳。後円部は楕円形で周溝は、前方部前端部で狭まる。埴輪・特殊器台等は見られない。葺石はある。埋葬施設は不明である。

箸墓古墳（はしはかこふん）
伝倭迹迹日百襲姫命陵古墳。奈良県桜井市箸中にある墳長約280㍍、後円部径約157㍍、前方部長約120㍍の前方後円墳。後円部は５段、前方部は４段築造で、バチ形に開く前方部を持つ。墳丘は陵墓に指定されているため、立ち入りできない。したがって埋葬施設・副葬品は不明。特殊器台形埴輪と壺形埴輪が採集されている。前方部北側の調査が、1994〜95年に行われ、葺石と、布留０式土器が出土した。

遺物編

三角縁神獣鏡（さんかくぶちしんじゅうきょう）
縁の断面が正三角形で、文様は中国の神仙思想を反映した東王父、西王母、伯牙、黄帝などの神仙像と龍、虎や他の霊獣による構成をもつ。このことから中国製のいわゆる舶載鏡と考えられているが、ただ、中国本土にその出土例がないことから、工人が来日して製作したという考えもある。また、銘文に卑弥呼が魏に朝貢した景初３年という年号が記されているものがあり、魏志倭人伝にみる「銅鏡100枚を賜う」の鏡ではないかという説もある。

倣製鏡（ぼうせいきょう）
中国製青銅鏡の図柄などを模倣して、日本で製作されたと見られるものをいう。倭 鏡と呼ぶこともある。

土師器（はじき）
古墳時代の素焼きの土器。酸化焔焼成のため赤く焼き上がる。多くの場合焼成に際して特別な施設は用いない。

須恵器（すえき）
５世紀前半代に朝鮮半島から伝えられた陶質土器の技法をもとに日本で製作された土器。トンネル式の登窯を使い高温で焼き、その後窯を密閉して還元するため硬質で灰色を呈する。

布留式土器（ふるしきどき）
奈良県布留遺跡出土の土器を指標とする。一般的に前代の庄内式土器までが弥生土器で、布留式土器からを土師器とみる。その構成は、小型鉢・小型丸底土器・小型器台の三種供献土器である。

その他

テフラ
火山噴火時に火口からガスとともに出てきた固体の破片。降下火山砕屑物。広い意味での火山灰。

「新潟シンポ編年」（にいがたしんぽへんねん）
石川県漆町編年や愛知県廻間編年を参考に畿内第Ⅴ様式から布留２式までの間を10区分したもの。1993年の日本考古学協会の新潟大会で提案された。

「前方後円墳集成編年」（ぜんぽうこうえんふんしゅうせいへんねん）
発掘調査の有無に関わらず,広く存在し，時間的変化を顕著に表すものに,埴輪と須恵器がある。そこで川西宏幸氏の円筒埴輪編年（「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64巻２号〈1978年〉)と、途中の時期からは田辺昭三氏の須恵器編年（『須恵器大成』〈1981〉)を基本にして作られている。近藤義郎編『前方後円墳集成』〈1991年〉

MEMO

平成９年度考古学入門講座

神　奈　川　の　古　墳

—その出現と展開—

１９９８．２．２２

発行　神奈川県考古学会　会長 寺田兼方

編集　平成９年度神奈川県考古学会　講座担当

伊丹　徹・加藤　緑・後藤喜八郎・村澤正弘

神奈川県考古学会事務局　平塚市北金目 1117 東海大学文学部考古学研究室内

Photo: 伊勢原市小金塚古墳